

成·寿

21卷

SEIU

夏季号

1993年



横濱善光寺刊

苦を受け止めて

「すべての行は

くるしみなり」と

かくのごとく

智慧もて知らば

彼は

その苦しみを厭うべし

これ清浄に入るの道なり

(法句経)

大本山総持寺祖院



浩然と屹立する大本山総持寺祖院の山門。前は、はくじきょう白字橋。



仏殿。客殿を兼ねている。襖には、山岡鉄舟の雄渾な書作品がある。





僧堂。内部の正面には、「選仏場」の大額がかかげられている。渡辺玄宗禅師が遷化される前年(94歳)に書かれた。



経蔵。江戸時代の建築。屋根の勾配の曲線が美しい。



伝燈院。ご開山瑩山禪師のご靈廟(開山堂)。



衲衣を着て、その上に袈裟(大衣)をかけた僧形のすがた。法界定印をむすび、結跏趺坐している。頭上には、化仏・阿弥陀如来を安置。慈雲閣ご本尊観世音菩薩。



慈雲閣。明治31年の火災をまぬかれた。祖院で最古の建造物ということになっている。いわば総持寺の伽藍の原点。



瑩山禪師頂相

大本山總持寺藏



幻人心識
處：最親
自古靈妙
非吾非人
自贊

峩山禪師頂相

大本山總持寺藏

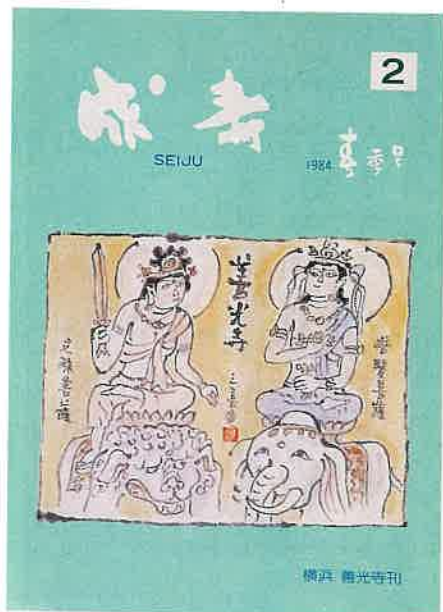
『成寿』のあゆみ

～創刊号から第20巻まで～



1983年(昭和58年)夏季号にはじまった『成寿』も、1993年春季号で第20巻となりました。これを一つの区切りとして、この10年間を振り返ってみたいと思います。

▶ 一九八三年 夏季号 創刊号
 カラー◆開創十五周年記念式典によせて
 カラー◆開創十五周年記念茶会
 特集◆開創十五周年記念式典
 “偉業を讃えて”
 座談会◆善光寺0歳から15歳まで
 64頁



◀ 1984年 春季号 第2巻
 カラー◆二つの得度式
 カラー◆善光寺収蔵品
 留学僧派遣育英会の発足

64頁



▶ 一九八五年 夏季号 第3巻
 カラー◆南方仏教の仏・法・僧
 座談会◆タイの僧院での生活
 第一期留学僧論文

80頁



1987年 夏季号 第7巻
 カラー◆インドへ
 旅行記◆インド旅行記(佐藤俊明)
 特別寄稿◆インド留学のころ(高崎直道)
 第三回留学僧論文

106頁

1988年 春季号 第9巻
 カラー◆詩
 カラー◆二童子開眼法要
 特別寄稿◆日仏セミナー
 (フランス・パリで講演)
 講演◆仏との出逢い(錦戸新観)
 ▼

106頁



成書 SEIJU 1987 冬号

第8巻



横浜 善光寺刊

▲
 一九八七年 冬季号 第8巻
 カラー◆ニューヨーク・マウンテンセンター
 カラー◆タイ留学僧激励
 カラー◆美術シリーズ
 特別寄稿◆禅について(鎌田茂雄)
 講演◆ふるさとへ還るおみやげ
 (遠藤太禅)
 122頁

一九八八年 夏季号 第10巻
 カラー◆タイ ワットパクナムよりの奉迎仏
 特集 ◆タイ法式による得度式
 調査・研究 ◆アジアの遺跡保存と日本人(石澤良昭)
 112頁



第 11 巻

成者
 SEIJU
 1988 冬季号



1989年 春季号 第12巻
 カラー◆ロス・ゼンマウンテンの法戦式
 特集◆前角老師の偉業(佐藤俊明)
 128頁



▲1988年 冬季号 第11巻
 カラー◆中国の仏
 特集◆海外留学僧派遣育英会の将来について(東隆眞)
 第四期育英生入選論文
 106頁

成書

SEIJU

1989 秋 季号



横浜 善光寺刊

▶ 一九八九年 秋季号 第13卷
カラー◆燦然と輝く大日如来
特別寄稿◆世界的視野に立つ宗教
家の育成を(山田恵諦)
対談◆世界に活眼を開く人材を
育成したい(庭野立正校成会会長・
黒田任職)

138頁

成書

SEIJU

1990 春季号



横浜 善光寺刊

◀ 1990年 春季号 第14卷
カラー◆甚妙泰佛国土を歩く
カラー◆タイふれ合いの旅
特集◆ロイ・カトーンの祭り

136頁

成書

SEIJU

1990 秋 季号



横浜 善光寺刊

▶ 1990年 秋季号 第15卷
カラー◆志は仁なり 韓国を歩く
カラー◆韓国ふれあいの旅
特集◆韓国仏教の現状と今後の
展望

第六回派遣僧入選論文

150頁

1991年 秋季号 第17卷

カラー◆二仏像成り御堂に坐す

カラー◆開山・榎庵白純大和尚

十三回忌法要

特集◆二仏像成り御堂に坐す

講演◆激動する世界の旅(伊藤博)

第七回育英生入選論文

▼ 160頁



▲ 1991年 春季号 第16卷

カラー◆照耀一念佛 台湾を歩く

カラー◆台湾ふれあいの旅

特集◆台湾仏教交流の旅

164頁



一九九二年 春季号 第18卷

カラー◆韓国・袈裟拝捧の旅

カラー◆ビルマ・世界最大の仏塔

「シユエダゴン・パゴダ」

カラー◆ミャンマー・慰霊の旅

鼎談◆仏の姿に打ち込みて | 仏師・錦戸新観師に聞く

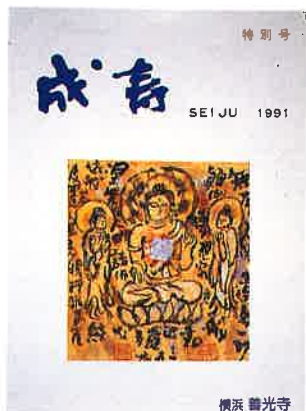
178頁

1993年 春季号 第20卷
 カラー◆スリランカ
 カラー◆永平寺と総持寺祖院参拝
 の旅
 特集◆スリランカ訪問記
 講演◆明日を生きる(黒田方丈)
 ▼ 168頁



▲ 1992年 秋季号 第19巻
 カラー◆アンコール遺跡
 カラー◆追悼 故黒田嘉さま
 特集◆アンコールワット紀行
 第8回育英生入選論文
 172頁

1991年 特別号



1985年 特別号



昭和59年 特別号



◇ 成寿歌壇 ◇

わが道は念と行との二人づれ

行くべき処着く処仏まかせの旅路かな

手にあまる大き荷物を背負いつつ

今日も山路を登りゆくわれ

とし重ね老の身なればしみじみと

そのさみしさとその実を知る

(東京都 錦戸 新観)

巡拝の金剛杖にとりすがり

室戸岬の荒波に立つ

小波立つ池の面は白鷺の

影なうつつして朝日輝く

(香川県 豊永 緑)



カラー	■ 大本山総持寺祖院	成寿のあゆみ	18
巻頭言	●	22
特集	● 瑩山禅師の二大誓願	36
	● 大本山総持寺祖院の伽藍	39
カラー	■ 仏縁にもよおされて	マレーシアとタイ	43
	● 仏縁にもよおされて	56
特別読物	● 出逢い(その一)	66
連載	● くらしの中で読む『正法眼蔵』	76
	● 武徳君の立職を祝す	83
エッセイ	● 知識と知恵	90
留学記	● 二度目のインド国内旅行(1)	93
	● 風の葬送	102
	● 森山師を送る言葉	108
	● 四月のお茶会 桜の花の下で	清和会が開かれる	111
カラー	■ 観桜茶会	113
声	『明日に生きる』に寄せて	117
善光寺ニュース	126
読者のたより	134

題字・さし絵
クラブピア

伊藤三喜庵
五十嵐千彦

『手漉の紙』より

134 126 117 113 111 108 102 93 90 83 76 56 43 39 36 22 18

巻頭言

昨年秋、善光寺婦人会主催のもと、かねて念願の永平寺及び総持寺祖院の参拝を実施しましたところ、参加の皆様がたよりたいへんよろこばれましたことはまことに望外の幸いでございました。

曹洞宗大本山、永平寺と総持寺はひろく国中に知られ、参詣、拝観の人波は絶えることなく、ほんとうに結構なことであります。

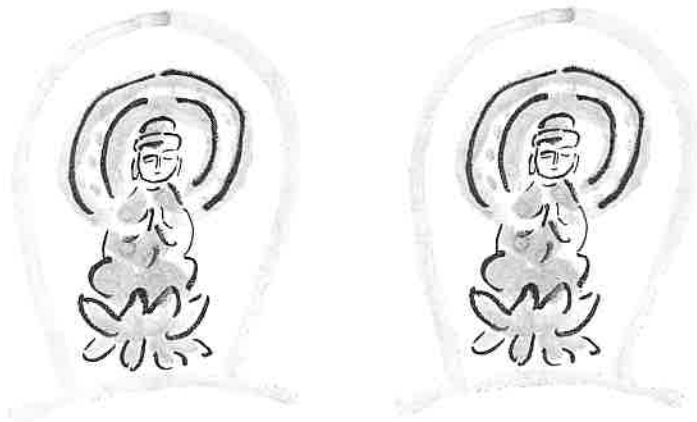
しかし、総持寺がかつて六百年の間、能登半島にあつて、曹洞宗の教線を国中に弘めた中核であつたこと、横浜鶴見に移つてきたのは近々八十年に過ぎないことを知る人は年々減少してきております。この時に祖院を団体で参拝したことはまさに当を得たことであつたと自負するとも、曹洞宗の寺々及び檀信徒はもつともつと祖院に対して関心を深くしなくてはと痛感する次第であります。

それで本号は東先生に祖院紹介の一文を寄せていただき、グラフィックに

は祖院の点描を載せることにいたしました。祖院を大事にいたしましたよ
う。

次に、今春はマレーシアに行つて参りました。佐藤老師の旅行記が載
つておりますのでお読みいただけますが、善光寺留学僧育英会は思わぬ
ところから要請を受けるまでになりました。これは当初予想もしなかつ
たことでもあります。

さて、昭和六十一年インドを振り出しに佐藤老師とともに関係各国を
まわつてきましたが、この程往訪十カ国に達しました。さいわい明年は
当寺開創二十五周年に当りますし、留学僧は延べ四十七名、派遣先は十
八カ国になりましたので、目下記念事業を検討しておりますが、その一
環として旅行記の出版をと考えております。ご期待をお願いする次第で
あります。



靈妙な槌音

佐藤俊明老師「スリランカ訪問記」(成寿20号)より
「ダンブラ石窟寺院の洞窟に
二千年にわたって響いた
仏像を彫る槌音」に感応して

赤 間 義 徳

「海外に留学僧を派遣し

仏教の振興、世界の平和に

貢献しよう」

大誓願の鉄槌を

黒田方丈さまが

宗派と国境の壁に うちおろした。

昭和六十年以来

留学僧は 四十七名



派遣した国は 十八か国

留学僧たちも

鉄槌をふるって

ひとびとの心に

仏法を刻んでいる。

われら 檀信徒は

毎食のひと口を

献じさせていたたく

喜びに溢れて

耳を澄まそう。

地球全体に くまなく

仏法を刻むまで

たゆまず 彫りつづける

方丈さまと留学僧たちの

靈妙な槌音を

聴くために。

瑩山禪師の二大誓願

善光寺住職 黒田武志

日本曹洞宗総持寺の開祖・瑩山禪師は、二十歳のとぎ、

「私は観音さまのように、この世の悩める人たちを、一生をかけて救っていきたい」と願う、

と願う、二つの誓願をお立てになりました。

一つは、この世が続く限り永遠に、道元禪師の教えを守り広げていくという『白法守護』の願。そしてもう一つは、虐げられていたり、社

会的にも低く見られていた女性を救おうとする『女人救済』の願です。

この二大誓願は一生護持されたものですが、お亡くなりになる直前にも、あらためてお立てになっていきます。これは、死んでしまえばもうそれで終わりというのではなく、禪師が、三世を貫く永遠の立場に住しておられた方だったからでしょう。



瑩山禅師像

白法守護の誓願

○ 宗派の成立と禅宗の登場

まずは、仏陀の本当の心を求める、ほつ発菩提心の願いである、『白法守護』の誓願を中心にお話しいたしましょう。

仏教には、それは数多くの経典がありますね。その説くところはさまざまで、互いに異なっていますので、すべてを読破して仏教を理解し安心を得ることは、とても難しいことでした。そこで、多くの中から、よりどころとなる特定の経典を選び出し、信奉することによって仏陀の真の意図を明らかにしようとする努力がなされました。そこから「宗派」というものが成立することになったのです。たとえば、『けこん華嚴経』を信奉する華嚴宗、『ほけ法華経』を信奉する天台宗、『三部経（無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経）』を信奉する浄土門……といったふうに。

ところが、ここに一つの批判が生まれてきました。「数多い經典の中から特定の經典をよりどころとするのでは、仏教を正しく理解することはできない。本当に理解するためには、經典の生まれいずる根源にさかのぼらなければいけないのである」と主張する宗派が現れたのです。

それが坐禪宗、すなわち禪宗でした。釈尊がお経を説かれるときは、必ず禪定に入られた。これが經典の生まれいずる根源である。だから、坐禪の修行によってこそ、心の本性が明らかにされ悟りが得られるのである、という主張だったのです。

○ 教宗と禪宗を統一させた道元禪師

さて、禪宗以外の諸宗派のことをひっくり返して、「教宗」といい、先にもいいましたように教宗は經典によって成立しているのです。「仏語宗」ともいいます。これに対して禪宗は、文字・言

語を離れ、心に依ることを重視するため、「教外別伝、不立文字（悟りは、心から心に伝わるものであり、言葉によって書けるものではない）」の立場から、文字や言語にとらわれることを極度に嫌い、それがこうじて、釈尊の説かれた經典までも軽視するようになりました。

そうした行き過ぎの禪宗のあり方に疑問を持ち、対立する教宗と禪宗を發展的に統一させた仏法を説かれたのが道元禪師でした。禪師は、禪宗と称するものは、「仏道をやぶる魔なり。仏祖のまねかざる怨家なり」「宗の称を立せん。如来の弟子にあらず。祖師の児孫にあらず。重逆よりおもし」（『正法眼蔵』仏道の巻）とまでおっしゃっています。かなり厳しいお言葉ですね。しかしその真意は、釈尊の菩提樹下における成正覚を頂点として、それに至る手だてとして説かれた經典は、すべて正伝の仏法そのものであり、一宗一派を分立することは許しがたいこと

であるというお気持ちだったので。

○ 宗旨を世に広げた瑩山禅師

道元禅師はいうまでもなく、曹洞宗の開祖ですが、この、曹洞宗^{ごう}という宗名が世に広がり、今日に至る大宗門となったというところに、実は、瑩山禅師登場の歴史的意義があるのです。道元禅師が、出世間的、脱俗的、理知的、学究的で、宗旨の確立に理想的であったのに対し、瑩山禅師は、世間的であり、情意的であり、実践的に宗門の開発に秀でておられました。つまり、道元禅師は創業の精神能力がこれ以上になく優れていた方で、瑩山禅師はそれを絶やすことなく、正しく大きく広げ続けていくすばらしい才能をお持ちの方だったということですね。

瑩山禅師は、道元禅師の宗旨・白法を守り、よく時代の流れに調和させ、広く大衆に行き渡らせました。しかし、大衆化したとはいっても、

正伝の仏法を水増ししたものではありません。他者を救おうとする大乘的立場に立った『只管^{しかん}打坐^{たざ}（悟りを求めたり、想念を働かすことなく、ただひたすら坐禅をすること）』の修行生活を自ら行いつつ、その禅風を社会に浸透させていったのです。その様子は、釈尊から永平二祖懷奘禅師に至る、仏祖の伝記と法の光の輝くさまを説き示した『伝光録』をはじめ、その他の著作でも明らかです。

○ 永光寺と総持寺の開創

このような瑩山禅師の教化伝道は、世の多くの人びととご縁をつくり、優れた後継者を育成するとともに、多くの寺を開創するというすばらしい事蹟を生み出していったのでした。

まずは、瑩山禅師が開創された永光寺についてお話ししましょう。

今の石川県羽咋市酒井町、当時の酒井保とい

うところに酒匂八郎頼親さかわけの はちろう ちかという地頭職かがおり
ました。その娘さんは、信州の海野三郎滋野信直なほの妻となりましたが、この娘夫婦は、瑩山禅師を深く尊敬し信じ、おすがりして、仏の道を日々熱心に学んでおりました。そしてついに、禅師にお入りいただくことを願ひ求めて、一寺を建立しようと発願し、正和元年（一一三二年）、禅師四十五歳の年の春、酒井保の山を禅師に寄進したいと申し出たのです。そのときの夫妻の言葉はまことにすばらしいもので、

「この山を寄進いたしますので、どうかここに居住していただきたい。寄進したからには、この場所がどんなに栄えようと衰退しようと、また禅師がたとえ破戒僧になりさがろうとも、さらにはこの土地を他の誰かにお与えになりましようとも、いっこうにかまいません。私たちは、再び管領する気持ちはございません」
という、至誠あふれるものでした。

瑩山禅師は夫婦の心からの願ひを受けて、その翌年、正和二年、四十六歳の八月にここに茅屋を結んで庫裡（寺院の台所に当たる建物・住職の住むところ）として移られ、終生過ぐす地と定められました。

永光寺はこのようにして開創され、十一年後には禅苑としての規模が整うことになります。しかし、はじめてここにお移りになった頃は、茶湯に松の葉を煎じ、食器の代わりに柏の葉を用い、供養の施米を受けるときは小さなお碗を使い、修行の雲水は飯庫裡や方丈（四畳半ほどの住職の居室）で接待せざるを得ないほどの、きわめて質素な、乏しい物質生活の日々だったのでした。

永光寺が整備されつつある間に、一方では総持寺が開創されました。

それには不思議ないきさつがあるのでお話ししましょう。



永光寺と同じく能登国（現在の石川県）の鳳たけ至郡げしくんくしびのしま櫛比おか荘しやうに、諸岳寺もろおかという、行基菩薩の開基のお寺がありました。ここは、五百年來、観音菩薩さまをご本尊とした、庶民の信仰厚い霊場でした。

さて、このお寺の院主は、定賢じやうけん律師りつしといいましたが、元享元年（一二三〇年）四月十八日夜、（瑩山えいざん禪師五十四歳の年）たいへん不思議な夢をごらんになりました。本尊の觀世音菩薩が夢枕に立たれ、こう告げられたのです。

「いま、釈尊の第五十四世でいらっしやる尊い人が、この国の酒井保の洞谷山（永光寺のある場所）に出世して、大いに仏の教えを説法されている。おまえは、すみやかにこの寺を、その聖者に譲り、永く仏法を發展させる道場にしなければいい。」

一方、それからまもない四月の二十三日の明け方、永光寺の禪堂で坐禪をしておられていた

瑩山えいざん禪師も、ふと、縁起のよい夢を感じられました。それは次のようなものでした。

観音さまが威嚴のあるりりしいお姿で、手には未敷みぶきの蓮華をお持ちになり、こつ然と現れ、「私はある一つの寺基を、師に与えよう」と告げられ、禪師を誘って古刹の三門に連れていきました。そこでは、多くの人びとが、礼儀正しく出迎えています。禪師は思わず、「總持寺の一門、八字に打開す！」（總持寺の家風が世界に広まるであろう。）

と入門の挨拶を述べられました。その樓門には、錦繡きんすいで装丁した『大般若經』六百卷が備えられており、その手前には放光菩薩がまつられ、周囲には堂塔伽藍が美しく並んでおりました。

瑩山えいざん禪師は、坐禪中、夢からさめてしばらく感嘆しておりましたが、それから何日か日は流れていきました。

一カ月半ほどたった六月八日、瑩山えいざん禪師は教

化の旅に出られ、諸岳寺の近くにもまいられ
ました。その噂を聞いた定賢律師は、あの靈夢の
お方はこの人にちがいないと確信し、一山の多
くの人びとともに出迎えられました。話がたま
たま靈夢のことになり、二人の靈感がまったく
符合していることに驚いた定賢律師は、夢のお
告げにしたがつて、一山をあげて献上すること
にしたのです。申し出をこころよく受けられた
瑩山禪師は、夢で唱えた法語にちなんで、寺号
を「總持寺」、山号を「諸嶽山」とし、律院を禪
林に改めて、さかんに教化活動を展開されるこ
とになったのです。

○ 瑩山禪師の強い決意

ことしより 八幡やわたの神かみの あらはれて
わが立たつたの 守まもとなるかな

われ棲すむと 那坂なさかの山やまも 踏ふみならし
苔けのしたきて 人ひとぞ訪とひ来る

この二首の歌は、瑩山禪師のお詠みになられ
たもので、『太祖常済大師御詠歌』第一番・第二
番になっていきます。その解説をみてみましょう。
「ことしより…」という最初の歌は、禪師が
五十五歳のときの作で、あの、夢のお告げのこ
とを詠まれたものだと言われていきます。八幡の神
とは、仏法守護の神、八幡大菩薩のことです。
う。禪師は、この神さまの応援をととても喜んで
おられるのですね。

前にも述べましたように、永光寺を開創して
から永い間、貧しさに甘んじて仏道修行に励ん
でこられましたから、それを見ていた八幡大菩
薩が応援してくださったのです。その応援によ
って、仏法がこれからますます勢いさかんに栄
えていくであろう兆しがはつきりしたと禪師に

は思われ、その悦びの気持ちを歌に表したのでしょう。「わが立つ杣」の杣とは、樹木を植えて材木を採る山のこと、「守」とは「まもり」すなわち守護のことです。

「われ棲むと…」という二番目の歌は、最初の歌を詠まれた翌年、五十六歳六月四日、やはり、夢に關したことを歌に詠んでおきたいという思いで作られたものようです。歌の意味は、われ棲むと——（私がこの寺の住持として仏の修行を行っていることを、世の人びとも知っていることであろう）、那坂の山も踏みならし——

（那坂はさかまく波のこと。さかまく波のように険しく起伏の激しい山をも踏みならし、デコボコの山路が平らになるほど、次から次へと参禅問法の人が訪ねてくる）、苔のしたきて——苔いっばいの山路もいとわず大勢の人びとがやってきて、私の道場で修行に励んでくれる。これはまことに仏法の興隆である）ということであ

りましょう。

この歌のあとには、「ここを以て、子孫絶やすべからず。道人相続して、来際寺院興行。仏法断絶すべからず、これを知れ。後鑑のためにこれを記す」と書かれています。仏法の興隆を法孫たる者、決しておろそかにするでないぞ、ゆめゆめ断絶あるべからず、という瑩山禪師のお心が表れています。「これを知れ」という命令形の強い言葉にも、断固たる決意のほどが感じられますね。

○ 達成された『白法守護』の願

さて、白法守護に燃える瑩山禪師の名声は、いち早く中央地方に広まりました。当時の天皇・後醍醐天皇のお耳にも伝わりました。やがて天皇から十種のご質問がくだり、それに対する瑩山禪師の奉答がたいへん深く天皇のお気持ちにかなっていたので、元享二年八月二十八日、

天皇の意を伝える書・りんじ綸旨を賜り、総持寺は日本曹洞宗賜紫出世の道場となるのです。綸旨の要旨は次のようなものでした。

「能登国の諸嶽山総持寺は、中国の曹溪山、六祖大鑑慧能禪師の正しい法灯を継いで、それより洞山良价禪師に伝わる曹洞禪の奥深い道理を広く世の中に明らかに示してきた。それゆえとくに、日本に二つとない禪苑であるので、『曹洞宗出世の道場』として補任する」

この綸旨の下賜については、歴史的事実として疑義もあるとされますが、永い宗門史においては、総持寺はこの綸旨によって出世道場として一宗の本山たることが認められ、同時に総持寺を中核とする宗団が正式に「曹洞宗」と称するようになったと伝承されています。

それが今日の大宗門となったのであり、瑩山禪師の二大誓願の一つ『白法守護』の誓願は、めでたく達成されたのです。

女人救済の誓願

○ ご母堂の願いを受け継がれて

次に、『女人救済』の誓願について申し上げます。先ほども述べましたように、瑩山禪師は非常に世の中の多くの人びととのお縁が厚く、とくに女性に縁深いお方でありました。

女性を救いたいというお心の根源となつてゐるのは、禪師の母・懐観大姉の感化でした。この母君に向ける、ご恩への感謝の思いが、広く世の女性の悟りの心の開発へとつながっていくのです。

禪師五十一歳のとき、加賀の浄住寺にいらつしやつた母・懐観大姉が八十七歳でおかくなりました。

その臨終の枕辺でのご遺言、

「女性というものは、苦勞の多い運命に定められて生涯を過ごさなければなりません。どうぞ

薄幸の女性のために、本当に幸せになることのできる心の支えを与えていただきたい」

このお言葉が、心にしみ込んだのでしよう、男尊女卑の風潮はなほだしい当時、瑩山禪師は思い切ってこの悪い慣習を打ち破り、『女人救済』の願をお立てになったのです。

○ 女性の心を尊重

母・懐観大姉が亡くなった翌年、瑩山禪師五十二歳の年の八月六日、前にも述べた、永光寺開基・滋野信直夫人が永光寺にきて、出家得度したいと禪師に求められました。禪師は一時は躊躇しましたが、夫人の決意の固いことを知り、また、

「昔、永平高祖が中国から戻ってきて、京都の建仁寺にいらっしやったとき、私の祖母・明智優婆夷^{うぱい}を得度してくださったことがあります。私はゆうべ、このことを夢にみて、なつかしい



思いでいっぱいになりました。そんな翌日にこうしてあなたが出家を求めていらした。もしかしたら、あなたは祖母の再来かもしれないね」

といわれ、得度式を挙げられ、尼となった夫人を「黙譜祖忍」と名づけられました。

それから三年後、禪師五十五歳の年の六月十八日には、洞谷山下の勝蓮峰に「円通院」を建立し、これを祖忍尼に与えて、修練の地とされましたが、このときの様子を『洞谷記』に沿ってお話しましょう。

禪師は祖母・明智優婆夷と、悲母・懷観大姉の遺徳を慕って、ゆかりの十一面観音を円通院のご本尊としておまつりしました。あわせて禪師の頭髮とへその緒を白蠟の筒に収めたものを観音像の台座に入れて。そして、黙譜祖忍を寺の住職としました。禪師は、この円通院をお守りするため、母君の終生の念願だった女人済度の誓願の成就を祈る寺とされたのです。

祖母のために円通院を建て、開基・黙譜祖忍尼の道場とし、また、母のために宗門最初の尼寺「宝応寺」を建てて、明照尼を最初の房主と定め、その後継者は尼僧の中から選ぶようにいわれました。出家することもなかなか許されなかつた当時の女性にとっては、すばらしい心の支えができたことでしよう。

これらは道元禪師の男女平等、女性尊重思想の実現であるといわねばなりません。

「ひたすらに かける願いは あらたかや

玉の台に 紫の雲

南無常済大師 南無常済大師

この、『太祖常済大師御和讃』にも表れているように、瑩山禪師の、ひたすらな、ただ一筋の誓願は、あらたかな靈験となって、今日の大宗門を形成するにいたったのです。

日本國北陸道能登

掃比庄諸岳觀音堂者

行基菩薩建立也當庄最功

伽藍而 觀世音菩薩

靈驗無雙道場也草創年舊

緣記紛久然而右老相傳云

行基建立 浮屠語傳行基拜

立伽藍必雀不巢比堂自古雀

不巢誠知行基建立靈場耳

於是予又不求受當寺請而

與行禪法干時元亨元年

四月廿三日晚天在國國酒井洞谷而

感瑞夢當寺本為教院改欲為

車

自王后將相悉皆屏之祈請

產生平安當庄姬婦可祈之

靈驗必可揭焉矣為後鑑

記之諸人同心合力立當寺

山門仰國通 冥應至禱至禱

如受難記尚以猶務同十六日赤原重告云
昨夜四壁同桂山神光臨當庄

元亨元年六月

與性又山門外行門是山門為國通禱也

十七日託禱而披露

諸岳山松持寺中興沙門

釋迦牟尼佛立十四世佛法

瑩山 紹瑾記

瑩山禪師真筆・總持寺中興緣記

大本山総持寺・二祖峨山紹碩禪師が書かれた『総持寺開闢縁起』には、

「総持寺は観音大士の霊場として、その大士の靈驗あらたかなること、たとえるにものなし。ひとたび大士に祈願するところあれば、難産も立ちどころに除き、死児の命もただちによみがえるべし殊に霊場の当主・瑩山禪師は、釈尊五十四世の法孫にして、よく仏家の正法をつぎ、声誉はなはだ高し、さきに奏対するところの十種の法語は誠に得難き演法なり。この希有の霊場、この大禪師の居住所は挙げて皇運無窮の祈願所となると。日本曹洞宗第一の道場というべし。」

とあり、総持寺が仏の偉大なるお力の著しい道場であることが述べられています。私どもが、自分の利益になることだけを考えるのではなく、まごころを持って祈願すれば、その祈りは

伝わり、ただちに聞きとどけていただけるとう、ありがたい大本山なのです。

現在、総持寺は、横浜の鶴見に所在地が移りましたが、鶴見の本山からは、西の方に富士の霊峰を仰ぎ見ることができ、前には大いなる太平洋を見下ろすことができ、鶴見ヶ丘には、五十余棟の堂塔伽藍が建ちならび、まさに「玉の台に紫の雲」そのまま、瑩山禪師の偉大な誓願力の結実に目をみはるのであります。



大本山総持寺祖院の伽藍

横浜善光寺留学
僧育英会理事

東 隆 眞

曹洞宗 大本山・諸嶽山総持寺（神奈川県横浜

市鶴見区鶴見二一一一）の旧址には、その門頭に「大本山総持寺祖院」としてした大石柱（新潟県産赤御影石。岩本勝俊禅師筆。昭和四六年造建）が立てられている（石川県鳳至郡門前町）。

いまからおよそ六七二年まえの元亨元年（一三二一）五月のなかば、のちに曹洞宗の太祖と仰がれる瑩山禅師は、密教系の教院、諸岳観音堂を住持・定賢権律師から譲与された。諸岳観音堂は諸岳比古神社（羽咋郡の二所宮にある）の別当であったといい、そもそものは奈良時代、

行基菩薩の創建にかかわる古刹と伝えられる。

この諸岳観音堂がすなわち諸嶽山総持寺の前身である。瑩山禅師は、この教院を革めて禅院となし、みずから開山第一祖となった。

爾来およそ六〇〇有余年、諸嶽山総持寺は、日本曹洞宗教団発展の拠点として大いに盛えたのであるが、明治三十一年（一八九八）四月三日の夜、不慮の火災によって一山の諸堂宇の大半を失い、明治四四年（一九一一）一月、新天地を現在の横浜鶴見が丘に求めて移転したのであった。その後、能登門前の旧址も見事に復

興して、前述のごとく「大本山総持寺祖院」とよんで、近年は、その面目をいよいよ發揮している。監院丹羽徹象老師は、前監院故鷲見透玄老師の後をうけて平成四年六月一日に就任されたが、さきごろ横浜善光寺留学僧育英会の顧問にも就任された。八〇有余歳のご高齢であるが、若い雲水僧たちと起居をともにして太祖大師の祖廟に奉仕されている。まことに近来まれにみる高德の老師である。

ここで、簡単に、祖院の主な伽藍の要点についてご紹介してみよう。

祖院の主な伽藍といえば、山門、仏殿、法堂、庫院、浴室、僧堂、東司のいわゆる七堂伽藍を指すのはいうまでもないが、このほかに、伝燈院、慈雲閣、そして三松閣、経蔵、鐘樓、放光堂、待鳳館、紫雲台などがあげられよう。

このうち、慈雲閣、大祖堂、伝燈院、山門、経蔵をとりあげてみたい。

慈雲閣は、大祖堂の左側の奥まった高台にある。諸岳観音堂がこの堂で、火災をまぬがれた祖院最古の建造物という。本尊は行基菩薩の作という僧形の観世音菩薩。総持寺の伽藍の原点がここである。

大祖堂は法堂のこと。太祖堂と書いてある本があるが、大祖堂ではない、大祖堂である。一般の寺院の本堂にあたる。

内陣の正面には瑩山禪師をおまつりする。左右に高祖道元禪師と二祖峨山韶頌禪師および五院開基をおまつりする。また、堂内の左側には、本山守護三宝大荒神と定賢権律師をおまつりする。よそのお寺では例のない様式である。

総けやき造り。三二・七三メートル四方の入母屋造り。明治四三年（一九一〇）九月再建。正面の欄間にかかげられている樺材の透彫り一四枚は、瑩山禪師の一代記をあらわしたものの。

伝燈院は、開祖瑩山禪師の靈廟である。元祿

六年（一六九三）の再建。横浜鶴見の総持寺にも伝燈院がある。能登の永光寺にも伝燈院がある。すなわち開山堂のことである。

山門は、昭和七年（一九三二）九月に再建。

山門の楼上には僧形の地藏菩薩と観音菩薩（この二菩薩を放光菩薩とよぶ）をはじめ一六羅漢、五〇〇羅漢がおまつりしてある。楼上の正面の大扁額（およそ畳一枚分の大きさ）「諸嶽山」の大字は加賀前田利為の筆跡である。

総けやき造り。瓦葺き。楼門二階建て。間口およそ二〇メートル、奥行きおよそ一四・四メートル、高さ一七、四〇メートルという豪壮華麗な大山門である。この大山門が再建された原動力には、山崎心英という尼僧の辛苦が加わっているのである。

経蔵は、一切経を納める八角宝形づくりの輪蔵で回転するようになっていた。寛保三年（一七四三）、加賀前田家六代藩主吉徳の寄進。石川

県重要文化財指定。屋根の勾配が実に美しい曲線をえがいている。

なお、境内に、芳春院というお寺がある。加賀前田利家の奥方（法号・芳春院殿花顔宗富大禅定尼）の院号をとった前田家ゆかりの寺である。私は、現任職飯田徹宗老師（祖院副監院）には御高誼をいただいている。先代の渡辺頼応は、私の受業師、法幢師であったので、学生時代は、毎年、芳春院へ帰省した。かつて名布教師とうたわれた石田義道老師が芳春院の後任として、かの沢木興道老師を指名した。だから、世間では、沢木老師は、「宿なし興道」とよばれているが、必ずしもそういうわけではないのである。このことを知る人はまれであらう。

（駒沢女子大学副学長。文博）

主要参考文献 井上清司、桜井秀雄『総持寺』曹洞宗宗務庁） 佃和雄『能登 総持寺』（北国出版社）ほか

仏縁にもよおされて

マレーシア・タイ



▲リングム夫妻と黒田方丈

▼左から坂井氏、リングム氏、佐藤老師、黒田方丈



KURODA BUNKO の木札▶
を取付ける黒田方丈



▼ SATO TANK の木札を
打ち込む佐藤老師



▶ 記念植樹する黒田方丈

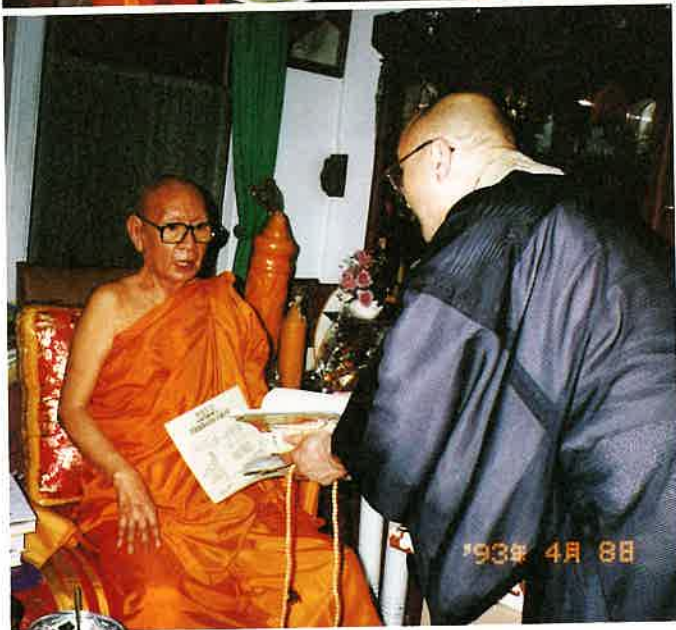


◀ 屋外坐禅場





▲ワット・パクナムにて
左からご住職、黒田方丈、
佐藤老師



▲ワット・パクナム副住職

▼シャングリラホテルにて





◀ 右から福田氏、佐藤老師、黒田方丈

▲ 右から落合師、黒田方丈、佐藤老師、キッティ・ワンソン師

仏縁にもよおされて

善光寺留学僧育英会
常任理事 佐藤俊明

仏縁

方丈さんがまだ若かりし頃、大本山総持寺で修行中、参禅指導を担当している時、一人の中年紳士が何回か臘八攝心や夏季攝心に参加していた。立川市在住の坂井司氏である。

この仏縁が三十五年後の今日、私たち二人をマレーシア訪問に導くことになったのである。

坂井氏ははじめ武蔵野の般若道場とか博多の聖福寺の門を叩き、臨濟禪に参じたのだが、機縁が熟さなかったため、曹洞禪に鞍替えし、よ

き師井上義衍老師に出会い、十年余その膝下で参禅弁道にはげんだ老練の居士である。

ニューヨーク港湾局在日貿易代表としての役職にあった坂井氏は、視野のひろい、そして海外に多くの知己を持つ国際人である。三年前に退職して自由の身になった坂井氏は、スリランカに工場を建てようとしている友人の協力要請に応じ、たびたびスリランカを訪れ、その途次マレーシアを通過したのであるが、坂井氏にとってこの国は、戦時中ビルマへの転属の際三カ月滞在した想い出の地で特に愛着を持ってい

た。たまたまスリランカの比丘に紹介され、マレーシア仏教団体を訪れている中に、クアラルンプール郊外に仏教信者を対象とした瞑想センターを開いているリンガム氏に出会った。話し合ってみると、彼の並々ならぬ禅への関心と瞑想センターをひろく活用したいという熱烈な願望を知り、孤軍奮闘しているその姿に感動し、

これはなんとか本腰をいれて協力してあげなくてはという気になり、リンガム氏また予期せぬ素晴らしい協力者の出現に無上の喜びを感じ、二人ともどもに相携えて禅風の挙場に精進しようということになった。そこで坂井氏は道場の一角に八畳間ほどの居室をつくり、日本とマレーシアの間を往還している。

まことに奇特な浄業を続ける坂井氏の、同行リンガム氏をひろく世に紹介してほしい、出来得れば留学僧も送ってほしいとの要請にもとづいて、今回の旅行が実現した次第。なお、留学

希望者については、リンガム氏は国際的視野に立っての活動を考えている禅宗僧侶で、英語の上達を望む人であればよろこんで迎え入れ、英語の指導にあたりたいという。リンガム氏にとって英語はほとんど母国語といえる。もち論センター滞在は食費を含めて無料とのこと。

リンガムさん

四月五日出発。成田空港第二ターミナルもマレーシア航空も私にとってはともに初利用の旅である。成田空港第二ターミナルはフランス人の設計になるものとか、まことに感じのいい建物で、チェックイン・カウンターと搭乗待合室の間をシャトルで結んでいる広々としたもの。ちよつと日本離れた感じがするが、飛行機に乗ってから、滑走路までジャンボ機の巨体を十分間も移動させるのだから燃料の消費も相当なものだろうと、余計なことながら考えさせられる。

さて、マレーシアの首都クアラルンプールはバンコクとほぼ同じ経度なので時差は二時間と
思っていたら実は一時間だけ、これまた不思議
なものの一つ。飛行時間は直行便で七時間二十
分なので、現地時間午後四時五十分、スバン国
際空港に到着した。クアラルンプールの中心か
ら西へ二二キロの地点にある空港である。

空港には坂井氏とリンガム氏夫妻が出迎えて
くれた。リンガム氏はよほど写真が好きとみえ
て、私どもの姿をとらえてはさかんにシャツタ
ーを切っている。そのカメラ、聞けば三十年前
に買ったものとかで、今日の日本ではお目にか
かることのできないオールド・カメラであるが、
それ以上に驚いたのは氏の愛車ボルボである。
日本ではポンコツとして誰一人かえたりみない
であろうほどの痛々しい古物である。私は『正
法眼蔵随聞記』の「学道の人は尤も貧なるべし」
という言葉を思い出し、リンガム氏が真実弃道

クアラルンプール市内



の士であることを感じ取った。

ホテルに着いて、坂井氏の通訳を介して、リシガム氏の心の遍歴を垣間見ることができた。

彼はインド系マレーシア人で、熱心なヒンドゥー教徒の家に生まれ、その感化を受けて子供のころはよくヒンドゥー教寺院をお参りする熱心な信者だった。それがカソリック系の中学校に入るに及んで、十五歳のころからカソリック教への熱烈な傾斜がはじまり、ほとんど毎日のように礼拝堂に通い、教会へは毎日曜欠かさずお参りし、手にはロザリオ（数珠）を持って常に祈りの言葉を口ずさんでいた。しかし卒業後は自分独りの信仰生活に沈潜するようになり、グループ活動との接触は次第に薄らいでいった。

一九五六年（マレーシア独立前）彼は英国政府からの奨学資金を得て渡英留学し、帰国後マ

レーシア政府に奉職した。この頃は特に宗教団体に加わらず、スポーツや社交関係に忙しく、結婚したのもこの時期である。（二一女をもうけ、彼女らはいずれも医師となって成長している。）

この時期、彼リシガム氏は経済的にも豊かだったが、社会の醜い競争や人間の飽くなき食欲さを見せつけられ、人生の歓びを失ない、深刻に悩むようになったが、彼の信ずる宗教は何等救いの手助けとはならなかった。

一九六六年、彼はさらに勉学を続けるため渡英留学した。ここで彼の宗教に対する関心が再燃した。そしてクアラルンプールに帰ってくる時、たまたま瞑想修行を続けている若い大学講師にめぐり会い、その影響で仏教関係の著作物をひろく漁ることになった。そしてクアラルンプールにおける上座部仏教の最大の寺院の住職とも知り会い、この人を手助けすることになり、世界各地へ送られるテープの作成、テキスト編

集への助力、ラジオ、マレーシアの仏教讃歌合唱プログラムの作成などに従事し、自らも日曜集会での法話、大学や他の寺院での法話もおこなうようになった。また仏教徒の特別修養会やセミナーなどに参加し、先輩僧侶に道をたずねたが、彼の真実探求の心を満たしてくれるものに出会うことがなかった。そこで彼は寺を去り、ヒンドウの先生のもとでヨガの修行をはじめ、またヒンドウ系のいろんな団体に加わり、勤務時間後それらの宗教団体のところで時間を過ごした。一九八一年にはマレーシアのギータ・ア・シユラム（ヒンドウ教典ギータの研究団体）の機関誌『神聖なる心に』に「ヨガを称えて」の一文を発表し、翌年の第六回国際ギータ会議では「心の再生と平和」についての論文を発表している。これと相前後して、国際精神学協会会長の要請によりヨガ教室をはじめた。そしてヒンドウ教やガンジーの教えを真

剣に学んだが、いずれも彼の心を満足させるものではなかった。

そこで彼はすべてを断念し、禅こそわが進む道と心にいいきかせ、独自の道を歩む決意をし、坐禅修行を実践し得る場所の探索を開始した。そして三年の後、さいわいにもバトウアランに恰好の場所を見つけた。

彼は全財産を投げ出し、ジャングルを切り開き、整地をおこない、修行道場の建築に取り組んだ。そしてその道場を「メタ・ビラ」(Meta villa)と命名した。Metaはパーリ語で「友愛の心」、villaは英語で「別荘」の意。

「メタ・ビラ」が建造されると、多くの友人や僧侶など、メタ・ビラを利用する人々の来訪がはじまった。現在は在家の仏教信者団体の月例集会にも利用されている。しかしまだ施設の利用は充分とはいえない。リンガム氏は中国系マレーシア人、さらに意欲的にインド系マレー

シア人に対し、禪の紹介をもくろんでいる。それは彼の真理探究の過去の心の遍歴の結果、やむにやまれぬ誓願である。

彼はいまマレーシアの人びとに坐禪を紹介しようとして懸命の努力を捧げている。

メタ・ビラ

クアラルンプールは「ガーデン・シテイ」とも呼ばれているという。なるほど、熱帯樹のこゝんもり繁った、街全体が公園のような緑豊かな街である。これはこの国の豊かさのシンボルでもある。道路もよく整備され、四通八達している。郊外に出ると道路の両側は見事な椰子の植林で、かつてのゴム林を椰子林に切り替えたものだという。造成ゴムの生産可能な今日、天然ゴムの採集は手数がかかり収益が少ないのにくらべ、椰子は捨てる物がないといわれるほど生産性が高く、ゴムから椰子への切り替えが出来る

クアラルンプール市内



なかつたスリランカにくらべるとその差は一目瞭然だといわれる。

椰子の林を通り抜けて西北にクルマを走らせると約三十キロしてバトウアーラン (BATU ARANG) という町に着く。最近町に昇格したばかりという小さな町である。この町の小高い丘の上に木立に囲まれた一角に建っているのが



「メタ・ビラ」建物入口

「メタ・ビラ」である。訪問者がなければクルマの音ひとつしない閑静なところである。

建物は約四十坪ぐらいで、坐禅ホールの三方を、応接室、図書室、三つの居室、炊事場、二つのシャワー兼用トイレ、それに「東京コーナー」と称する坂井氏の居室が取り囲み、南面が全部窓になっている。敷地は約一千坪で、来訪の宿泊施設、四畳半ぐらいの「クテイー」と呼ばれる小さな建物が二棟、それに屋外坐禅場、語り合いの広場などがある。みんな手造りである。よくもここまで頑張ったものだと感心する。

「文庫と水道タンクを作りたいので少々ご援助願いたい」ということで、黒田理事長も快諾した。リンガム氏は早速「KURODA BUNKO」
「SATO TANK」と書いた木札を準備して来たので、私たちはそれぞれの設置場所にその木札を打ちつけてきた。また、大きな木になって大きな実がなるといふジャックフルーツを二人



坐禅ホール内部

記念植樹



別々のところに記念植樹して来た。

リンガム氏は、「妻もこのごろはよく坐禅します。娘たちも私の生き方を理解して禅に関心を示しています」と言うが、生活の資をして社会的地位のシンボルである役職を捨て、来年からは完全に無収入生活にはいるという。ここまで来するには母娘の大きな抵抗があったに違いない。しかし二人の娘もいまや医師として一人立ちしており、今後は心おきなくこの道に精進できることであろう。

昼食近くになると、二人のメンバーがやって来た。一人は町の医師、いま一人は工場経営者だった。私どものお昼の会食に招いたものだった。

この機会に何か質問ないか、という坂井氏の誘導によりいろんな質問が出て、それなりに答えたのだが、その答えがたいへんわかりやすい

ということ、このことが翌日のクアラランプールでの別のグループとの会食の時も出て、わかりやすいテキストを作ってほしい。こちらで英訳するからということになった。

マレーシアは回教国なので酒は飲まない。三日間滞在の間、現地の人と二度会食したがいずれも酒、ビールは出なかった。この話は酒の上と実現するである



緑陰で歓談

うし、そうなればこれは大きな成果となるであろう。

再 会

四月八日、マレーシアに別れを告げて、十二時四十五分スバン空港を離陸、バンコクに向かう。一時間の時差があるので、一時間四十五分間飛んで午後一時半ドン・ムアン空港に着陸する。

留学僧の落合師と、日本留学を希望しているプラ・シャーンシャイ・キッティワソンの二人が出迎えてくれた。東京に帰る搭乗日時の変更手続で意外に時間を費し、ホテルに着いたのは午後五時頃だったが小谷亀太郎氏は根気よく長い時間待っておってくださった。早速所要の連絡をしてワット・パクナムに向かう。

二月の理事会で、

大韓仏教曹溪宗靈鷲叢林通度寺方丈

落合師(左)とプラ・シャーンシャイ・キッティワソン師



尹月下 禪師

スリランカ大菩提會會長

ヒデイガレー・パナテッサ大僧正

タイ国ワット・パクナム住職

プラタムパンヤーボデー大僧正

のお三方を名譽顧問に推戴した。その決定に基き、去る二月、理事長は韓国に出向いて尹月下禪師に辞令を手交し、三月には来日されたスリランカのヒデイガレー・パナテッサ大僧正に辞令を渡したので、今回辞令を持参してタイに立寄った次第である。

プラタムパンヤーボデー大僧正はことのほかよるこび、今後の協力を約してくれた。

ついで病気の静養中の副住職の河北邦雄師、プラ・パワナ・コーソソナーラ老師を見舞って帰った。

翌九日、落合師とキッテイ・ワソソソ師の兩名がホテルに来訪。同師の日本留学希望につい

て意見交換、引続いて福田千城氏と会う。

福田氏は今から二十七年前、まだ上智大学の学生だった頃、伊達木氏（現神奈川新聞社論説委員）と二人連れで、春休みを利用して貨物船に乗ってバンコクに着いた。上陸してみると、待つてはるはずの友人の姿が見えない。埠頭に立つてても仕方がないのでバスに乗ることにした。別に行くあてもない旅なので、一番遠くまで行くバスにしよう、乗ったバスがトンブリ行きだった。降りたところがワット・パクナムの近くで、おばあさんが何やら話かけてくれる。『ついて来い』日本人がいる』といつてもらしいことがおぼろげにわかったのでそのおばあさんについて行くと、そこがワット・パクナムで、日本の坊さんが四人いた。その中に佐々木さんと黒田さん、それに石附さんと佐々井さんがいた。（注 佐々井秀嶺氏はインドに帰化し、イン

ド仏教徒の指導者として活躍している。」

「何しに来た」「別にあてがない」「じゃ、寺に泊まれ。タダで済むからそうしろ」ということになり、二人ともサマネンというお小僧さんになって毎朝托鉢の同伴をした。

朝は五時に起こされるし、遊びには出れないし、逃げ出そうと思っていたら黒田さんが、ワット・リヤブという寺に日本人納骨堂がある。その掃除をするからいつしよに来いという。

嫌々ながら行ってみると、日本人物故者の過去帳やお位牌がある。それを掃除せというので、仕方なしに掃除をしていると唐行きさんの位牌がいくつもある。身体を張って異国で頑張ったのかと思うと胸を締めつけられるような気になったことを今でもはっきり覚えている。これが黒田さんとの出会いで、二週間ほどして別れ、その後マレーシア、シンガポールをまわって日本に帰り、卒業後、佐々木さんに「海外で働き

たいが、どこか使ってくれる会社はないか」と手紙を出したが、折返し、「ない」という返事が来た。仕方なく国内にとどまることにして日通の入社試験を受けて合格した。そこでそのことを佐々木さんに報告したら、佐々木さんは小谷さんにそのことを話してくれた。すると小谷さんは「日通をやめても来る気があるなら使ってみよう」というので、日通入社一日にして退職、バンコクに来たのだという。

バンコクに来て二、三職種を変えたが十年前から外食産業をはじめ、精進努力の甲斐あって福田氏はいま二十の店舗を擁する「大同門レストラン」を経営している。私たちはシーロム街という日本でいえば銀座通りに相当する一等地、センドラル・デパートの地下一階にある第十八号店に招かれた。

大同門レストランの売上げは目下のところ業界第三位とのことだが、ここ二、三年の間に五



福田氏の事務所にて

十店舗オープン、そして株式上場を目指しており、上場までは業界第三位の実績を確保したいと意気込んでいる。

事務所と各店舗がオンラインで結ばれており、コンピュータ化は業界トップの座にあるとこのことで、上場の暁にはバンコクからパタヤ、チェンマイ、南タイへの主要道路に多目的なロード・サービスの店舗開設を多目的なロード・サービスが目論み、夢をふくらませている。たのもししい限りである。

縁とはまことに不思議なものである。ホンのわずかに二週間、ワット・パクナムで出会った二人が、二十七年後の今日、片や世界中に留学僧を送る異色の寺院住職となってワット・パクナムを訪れ、片やバンコク屈指のレストラン経営者となって思い出の地に相会するとは。

思えば今回のクアラルンプールとバンコク訪問は二十年三十年も前の仏縁にもよおされたもので、仏縁の大切さを教えられる旅だった。

東郷 敏

出逢い（その一）

○からの出発

成寿春季号（二十卷）にて、波乱万丈に富んだ大圓和尚さまの、『明日に生きる』を楽しく、とても、おかしく壮快感さえ感じながら、一気に読ませていただきました。昭和四十年、△○からの出発▽成寿山善光寺開創のころに、おもいを馳せ、当時青春真直中の先生が、既に、時を変え、処を変えては、遠大な将来の夢を高らかに、お話ししておいでございました。人並みでない新しい思想と、新しい時代の、新しい布教の在り方に着目して、新しい寺を興したい、必ずや、寺をおこすんだと、発願利生（註）、いかにも、城でも築く意気であり、活力に充ちた、その頃の黒田武志先生を、想い出しております。若武者二十

発願利生（修證義第四章）
佛心を発し、佛心に生き、佛心の光明

と慈悲とに生きるこ
と。世の為人の為に(ま
ず自分ではなく、まず
人に)よかれと念願す
ることが菩提心(佛
心)。一旦、決心し、計
画し、誓い、約束した
以上は、それを全うす
る。

六歳の、輝ける青年僧であります。
それ迄、私は、先生の生い立ちや、
生れ育った環境を全く知る由もな
く、何を言うておいでなのか、寺
というものは、古く、代々と続い
てこそ△名刹▽の所以であり、い
まどき新しい寺をつくるなど、考
えも及びませんでした。

先生は、いつでも一方的にご自
分のお考えを吐露されるのであり
ます。曰く、私はここに百年の計
を建てたい。一宗一派にとらわれ
ず、ただあと始末だけするような
寺はいらない(単に葬式や法事な
ど)。これからは、世界に広く人を
求め、これからの青年達に未来を
託せる様な、人材育成の場をつく
りたい。そして自分の手であらゆ



1965年総持寺にて

る分野の、あらゆる人たちにチャンスを与え、世界の舞台に送り出し、世界観のある人を育てたい。そして、普く人心の救済をしたいなど、承りますれば、なるほど御説ご尤も、事あるごとにですから、私にしてみれば「一体、寺とは何ぞや」、とても凡人の私に考えられるようなことではなかった。当時あまりに遠大な構想に、唯々戸惑うばかりでございました。

なにせその頃から、地球規模のお話でありますから、ハアハアと笑いながら聞くより術がなかったのです。この先生、話しているうちに、どんな夢がふくらんでゆくよううで、何時間話しても、おさまらなくなってしまう。私は先生を見ていて、どうしてこんなに、単純明快でわかりやすいご性格なのか、なのはどうして思うことを、思うようにつくり上げてゆかれるのか、不思議で仕方がない。また、人の何十倍も気性が激しく、まるで野武士みたいに見えるのに、二人で相對しているとき、いつの間にか仙人みたいに枯れて見えてくるから不思議だ。ほんとうに若いのか、年寄りなのか、つかみどころがない。いいかえれば真実ありのままの御方なのかもしれない。いつでも無私の姿勢が貫かれており、全く私心私欲の無いところが、人をひきつける、大きな根源ではなからうかなどと、思ったりもする。それでいて、先生はいつでも、何に對しても真剣だから、お話ししていて、気が抜けそうで気が抜けず、私は困りました。こうして翻って、いま善光寺の足跡を觀れば一目瞭然、三十年前に、先生

が謂いつづけ、念じ続けておいでだったことが、いつの間にか、その通り、違えず、確実に、実行、実現しておいでなのでありますから、先生にしてみれば、何の不思議もなく、あたり前のことなかもしれません。先生は唯、天に課せられたご自分の道を約束通り、歩いておいでになったのかもしれない。しかも、人が歩いた道ではない、いつでも他人のマネをせず、創造的に、夢と理想に燃えて、ご自分の力で歩いて行かれる、そんな先生を観ていると、チャンスというものは、準備していた心に幸いしている様に思えてくる。そして今日もまた、限りなく△可能性への挑戦▽をしておいでなのである。この△可能性▽というものは、可能にするための努力を一生懸命しているもののみ与えられる特権なのかもしれない。いよいよ以て笑いごとではなかったようです。

無一文の私

善光寺育英会海外派遣留学僧も、すでに五十名を超えようとしている。これらの方々が、世界各地に学び活躍なさっている偉業は、一介の寺の成せる業ではない。しかも国籍、民族、性別、職業、宗派を問わずであるから、先生の大無辺の思想と御人格が伺われてならない。

(生を明らめ、死を明らかにするは) 佛家一大事の因縁(修證義第一章)

道元禅師の謂われる、まこと『佛家一大事の因縁』(註)か、先生は立派なご両親と立派な御兄弟に抱かれながら、いわゆる△清貧の思想▽ではありません

真実に生き、価値ある人生として生きる。死すべく生まれてくる人間の一生。こんなことを教わる環境を得る因縁（内因外縁）。

疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げて之を枕とす（樂しみ其の中に在り）（述而第七一五）粗末なものを食べ、水を飲み、肱を曲げて枕がわりとするような、極めて貧しい境遇の中にあつて、道を志す楽しみは、自ずからその中にある。

が、簡素で風雅な環境で成長され、或る時は仕方なく、又或る時は自ら求めて、苦勞に苦勞、修行に修行を積み重ね、その失敗だらけの青年期に、「羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦」と日本の津々浦々に一年有余も托鉢行脚し、論語の一説を借りるなら、『疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げて之を枕とし』（註）ながら、道に志し、又各本山での修行は幾多にも及ぶ、並をはるかに超えた修行中の御方。相對しているや、小さな会社の、あまりに小さな営業マン。日夜利潤追及に目をむき出して勤しんでいるわたくし。水と油、世界の異う先生との方向を簡単に共有するなど、難しいことではありません。

さて、少しづつ実現への道は開かれていたのでございましょうか、先生は語気も弾んで「どうするか、どうしよう。何をするにも、ある程度先立つものがある。さてとなれば△無一文の私▽いつも、何時もどうしたらよいか、私は考えている」と申され、顔をジーツと見つめて、お話しをされるのでありますから実に、破戒力と説得力があります。

「東郷さん、私の願いは、宗派にとらわれてしまふ様な日本の、枝葉の仏教ではなく、真の仏教を学びとるところにある。だからとて、決して、枝葉を軽んずるといふことではない。就中、幹が尊く、大地に這う、根と幹がなければ枝葉の生命はない。従つて、限りなく△宗祖を通して 釈尊に還る▽ことが、私に課せられた使命なんです。

山に登らばすべからく頂に到れ、海に入らばすべからく底に到れ：(永平広録) 山に登るならば必ず頂上、海なら底。そうでないといふ深い浅い(宇宙の広さ)が分からない。

故きを温ねて新しきを知る(以て師となすべし)(為政第二―二―)
古い事実をたずね究めて、そこから将来の新しい道を導き知ることが出来る。

述べて作らず、信じて古を好む(述而第七―一―) 古人の残したものに於いて考へを述べることはあつても、自分古道を固く信じ、深く古道を好んで、新しいものを作るものではない。

道元禪師はネエ、『山に登らばすべからく頂に到れ、海に入らばすべからく底に到れ、山に登り頂に到らざらんは、宇宙の寛宏を知らざらん、海に入りて底に到らざらんには、滄溟の浅深を知らざらん』(註)と教えてある。高さも、広さも、深さも、そこに行かねば、其処に立たねば、そこに坐らねばわからんのです。やがて、私はインドを訪ねます。そして、さらに、さらに、いろいろな国に、その佛跡を訪ね、お釈迦さまが、二千五百年前に、何を説かれたか、その歴史をも、この体で、肌で感じとつて、初めて仏教というものが、私に親しみ、私の血となり肉となつて、この真理を体現して、ようやく、釈尊の、仏教の真髓を、説く資格が私に得られると思つて居るのです。私の新しい創造は、論語の『故きを温ねて新しきを知る』(註)の道理に合致し、さらに『述べて作らず、信じて古を好む』(註)人間から発していると思つています』とおっしゃる。先生のお話しはいつでも、原典から説かれますから、難しいのです。特に私にはです。

新しい寺づくり

先生は、なお続けて、「私は決して、新規の説を作るなどということとは、毛頭考へて居る訳ではありません。ここところは、間違いがあつてはなりません。確認しておきますよ。やがて、求めているものをこの手でしっかりと掴み、私

の思うこと、考えていることを堅固にした上で、私の信念に基き、これを具体化するために、その拠点となる、新しい△寺づくり▽をやりたいのです。道元禪師ではありませんが、それこそ『自己の自己にてある、模索におよばず』の言に従うて、取り組みたいと思っています。そんな、こんな考えていると、私には、残された時間が、あまりにも微い。限られた私の人生の中で△何がやれるか▽たとえ一歩でも、少しでも、実現するためにはどうしても、急がねばならないのですよ。わかってくれますか」

どうもこの先生は、話す相手を取り違えておいでのようで、私は応えられない相手ではない。頼れる相手でもない。しかしそれをよく承知の上で、自分を盡し、自分を推しておいでのになる。対応力の乏しい私は、いつも、台風の吹き過ぎるのを待つしかない。ああ、ようやく通り過ぎたな、と気を抜いてしまっている、やがて吹き戻しがある。いつの間にか、私は分かった様な顔をして、合槌を打ってしまったている。理解できない自分が恥かしいとも思うのか、自分を繕ってしまったている。これが誤解のもとであり、やがて段々と本気になって、深みに入りこんでしまいます。

この延長線上に、先立つ根源である先代社長があることを、言わず、語らず、認識し共有していることは、誰よりも、二人がよく承知しておりました。私は応える力と知恵はなくとも、先生のこの大志を、なんとか叶えてあげられる

方法はないものかと、思い詰めてしまつて、識らず、知らずのうちに、立場を超えて、共有できる様になつていたことを思い出します。しかし誰だつて、やりたくて出来ないのが、人間の常ではありません。また思う方向の逆に運ばれてしまうのも、どうしようもない人の常であります。どうもこの御方には、それがない。

先生は、初めから、ご自分の中にキツチリと整理されたものがあり、その用意と準備は、見事整つていたのでございましょう。どうして、あの若さで、あの夢が描けたのか。私には、全くわかりません。おそらく、生まれ育つた環境と、あらゆる難行苦行のご体験と、幅広い、素晴らしい人脈に起因すること確かな様でございます。

しかし所詮、夢だけで、お腹がいっぱいになるはずがございせん。そのころ、お会いするときまつて、異常な空腹感に襲われるのは、何だったのか。そしていつの間にか、私の先代（のち開基）や現社長を介して、先生との結び目は、大きくなり固くなり、いよいよ先生の話術と魔術と情熱と溢れる人間味に翻弄されて行くのであります。ここらあたりは、何とも適当なことばで表現しにくいのでありますが、言い知れぬ、先生の人間的魅力にとりつかれながら、時は大きく動いて行くことを観じないわけには参りませんでした。兎角一時もジーツと静止しない、くろだぶし衛星でありますから、電波は、とき、ところ

構わず、どんどん飛び込んでくる、知る人ぞ知る、在り方、御方であります。さて、話が前後してしまいました、少し始めに戻ります。

はじめての参禅

昭和三十九年の夏、会社の「幹部社員教育」ということで、横浜・総持寺の夏季撰心会に、先代社長（のち開基）に連れられ、七名程、参禅致しました。先代をはじめ、現社長共々、誰一人として、経験のない者ばかりでしたから、その時のことを思い出しますと、今でも身が震える思いが致します。ここらあたりは、黒田先生と、私どもの葛藤と闘いの、大事な部分と心得ますので、少し、くわしく述べさせていただきます。

私は自分で求めて入山したわけではありません。会社で置かれた立場上、給料のため、ボーナスのためにと仕方なく参禅している有様でございましたから、不遜とは思いますが、始めから、心を陶冶するとか、少しでも、自分を高めるとかいう気持はなく、参禅に期待するものは、出発する前から失せておりました。従って逃げ腰であり、何とか、うまく時間を過せば、それで充分と心得て、ただ坐るだけで、事足りると思っておりました。どんな処でも大概、逃げ場所がありうまく隠れる場所がある、そんな処を必ずや、発見できるものと安心して臨んだつもりでした。でもこの世界は、勝手が違い面食らってしまいました。

1964年 7月



過去、経験したことも想像したことも全くない、異様な世界であることを知るまでに、ほんの僅かでした。やがて骨の髄まで思い知らされてしまいました。私が発見した、逃げて、隠れる場所は、何処も精鋭の闇魔さまがいっぱい駐屯しており、私はすっかり観念してしまいました。会社にとっても、当時、幹部社員が、七名も留守することは、経営上危険をとまなう大冒険。この年、会社も創業三十周年を迎え働き盛りでした。折しも戦後が終り、日本中が、東京オリンピック開催景気で、沸き返っており、国鉄自慢の東海道新幹線開業、さらに名神高速道路開通も、この年であり、日本が時間的に急に縮まって、何か大きな時代の流れと、経済成長も国際間競争力を増しながら、著しい変革をもたらしておりました。会社も変わらず、時代の波に乗り、経営環境も、にわかには明るく、大幅な増収増益と目を見張るものがあつたようです。それだけに、また、社員も急増し大事な社員教育が追いつかず、そのころ一夜仕立ての一人代表社員が闊歩し始めたことも、先代社長にとっては悩みでもあり、会社が飛躍する喜びよりも、むしろ社

員教育が、おろそかになる事を憂慮していることはよく承知しておりました。それだけに、先代社長は社内では、勿論のこと、どうしたら、幹部社員、管理者を、厳しくできるか、あちこちに教育の場を探し、此処もその一つであったようです。

この撰心会に期するところも、少なからずあることを、私も慮って、しっかりと取組まねば天罰があたると、やゝ反省しながら、いよいよ坐ることになりました。しかし、慣れた御方は何でもない事と思いますが、私は人一倍躰が固く、思うように坐れない。ただ坐るだけなのに、それができない。生半跏跏坐だと言われた。それでさえも、覚束無いのでありますから、五日間を過すということは、先代を慮つたにしても地獄の底でした。

それでも一日一日と坐り続けるわけですが、求められる、感謝報恩の気持ちどころではありません。坐が進むごとに、誓いとは程遠く、不平不満愚痴の蟠る姿勢でありますから、さぞ御指導の雲水方も、私に憐れみを、観じられたことでございましょう。精も根もつきるころ、私共を引率した先代も、率先垂範せねばならぬたてまえ、引くに引けず、随分参っておいででした。とき六十五歳の先代社長でした。

先代も、辛さを共有され、痛いなあ、ガンバレやア、わしも痛い、が頂上が見えたぞ、がんばろう、と、今にも頼りない私共が、この寺を飛び出しかねない

様子を見て取った、先代精一杯の声援とへおもいやりVだったのでございましょう。

葛藤と闘い

さて、私は入山以来、参禅中どうにも許せない、一人の雲水を、ハッキリ、見届けておりました。私共は、捕われの身。如何せん、この場では、手も足も口も出せないダルマさん。数ある雲水の中で、飛び抜けて、厳しく、少しの油断も許さず、見逃さず、続けざまの指導と警策はズッシリと、食い込んでくる始末。身を削り、骨を砕く様な入れ方と、堂を真一つに割る様な、大声で叫ぶ。「コラッたるんどる！」はまだいい方で、「貴さま死ぬエッ！」とくるから、思わず、躰が天井に吹きあがってしまう。この雲水、教えるのではなく、ドナリ散らすようなあり方に、私はいつの間にか見えない背後の敵と、相対しているような、変な気概が起っていることに気付きませんでした。何処に持っているいきようもない、苛立たしく、遣瀬無い気持ち、何やらこの雲水に一点集中してしまい、必ずや、仕返しをしてやらねばと終り近づくにつれて、あきらかに、この雲水と、戦闘状態に這入っておりました。これまで一度でも何らかの経験があれば一種の気合いと、思うたのでありましょうが、環境が環境だけに、この理性なき輩、血気盛んな年頃だけに、本気で闘っているのですから危い



(何を四悪と謂ふ。)教へずして殺す、之を虐と謂ふ(堯日第二十二) 人を教育せず罪を犯したからといって殺すのを虐、平素の戒めをせず俄かに出来るようになれば殺すというて出来ねば殺すのを暴、命令をゆるやかにして期限を嚴重にせめたてるのを賊、与えねばならぬものを出し洩る、いかにもケチを小役人根性、これを四悪と謂ふ。

参禅は身心脱落なり。身に所作なく、心に思量なし。(不思量にして現じ、不回想にして成ず)(洞谷記・瑩山禅師語録)

ものでございます。

参禅会での教え方は、一度限り、最大効率を狙って、実に簡単明瞭、しかし作法ルールの濃やかさ、メンタルなもの含めて非常に難しく、一度や二度でわかる様なものではありません。黙って坐れば、全て、解決というわけには参りません。孔子の『教へずして殺す、之を虐と謂ふ』(註)、多分、会社や職場でも同じような過ちをしているのでありましょう。つくづく反省させられました。雲水方も、きつと教えたつもり、わかっていくれるつもりであったことと思います。如何せん積極的に受け入れようとする私の△素直さ▽がないのでありますから、わかり易い佛教の教えを、わかりづらく、親しみにくくしてしまったこと、私自信に原因すること否めません。初めから、坐る動機、目的が明らかに間違っておりました。人に知られるための坐禅であり、自分の修養のための学問でなかったことが悔やまれます。従って坐っていても、形はあれど姿がない。姿はあれど心が無い。何とも情けないこと、恥かしいことこの上ありません。瑩山禅師は『参禅は身心脱落なり。身に所作なく、心に思量なし』(註)と教えてくださいました。これまでの、心の迷いや、とらわれ束縛されている、自分を解放して身も心も、おだやかさを取り戻すことである。これを身心脱落という。しかもそこでは、もはや、右往左往した心も行動も表現もなく、小賢しい考えなど一切生じないものだ。と、喝破しておいでございま

す。私は、あべこべでありますから、どうにもなりません。後にも先にもこのような不心得を持ったことは、全くありません。

まことに往生際の悪い参禅者となってしまいました。お陰さまで、私の葛藤と闘いゆえに、いくらか痛みも分散し、ようやくどうにか打ち上げの太鼓を聞くことができました。その瞬間、大声上げてそこら中、走り回りたい訳わからぬ、感動を押さえることができませんでした。

のち、先代社長の述懐に「自分も三日目ぐらいまでは、死んだほうがよいと思うほど辛かった。四日目ごろへやれるVという自信がついた時は、うれし涙が止まらなかつた。これは一生忘れることはないと思う」(昭和39年・成寿ゆり11号)と書き残しておられます。「また社員が警策でたたかれる時は、自分がたたかれるよりは、十倍もつらかつた。また坐が終るごとに、元気で頑張っている顔を見ると、自分のこと以上にうれしかつた」と、残しております。私はこんな先代の御気持など知ろうとする、余裕が全くありませんでした。

先生との出会い

さて、闘い終って、解放され、間もなくお互いさま、ホツとした気持で、思いの感想を述べあっておりました。その時、異口同音やっぱり一人の雲水について、大なり、小なり、尋常でない感情が残っております。先代にこの

愛語、利行、同事（修
證義第四章）

之を愛しては、能く勞
せしむること勿らん
や。焉に忠ありては、
能く誨ふること勿らん
や（憲問第十四―七）
愛するならば、その人
の為に苦勞を厭わず出
来るだけのことをして
勉めないでいられよう
か。忠実であるならば、
そのことについて知ら
ない人に教えないでい
られようか。ただ可愛
がることだけが愛の本
質ではない。

ことを言いますと、全く、自分の耳を疑ってしまいました。この雲水について、正反對の見方と評価であり、状況は一変してしまいました。あの雲水こそ、わしが探し求めていた御方であり、あの御方のお陰で此処に参禅した甲斐があった。あの雲水こそ、まこと特別な御方である。この参禅中、わしはあの雲水の一挙手一投足、一言一句、見続けてきた。あの御方の教え方こそ、△愛語、利行、同事▽（註）ではないか。論語の中にも『之を愛しては、能く勞せしむること勿からんや。焉に忠ありては、能く誨ふること勿からんや』（註）とある。真に人に苦勞をさせることのできる人、これは愛の人である。もしも、人に間違いがあり、それを見て見ない振りせず、直視して、直してあげ、正してあげられる、忠言をもつ人、これは△まこと▽の人である。また同じく『言を知らざれば、以て人を知ることなし』（註）とある。人の吐く言葉は、その人の心の表現であり、その人の全人格を現わしている。……お前は、それがわからんのかとでも言う様に、ジーツと私の目を見据えて、人を見抜くことのできないことに、とても悲しんでいる様子でした。

「なあ、心するがよい。人を叱る、人をたたく、人に厳しくできるは、並の心掛けと修行でできるものではない。人の為を思う（For others）と、うごころは、その人に余程な愛情と△おもいやり▽がなければできぬこと。あの御方にはそれができるのだ。偉いイツ！」この時、先代の目に光るものがあつた。今にも



こぼれ落ちそうな大粒であった。嗚呼！己
んぬるかな、此奴め、何の泪か知る由もあり
ません。「キミたちイ！ 何とも素晴らしい御方
ぞ！」

ただ、しばし沈黙でした。私は返す言葉が
ありません。冷たい水を、頭の上からザブー
ツと、ぶっかけられたような衝撃を受けてし
まいました。憎い憎い、悪い悪いと思うてい
た人が突然、大恩人に変ってしまふ。何とも、
悲しい心を持ってしまったもんだ。どうした
らよかろう。後悔が先になつ。あの時の反省
ほど私にとって複雑で難しいものはありませ
んでした。学ぶことの乏しかった自己中心の
哀れな姿、大恩人を極悪人と、取り違えてし
まったこの愚者。こんな気持で山を下りられ
たものではない。しかし、なぜか同時に、価
値ある五日間が蘇り、あたりがパーと開け
てきて、新しい自分に巡り会えたような気が

してならなかった。何とも言えぬ感動であった。

私はしゃくりながら、帰り支度をしていると、突然、ドドツと、私共の部屋に飛び込んできた一人の雲水。「ヤァー皆様どうもどうもお疲れさまでございまして。みなさんヨク頑張られました。どうぞ気をつけてお帰りください。また、ドウゾ、どうぞ」ですから、耳にこびりついた、あの懐しい声であります。何とも、言いようのない、一時でした。

先ほどのショックが覚めやらぬ時、タイミングよく、よくも飛び込んでおいでになったもんだ、葛藤半ばにして、自分をコントロールできないまま——「先生ッ、△悟り▽とは何ですか！」「エッ」と発するなり矢庭にドツカとあぐらかいて、坊主頭を搔きながら、「悟りですかァー、アツハッハー、悟りですかァー▽悟り▽がわかれば、私は、此処にはおりませんヨ。よろしいですかァー」

こんな応えが方があっていいのでしょうか。呆氣にとられてしまいました。ほのぼのとした空気があたりを払い、ふあーっと聖者が駆け抜けたような心地、なんと素晴らしい響きなんだろう。底抜けに明るく、天真爛漫、何と温もり溢れる人間味。この新鮮な感動に、躰が震えてしまいました。

この雲水、先代が言われるように、素晴らしい輝きを放つ。一体この雲水のもつ、この美しさの根源は、何なんだろう。摂心も終り、雲水の皆さんも後始末に忙しかろうに、わざわざ山の頂上の奥の奥、私共の部屋まで上ってきて、労

佛種縁による 佛果を生ずる因種（菩薩の所行は縁による）

（子は温にして勵し、威あつて猛からず、恭しくして安し（述而第七―37） 孔子の弟子が先生の態度風貌を言うたところ：

つてくださる、この雲水。『佛種縁による』（註）とはこのことか。実に頼りない返事ではあつたが、いかにも禅問答的である。沸騰するような共感を覚える。一緒なんだなアー、同じ所に立つておいでなんだ。のち読んだ論語の中にその時の雲水をダブラしてしまいました。『温おんにして厲はげし、威いあつて猛たけからず、恭しくして安し』（註）いかにも、おだやかではあるが、その中におのずから、引き締まったところがあり、自然に具った威厳はあるが、かといつて威張おごつたところがない。またうやうやしく慎み深い窮屈きうくつな所が全くない、いかにもゆつくり、ゆつたりとしている：先ほど先代の言われた、一挙手一投足、一言一句を思い出す、見事な振る舞いである。ついさっきまで、チツトも変らない、私の目、耳なのに掌返してこんなにも見方、心変りできるものか。私は、すっかりこの雲水に一体感を観じてしまった。この雲水こそ、若き日の黒田先生であり、私共にとって生涯忘れ得ぬ、熱き出会いであつた。

株式会社ナリス化粧品勤務

第十回海外留学僧募集について

目的 佛教を修学するものうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、または海外より受入れ佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

派遣先 世界各地

派遣期間 一年間とするも場合により延長するも可

給費 派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員 2〜3名

提出書類

- (1) 論文
- (2) 保証人と連署した願書
- (3) 卒業証明書
- (4) 履歴書
- (5) 推薦書
- (6) 健康診断書

提出レポート

● 禅の国際化と私の役割

● 二一世紀の仏教と私の役割

● タイの仏教に学びたいこと

● 未来社会の仏教と私の役割

いずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五〜一〇枚

原稿切 平成五年十二月十日

横浜善光寺留学僧育英会事務局

くらしの中で読む『正法眼蔵』

— 面授の巻 — その二

成興寺住職 小倉玄照

〈本文〉

この面授の道理は、釈迦牟尼仏しやくかむにぶつのあたり迦葉しやうがつの会下えいかにして面授し護持ごぢしきたれるがゆゑに、仏祖面なり。仏面より面授せざれば諸仏にあらざるなり。釈迦牟尼仏しやくかむにぶつのあたり迦葉尊者かしょうそ者をみるみること親付しんぷなり。阿難・羅睺羅らかうらといへども、迦葉の親付におよばず。諸大菩薩しよたいたくさつといへども、迦葉の親付におよばず。迦葉尊者の座に坐することえず。世尊と迦葉と、同坐し同衣どういしきたるを、一代の仏儀とせり。迦葉尊者かしょうそしたしく世尊の面授を面授せり。心授せり、身授せり、眼

授せり。釈迦牟尼仏しやくかむにぶつを供養恭敬くきやうくわんけい、禮拜奉觀らいはいぶくわんしたてまつれり。その粉骨碎身こなつちり、いく千万變いくせんまんへんといふことをしらず。自己の面目は面目にあらざ、如来の面目を面授せり。

釈迦牟尼仏しやくかむにぶつ、まさしく迦葉尊者かしょうそをみます。迦葉尊者かしょうそ、まのあたり阿難尊者あなんそをみる。阿難尊者あなんそ、まのあたり迦葉尊者かしょうその仏面を禮拜す。これ面授なり。阿難尊者あなんそこの面授を任持じんぢして、商那和修しやうなわしゆを接して面授す。商那和修尊者しやうなわしゆそ、まさしく阿難尊者あなんそを奉觀ぶくわんするに、唯面与面ゆいめんよめん、面授し面授す。かくのごとく、代代嫡嫡の祖師、ともに弟

子は師にまみえ、師は弟子をみるによりて面授
しきたれり。一祖一師一弟としても、あひ面授
せざるは仏祖にあらざ。たとへば、水を朝
宗せしめて宗派を長ぜしめ、燈を續して光明つ
ねならしむるに、億千万法するにも本枝一如な
るなり、また啐啄の迅機なるなり。しかあれば
すなはち、まのあたり釈迦牟尼仏をまぼりたて
まつりて、一期の日夜をつめり。仏面に照臨せ
られたてまつりて、一代の日夜をつめり。これ
いく無量劫を往来せりとしらず。しづかにおも
ひやりて随喜すべきなり。

釈迦牟尼仏の仏面を礼拝したてまつり、釈迦
牟尼仏の仏眼をわがまなこにうつしたてまつ
り、わがまなこを仏眼にうつしたてまつりし、
仏眼睛なり、仏面目なり。これをあひつたへて、
いまにいたるまで一世も間断せず面授しきたれ
るは、この面授なり。而今の数十代の嫡嫡は、
面面なる仏面なり、本初の仏面に面受なり。こ

の正伝面授を礼拝する、まさしく七仏釈迦牟尼
仏を礼拝したてまつるなり、迦葉尊者等の二十
八仏祖を礼拝供養したてまつるなり。

△現代語私訳▽

この面授のことわりは、釈迦牟尼仏が過去七
仏の六代目である迦葉仏の下で、親しく面授さ
れて七代目となり、それ以来大切に護り伝えて
来たわけだから、いってみれば、仏や祖師の面
をいきいきと伝えることである。仏の面から面
授しなければ、仏ではないのである。釈迦牟尼
仏が、まのあたりに親しく迦葉尊者をみられた
から迦葉尊者はそっくりそのまま仏の面となら
れた。釈尊のかたわらで待者をつとめられた阿
難尊者も、釈尊の實子である羅睺羅尊者ですら
も、迦葉尊者のびつたり一枚となった親しさに
は及ばない。もろもろの大菩薩といえども、迦
葉尊者ほどには釈尊と親密な関係とは言えない
し、もちろん釈尊との関係に於て迦葉尊者の座



著者紹介

小倉 玄照

おぐら げんしょう

一九三七年 岡山県に生まれる。一九六〇年 駒沢大学仏教学部禅学科卒業。一九七三年 曹洞宗大本山永平寺講師。著書には、『永平寺の四季』『禅と食』『新譜 勸坐禅儀講話』(いずれも誠信書房刊)等がある。現在 岡山県苫田郡加茂町 成興寺住職

よりも控えて坐らなければならない。釈尊と迦葉尊者は、同じ座に坐り、同じ袈裟を身にまとうのが、仏法のさだめである。迦葉尊者は親しく釈尊の面授を面かおで受けられたのである。心で受けられ、身みで受けられ、眼まなこで受けられたのである。釈迦牟尼仏を供養してうやうやしく敬い、ねんごろに礼拝してまみえたてまつたのである。釈迦牟尼仏にまみえるたびに徹底して迦葉尊者は自我をくたくと幾千万遍、とても数えきれたものではない。自己の面目はすっかり消えてしまつて如来の面目そのものになりきつてしまつたのである。

釈迦牟尼仏は、まさしく迦葉尊者をみられた。迦葉尊者は、同じように親しく阿難尊者をみた。阿難尊者はまた、親しく迦葉尊者に釈尊から伝えられた仏の面かおを礼拝した。これが面授といふものである。阿難尊者は、この面授を持ち伝え、商那和修と出会い面授した。商那和修尊者は、

まさしく阿難尊者をみだてまつた時、面かおと面かおとがしつくり信頼関係で結ばれ、面かおで授け、面かおで受けることが行われた。このように代々の正統の祖師は、例外なく弟子は師にまみえ、師は弟子をみることによつて面授して来た。一祖といえども一師一弟たりとも、たがいに面授が行われなければ、仏でもないし祖師とも言えぬ。たとえば、水が流れて大河となり海に注ぐように、仏法が時とともに栄えるように努め、燈ともを消すことなく常にともし続けて輝かせるためには、実にさまざまやり方があるし、木の本と枝先は同じ一本の木であることを忘れてはならぬ。また今まさに孵化しようとする雛が内側から殻をつつくと、母鶏がすかさず外から殻をつついて破るといふ、いわゆる啐啄同時の故事のような師と弟子の間の微妙な機微のことも重要である。そういうわけだから、いずれの仏祖も、まのあたりに釈迦牟尼仏を見守りたてまつりつ

つ生涯を送ったのである。寝てもさめても、仏のお顔に見守られながら生涯を過ごして来たと言つてもよい。そのようにしてはてしない永遠の過去から生まれ変わり死に変わりして今に至つたと言つてもよい。そのことをしずかに思いつつ今に生きる自分に感慨を覚えるべきであらう。

釈迦牟尼仏の（つまり仏の）面を礼拝したてまつり、釈迦牟尼仏の仏眼をわがまなこにしかと写したてまつるのであるから、わが眼はそのまゝ仏のめんだまでであり、仏の面目である。それを釈迦牟尼仏以来一代も欠かすことなく今に伝えて来たのは「面授」のおかげである。ほとけのいのちが数十代にわたつてきちんと伝えられて今に至つていふという事実は、面と面とが仏の面として向かいあったということであり、今に生きる自分は、釈迦牟尼佛そのものの面と出会つてそのいのちを受けついただということだ

ある。この正しく伝えられた仏のいのちを伝えようとする師匠を礼拝することは、まさしく永遠の過去から釈迦牟尼仏にいたる七仏を礼拝したてまつることであり、それは同時に迦葉尊者以降の二十八代にわたる仏祖の一人を礼拝し、供養したてまつることになるのである。

単伝と複伝

在家者は、なぜ「ほとけのいのち」を面受正伝出来ないのか、という点について少しふれたいおきます。

親から子、子から孫へと「人間のいのち」を伝えていく、いわゆる生物的な相続は、遺伝子の相続と申してもよいかと思いますが、有性生殖の人間の場合には、男（父）と女（母）の両方のいのちを混合して（生物学では、「染色体の交叉」というようですが）伝えていくために、例えば私（父）のいのち（遺伝子）を百%まる

ごと子に伝えることは不可能なのです。それは、次のことばで明らかです。

「ある個体の子孫は性的パートナーの子孫によつて汚染される。あなたの子供は半分のあなたでしかないし、あなたの孫は四分の一のあなたでしかない。数世代を経たときに、あなたが望めるのはせいぜい、あなたのわずかな部分をもつた、つまり数個の遺伝子をもつた多数の子孫をもつこと——たとえそのうちの幾人かがあなたと同じ名字を名乗っているにしても——である。」(R||ドーキンス『利己的な遺伝子』)

仏法の正伝面受は「単伝」ということばが象徴いたしますように、師に伝えられた「ほとけのいのち」の百パーセントを資(弟子)に伝えようとしませぬ。ところが、生物的な相続は、R||ドーキンスのことばのように、男女二人の親から一人の子へ「いのち」を伝えるのですから、いふなればファイフティーフファイフティです。片親

のいのちの半分ずつを伝えあうわけですから、仏法の正伝面授が「単伝」であるのに対し、それを仮に「複伝」と名づけて区別してみたのです。がどんなものでしょうか。

「単伝」を目ざすためには、当然のことですが俗縁はすべて捨て去らなければなりません。

『正法眼蔵随聞記』は、その間の消息を

「学道の人、世情を捨つべきに就いて重々の用心有るべし。世を捨て、家を捨て、身を捨て、心を捨つるなり。」

「家を遁捨して親族の境界をも捨離すれども、我が身に苦しきことを為さじと思ひ、病発しつべき事を、仏道をも行ぜしと思ふは、未だ身を捨てざるなり。」

「また身をも惜まず難行苦行すれども、心仏道に入らずして、我が心にそむく事をば、仏道なれども為^せじと思ふは、心を捨てざるなり。」

ここで強調されていることは、生物的な遺伝

子の影響を一切捨てきってしまったわけなければ師からの正伝面授は不可能だということ。その状態を『正法眼蔵随聞記』は、

「知識もし仏と云ふは、蝦蟇が蚯蚓ぞと言はば、蝦蟇が蚯蚓ぞを、是れらを仏と信じて、日比ひじろの知恵を捨つるなり。この蚯蚓みみずの上に仏の相好光明、種々の所具の徳を求むるもなほ情見改まらざるなり。ただ当時の見ゆる処を仏と知るなり。」

師に徹底して随順しえてこそ単伝なのだということがここでは強調されているのです。

とは申しましたが、遺伝子の影響を一切排除してしまふことは、仏道の論理からは可能であっても、実際はむずかしいことです。例えば、出家という一大事を考えてみても、両親の乳幼児期からの関わり方が遠因になればそれはありえないのですから、「単伝」も「複伝」と複雑にからみあっているのです。

釈尊の実子である羅睺羅尊者が、なぜ迦葉尊

者のように釈尊とびつたり一枚となりえないか——問題を解く鍵はどうやらそのあたりに潜んでいるように私には思えます。

それにしても師のすべてを資（弟子）に面授する、というのはすこぶる単純明快です。俗縁の一切を捨て切ることとは至難なことですが、もしそれが可能であれば、正伝の面授面稟は世俗の親子間のフイティーフイティーの「複伝」よりもよほど簡単だと言えます。理論的には、「単伝」は、無性生殖による遺伝子の相続に似たところがあるとも言えるからです。

野性の厳しさが世俗に失われ、横着本性が肥大し切って、遂には親子関係が破綻しつつある今、仏道修行における単伝のありようを参究してみることによって、かえって野性的本能的にごく自然に行われていた人間のいのちの伝承相続の方法論に示唆が与えられるのではないかという気が私はこのごろしきりにします。

武徳君の立職を祝す

結制について

今日は三月の五日啓蟄、まことに春らしい日和の佳き日、方丈様のご長男武徳君が立職の式を挙げられるめでたい日であります。

今日の式典「法戦式」に参列したことのない方が殆んどかと思えますので、簡単にご説明かたがたお祝いの言葉を述べさせていただきます。

インドでは四月から七月にかけては雨季で、毎日凄い雨が降ります。そこでお釈迦さまは、四月十五日から七月十五日までの九十日間、お弟子さん方を祇園精舎とか竹林精舎といったお寺に集め、外出を禁じ、合宿修行させたのであります。これを「雨安居」とか、九十日間の合宿修行なので「九旬安居」といい、また「結制」というのであります。九十日安居の制度のもとに修行僧を結集するとう意味であります。そしてこの九旬安居を重



ねた回数により僧侶の階級がきまるようになり
ました。

この九旬安居、結制の法がインドから中国
に伝わりましたが、中国にはインドのように
雨季がありません。しかし、結制という九旬
安居は修行上たいへん有効適切な方法ですの
で、九十日間の安居を、夏冬二回おこなうよ
うになりました。そしてこの結制のことを「江
湖会」と呼ぶようにもなりました、その由来
は、というと、八世紀の頃、中国は唐の時代、
江西省に馬祖道一、湖南省に石頭希遷（この
方の即身仏が総持寺に祀られてあります）と
いう偉い禅師さまがおり、おおいに禅風を挙
揚されました。そこで当時、「二大師にまみえ
ずんば共に禅を語るに足らず」といわれ、天
下の雲水たちは江西省の馬祖道一、湖南省の
石頭希遷と、両禅師の間を往来して修行しま
した。それらの雲水を称して時の人々は「江

湖の禪客」といいました。江湖とは天下という意味で、そこから雲水が大勢集まって結制安居することを「江湖会」というようになりました。

この結制修行、江湖会が日本にも伝わり、明治以前までは方々の寺々で結制修行がおこなわれ、大勢集まって僧侶としての資質の向上に精進したのであります。ところが明治にはいつて教育制度が確立し、教育機関が着々整備されるに伴って教育方法もおのずからかわり、学校や僧堂で年間を通して集中的におこなうようになりました。そのため、方々の寺々で分散しておこなわれていた結制は教育機関としての意義の大半を失ない、結制修行は僧堂に任かせる形となりました。

しかし、お釈迦さま時代から続いた歴史ある結制ですので、実際の修行は僧堂にまかせるとしても、儀式として残ることになって今

日に及んでいるのであります。

結制中もつとも大事な儀式は五則法問といつて、結制のはじめ五日間の法要であります。通例第一日は住職、第二日は首座、第三日は書記、第四日は副寺、第五日は知客というふうな結制修行上重要な役職を担っている五人の方々が、公案といつて修行と悟りについで重要な問題を討議し合うのですが、今日多くは五則の第一日の住職の結制上堂と第二日の首座法戦式だけがおこなわれております。

僧侶の三出世

では首座というのはどういう人かといいますが、よく内閣の首班などといわれますが、その首班に相当する言葉、または学校の生徒会長や級長といったような意味で、結制修行中、常に一般修行僧の先頭に立つ重要な役職であります。したがって昔は雲水の中の最古

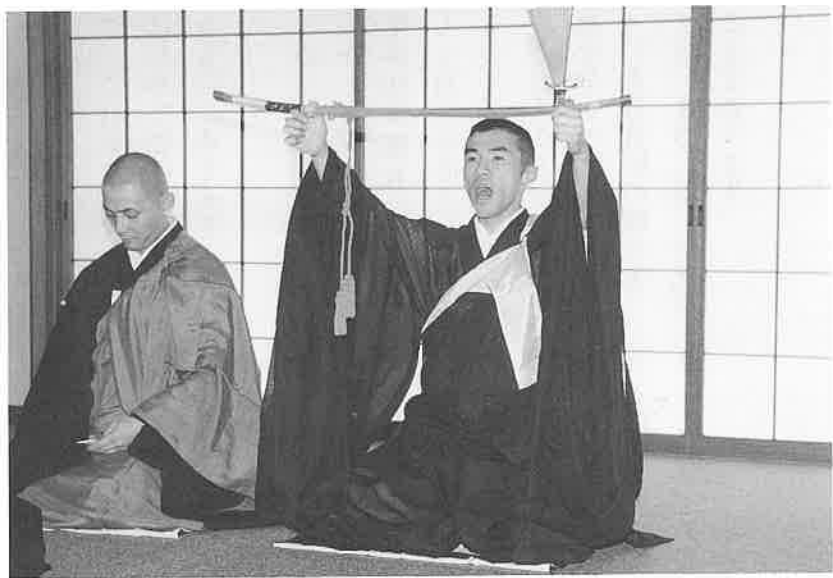
參の者を選んでこれに充てたものであります。だから首座のことを別名「長老」ともいうのであります。ところがいつの間にかやらそれが変わり、一度首座の職につかないといつまでも小僧として一般修行僧の下積みとなつておらねばならず、したがつて出世の端緒をつかむことができないということ、実際の年齢と得度してからの年齢が規定の線に達すれば誰でも必ずこれを勤めなくてはならないのであります。つまり、僧侶になる者は誰もが首座の職につき、これからおこなわれる法戦式で大勢の修行僧と問答をかわさなければならぬのであります。

さて私ども曹洞宗の僧侶は、生涯を通じて三度出世の式を挙げることになつております。その第一が本日の法戦式で、首座の職に立つところから「立職」といいます。今までは「沙弥」とか「小僧」といわれておりまし

たが、これからは「座元」という位になつて、法衣やお袈裟に白色の裏付けのサンをつけることが許されます。それで大勢の修行僧の中でも、「長老さま」と見分けられ、尊敬されるのであります。

第二の出世はお袈裟替えの「転衣」といいまして、福井にある大本山永平寺と横浜にある大本山総持寺に拝登して「瑞世」という本山一夜住職の儀式を済ませると、今度は「和尚」の位に昇り、色のついたお袈裟をかけることが許されます。それでも法衣はまだ黒色のままです。

第三の出世は「建法幢」、法幢、即ち仏法の旗印を建てることですが、これは結制修行を主宰することであり、方丈様はもう三十五年も前、永盛寺住職時代にすでに結制をおこなわれておりますので、今回は結制上堂は略されて首座の法戦式だけおこなわれます



が、要するに、仏法を宣揚し、多くの修行僧を指導して一人の首座を育成するのが建法幢で、これをおこなうと「大和尚」の位に進み、はじめて色のついた法衣を着用することができるのであります。

さて法戦式ですが、その由来をたずねると、むかしお釈迦さまが靈鷲山りやうじゆせんにおいて、高弟の摩訶迦葉尊者まかかしやうせんじやにご自分の席の半分を頒ち与えて説法を許されたのですが、その故事にならって、お師匠さまと同格で説法することを許されることを意味したもので、これを「半座はんざを分わかかつ」ともいうのであります。したがって本日首座の職に充てられる武徳君にとつては、まさに第一の出世、まことにめでたいことであります。

破顔一笑活機圓かなり

さて本日、私は西堂さいどうといつて結制修行中最高のお役目を頂戴いたしました。まことに光栄に存ずる次第であり、それだけにうれしく、歓びの氣持を拙い偈にあらわして持つて参りましたので簡単に説明申し上げ、お祝いの言葉といたします。

師資相統梅庵禪 師資相統す梅庵の禪
密々伝燈父子縁 密々に灯を伝う父子の縁
成寿山頭分半座 成寿山頭、半座を分かち
破顔一笑活機圓 破顔一笑、活機圓かなり

師は師匠、資は弟子のことで、師匠に随つて、当時開山梅庵白純大和尚の教えを相続した。その師匠と弟子は実は父と子の間柄であり、手塩にかけて綿密裡に法のともしびを伝

えて来た。その二十年に亘る精進が実って、ここ成寿山善光寺に於て半座を分かつ法戦式がおこなわれた。

「破顔一笑」というのは、お釈迦さまが靈鷲山におられた時、大梵天王が美しい花束を捧呈して説法をお願いしました。するとお釈迦さまはその花束を手にとって眼の前にかかげ、ちよつとひねっただけでひとことも説法なさない。その席にいた大勢の聴衆はその意を解しかねたのですが、ただ一人摩訶迦葉尊者だけが「お釈迦さまのお心を理解して破顔微笑、にっこりとほほえんだのです。するとお釈迦さまは、「仏法のすべてを摩訶迦葉に伝えおわった」と仰せられました。

お釈迦さまが花束を拈ぜられたのは、言葉では言いあらわすことのできないギリギリのところを示されたのであり、摩訶迦葉尊者がそれを見てにっこりほほえんだのは、仏心を

文字や言語を離れて以心伝心して体得されたからであります。ここから「教外別伝」、「不立文字」などという言葉が出てくるのであり、摩訶迦葉尊者は仏心を伝承した最初の人であり、この出会いを「拈華微笑」というのですが、このことあって以来、文字や言語に捉われず、仏の真意を心から心に伝え、師匠と弟子が密々に法を伝えてきたのが禅の大きな特徴であります。

次に「活機」とは人情の機微に通ずるはたらきのことと、武徳君はお師匠さんと同じ活機をまどかに身にそなえられたことであり、まことにめでたいことであります。なおお師匠さまの号は「大圓」ですので、それにあやかつて「活機圓かなり」と詠んだ次第であります。

方丈様、そして武徳長老さま、ほんとうにおめでとうございます。

知識と知恵

精神科医 宮川健児

ある大学病院の精神科医局に入ってきたばかりの新人の医師たちに、私はこんな話をしたことがある。

「先生たちは、今回、国家試験を合格し、きつと今は、どんな精神科の教授よりも多くの医学的知識を持っているだろうと思う。しかし、知

識では諸先輩に勝ったとしても、哀しいかな先生たちにはまだ知恵がない。精神科医を志すなら、今まで覚えた知識をまず白紙に戻してもらいたい。そして、今後は、知恵を修得する努力をしてほしい」と。

精神科にかかる患者さんには、知識の切り売



りだけではとても治療や指導をすることはできない。目に見えない、他人の心の病を治そうとするときに、医学的知識以上に大切になってくるのが、医師や、患者に関わる看護婦たち個人の人間性、歴史性だと私は思う。受付で、ニコリ微笑み「お大事に」といわれただけで、病が八割回復することもある。

精神科医の場合、一人の患者さんを目の前にしたとき、どこまでその人自身を把握できるか。十人いれば十人の、生い立ち、環境、性格がある。そんな中から起こった病を、一つの医学的治療法だけで解決できるわけがない。きっと、若い医師たちも、自分の生い立ちや環境、性格——祖父母や両親からいわれた言葉、小さい頃に読んだ本、見た風景、辛かった時代、楽しかった時代、自分はどんなふうにごしていったか。現在、自分が一番安心できるときはいつなのか。自分の優越感や劣等感は何なのか——などを医

学的知識にプラスして、一人一人に一番適切と思われる治療法を試みていくことになるだろう。そんなとき必要になってくるのが、知恵なのである。

私が学生だった頃よりも、きっと今の若い医師たちは、そうとう厳しい受験戦争を勝ち抜き、難関をクリアしてきたのだろう。たぶん小学校、中学校、高校でも成績がよく、試験も偏差値も高い点をとっていたに違いない。彼らが子どもの頃というのは、世の中全体が、知識のための記憶術を詰め込み、これに優れている者が、本人も親も教師も社会も、「出来のよい人間」として評価するような風潮になっていた。評価された人間は自信を持って社会に出るのだが、さまざまな荒波の中で、自分の知識がいかに役立たないものかを知り、自尊心が崩れ、中には心の病に陥る人もいる。

人間には側頭葉という知識のセンターが優れ

ている人もいれば、前頭葉、後頭葉、脳幹といった知恵のセンターが優れている人もいる。知識と知恵と健康と、三つとも自信のある人はまれである。しかし、三つともに自信のない人もまれである。なのに『隣の芝生は青い』（私は、隣の麦飯はうまい、というが）と人と自分が劣っている部分をやたら比較したがってしまふ。

勉強したい人はうんとすればいい。音楽や絵画、文章が好きなのはほとんど打ち込み、体を動かして働きたい人はそれで暮らす。そこにはまったく優劣の差はない。究極的には、個々の人が個々の生きがいのために一生を送ればいい。人間とはそういうものだということを、まず私は新人の医師たちに、聞いたかったのである。私の話が、若い彼らに伝わったかどうかかわからない。でも、きつと実際に臨床を続けているうちに、自然にわかってくると思う。そして、私にも経験があるように、心の病気を持つ患者

さんにとつて、最高の精神科医となり得る知恵を持つているのは、一番その人の身近にいて、その人のことを心から真剣に考えることができる家族であり、自分はそれを助けるのが仕事だと気づくときもくるだろう。

●プロフィール

みやがわ けんじ 昭和九年、高知県生まれ。岐阜大学医学部卒業後、同大病院精神科医局勤務。現在、内科神経科・宮川医院院長。岐阜南病院理事。岐阜大学病院精神神経科同門会会長。



足摺岬に近い大自然の中で生まれ育ち、世の中の常識にとらわれない独特の人生観、人間観を持つて患者に接する個性的な医師。昭和五十四年には四国八十八カ所を巡礼。自分で作つた野菜、廃材を利用して建てた囲炉裏小屋「自菜我菜庵」、自然の中でのアウトドアスポーツをこよなく愛す。若い頃から朝は四時、五時に目が覚め、夜は八時過ぎると眠くなってくる原始的な体質という。

インド留学記

その10

二度目のインド 国内旅行 (1)



学 授 岩
大 教 澤
金 助 島

半月三百ルピーの旅へ

インドでの留学生活も半年が過ぎた。またぞろ旅の虫が騒ぎ始めた。サンスクリット語を読むばかりの生活に、そろそろ嫌気がさしてきたのだ。ちょうどそのころひさかたぶりに、日本の義理の妹から便りがあった。新婚旅行でインドに来ると言うのだ。それ幸いと会いに行くこ

とに決めた。落ち合うところはベナレスだ。そのついでに（どっちがいつでなのか分からないが）、半月ほどベナレス近辺を旅することにした。プーナを出て、ボンベイ近郊のダダルで汽車を乗り継ぎ、まずカジュラーホーへ。そこからベナレスを経て、ブツダ・ガヤー（お釈迦さんが悟りを開かれたところ）などの仏跡を巡り、再びベナレスに戻ったのち、プーナへ帰ってこ



インド全図およびその周辺地図

ようという計画だ。

「なにしろ今度は二度目の旅行だ。それにインドに来て半年もたっている。インド人にもインドの生活にも相当なれた(はずだ)。最初の旅行とはひとあじ違った旅をしたい。できるだけインド人の旅に近い旅を試みたい。最初の旅は、すべて一等車で、ホテルはほとんどみんなバスとトイレ付きのところだった。それに日本へのおみやげにレモン・トパーズなんかも買ってしまった。そのせいで半月の旅行に八百ルピー(当時約二万五千円程度)もかかってしまった。八百ルピーといえば、大学の助教授のほばひと月の給料じゃないか。インドに住んでいてそんな豪華な旅行をしてはいけない。インドに住んでいる意味がない。せめて大学院生のひと月の奨学金でいどで、半月くらいは旅行できなくっちゃ駄目だ。よし今度は、旅費・宿泊費すべて込みで三百ルピー(約一万円)でやっ

てみよう」。こう考えて、きっかり三百ルピーだけ握りしめ、リュックをかついで旅にでた。

三月五日の夜、九時五〇分発、ボンベイ行きの鈍行に乗る。当然二等車だ。途中ダダルで乗り換えてベナレスまで、料金は外国人学生割引でなんと三ールピー(約千円)。これでベナレスまで約千五百キロ、ほぼ一昼夜まるまる汽車に乗っていていいのだ。三時ごろダダルに着く。乗り継ぎのベナレス行き列車は、六時五〇分発だ。しばらく駅の待合い室で待つことにする。リュックには寝袋と着替えしか入っていないのだが、それでも盗難がこわくて朝まで眠れない。うっすらと東の空が明るくなりかけたころ、駅のホームで紅茶を飲む。ひんやりと冷たい空気のおかげで飲む。ミルクと砂糖のたっぷり入った紅茶。生き返ったような気分だ。すると腹がへってきた。ホームにいる物売りからプーリー(インド式揚げパン)とバージー(野菜のてんぷら

を買い、二杯目の紅茶といっしょに食べる。これが今日の朝食だ。

六時ごろ、ダダル発ベナレス行きの列車がホームに入る。ポーターの男の子には、前もつて二ルピー（六〇円）渡しておいた。それで彼が席を確保してくれると言うのだ。半信半疑だったが、とにかく信用してその子を待つ。すぐに得意気な顔で彼が戻って来た。手を引くようにして席へと案内してくれる。二等車の車内に入ると、座席は日本の汽車のB寝台のような作りになっている。座席は上下とも木製だ。下の席はちゃんとした座席になっている。だが上の席は、すのこのようなになっている。そしてそこにはたいてい荷物が置いてある。どうも網棚のようだ。そのうちの一つに男の子が一人座って手を招きしている。ポーターの友達のようなだ。あたりを見回すと、あいた席などすでない。通路で寝て行くよりはずっとましかと思つて、その

席（というか網棚）に陣取る。寝袋を引いて寝そべってみる。なかなか快適。とにかく体をのばして横になれるのがいい。リュックを枕がわりに寝転がっていると、昨夜の徹夜がきいたのだろうか。お金と荷物の心配はどこへやら、知らぬまに寝入ってしまった。

カジユラーホーのミトウナ像

一等車で旅したときには、ボーイが車室に食事の注文をとりに来た。そして注文しておけば、食事時にターリー（インドの定食）を運んで来てくれた。だが二等車ではそうはいかない。お腹がすけば、どこからともなく車内にあらわれた物売りから、バナナ、キュウリ、ピーナツなどを買って食べるか、途中の停車駅のホームでプリーとかバージーなどを買って食べるしかない。うとうととしては目をさまし、またうとうととしては目をさまし、お腹がすくと適

当に食べ物を買って食べながら、ようやく翌日（三月七日）の朝六時三〇分にサトナーに着いた。ここからカジュラーホーまでは一一七キロ。駅前で六時四五分発のバスに乗り込み、カジュラーホーへ。料金は五ルピー五〇パイサ（一六五円）だ。カジュラーホーには一〇時二〇分に到着。バスの中で一緒になった日本人男性旅行者三人（二人組の大学生と一人旅の大学生）とともに、まず宿探した。四人相部屋で一人一泊四ルピー（一一〇円）の安宿（Gupta Hotel）に泊まることにする。

四人がそれぞれ貸自転車（一日五〇パイサ＝一五円）を借り、まず西群の寺院群に向かう。そして寺院群の奥にあるヒンドゥー教寺院デーヴィー・ジャガダンパーに到着。この寺院に、エロティックなことで有名なあの男女交合像（ミトウナ像）が、一番たくさんあるのだ。ある。ある。寺院の外壁は無数のミトウナ像でま

さに埋めつくされていた。男女の像が本当にいろんな体位でからみあっている。四八手なんてものじゃない。レズあり獣姦ありの世界だ。こんなものがお寺の外壁に彫られているなんて、いったい何を考えているんだろう。確かに一見そんなふうに見える代物だ。だが、インドの乾いた空気のなか、照りつける太陽のもとで、まじまじと見ていると、まったくいやらしい気がしない。あまりにあげつろげに「堂々と」という感じなので、セックスにはつきものと思ひこんでいた、秘め事的な淫びさが感じられないのだ。性を謳歌するということがあってもいいんじゃないか。むしろそんな気持ちにさせる代物だった。

これらの寺院群が作られたのは、今から約千年ほどまえのことだ。そのころこの地には密教が栄えていた。密教の教えでは、女性が神の力の現れたと考えられていた。だから女性との性

交は、神の力に接するためのものだったのだ。

一般にはこんな説明がされている。確かにこの説明のように、寺院にこんな像が彫られたのは、密教の影響があるのだろうか。だが像を見ているうちに、私は次のようなことを考えていた。

インドのヒンドゥー教徒の人生の目的は、四つあると昔から言われている。すなわち、実利（アルタ）と愛欲（カーマ）と法（ダルマ）と解脱（モークシャ）である。インドという日本では、貧しい遅れた国とか、宗教的な神秘の国というイメージが強い。そのため、時代遅れの身分制度カーストの社会的規範（ダルマ）を守って生活する人とか、解脱を求めて出家して修行するヨーガ行者というような生き方を、すぐ思い浮かべてしまうようなところがある。だが、お金儲けをすること（アルタ）やセックスを楽しむこと（カーマ）だって、堂々と人生の四大目的のなかに含まれているのだ。その意味

では、私たち日本人が、「金儲けやセックスが人生の目的です」とは、本音ではたとえそう思っていたとしても、儒教的あるいは仏教的禁欲主義のせいかな、そう堂々とは言い切れないのとは違っている。確かにインドは、今では、映画にキスシーンすら長年登場しなかったという国柄だ。だが昔は、セックスの経典『カーマ・スートラ』を生み出した国なのだから、このミトゥナ像に描かれているように、今よりもっと自由にもっと多様にもっと堂々とセックスを楽しむ人たちがおり、またそうしたことにもっと寛容な土壌があったのではなかったか。そしてそのような土壌の上に、密教の影響も受けて、このようなミトゥナ像が壁を埋めつくすような寺院が作られたのではなかったらうか。

カジュラーホーの夜

西群の諸寺院のミトゥナ像を見て、性に対し



てなんだかとてもおおらかな気持ちになって、宿に戻ると、そこに一人の日本人女性旅行者がいた。女性のインド一人旅なんて珍しいなと思しながら、こちらは四人という気安さもあって気軽に声をかけ、一緒に昼飯を食うことになった。話してみると、名古屋の私立A大学の学生だとのことだった。インドに来る前、名古屋で私が下宿していたのは、そのA大学のすぐそばだった。懐かしさも手伝って、とても話がはずんだ。それに五人ともみんな大学生で、インドをヒッピーみたいに旅しているという気楽さというか親しみもあって、その日はみんな相部屋で泊まることになった。

昼食後、自転車で東群と南群の諸寺院を回り、夕方また宿に戻る。晩飯まではまだ間があるので、みんなで少し散歩することにする。ゴードル川の川辺に座り込んで話をする。そのうち後の三人は先に宿に戻り、彼女と二人川辺に残る。

インドの夕闇は赤くない。「夕焼けこやけで日が暮れて」という雰囲気とはちよつと違う。東の空が白々と明けてくると言うときの、「白々」に近いのだ。変な言い方だけど、白い夕闇にやさしくつまれるという感じだ。その白い夕闇が黒い夕闇へと移りゆく中、僕たちは、今日会ったばかりだということが自分でも信じられないくらい、とつても打ち解けあって、いろんなことを話した。そしてこれ以上話していると、暗くてもう帰り道が分からなくなってしまうくらいになって、やっと宿に戻ってきた。

夕食は五人で酒盛りだ。インド製の甘いラム酒を飲みながら、インド体験談が始まる。圧巻は京都の私立B大六回生の体験だった。なんと彼は、日本から船に自転車を積み込んでカルカッタに渡り、カルカッタからベナレスまで自転車をこいでやってきたというのだ。今は自転車をベナレスの宿にあずけて、ここには汽車とバ

スを乗り継いで来たのだそうだ。これからまたベナレスに戻り、そこから再び自転車で、デリ、ボンベイを回り、金が尽きればボンベイから、そしてまだ金が残れば西アジアのほうにも足をのびして、また船で日本に帰るというのだ。そういう旅の仕方もあったのかと、そのたくましさ感激してみんなで盛り上がり、ラム酒がどんどんすすむ。

そのうち、二人組の大学生のほうは、酔っぱらって先にベッドへ。残った三人でさらに飲みながら話はずむ。自転車旅行の御仁が、ときおり手巻きのタバコを吸っている。ハッシンシ（大麻）かなにかだったのかもしれない。彼の腰が突然ぬけてしまう。彼は這ってベッドへ。最後に彼女と二人残される。二人でさらに飲みつづける。しかしそろそろ限界だ。酒と話はこれくらいにして寝ることにする。

入り口から順に、すでに三つのベッドが占領

されていた。あいているのは奥のベッド二つだ。彼女は一番奥のベッドに、僕はその隣のベッドに入る。カジュラーホーのミトウナ像のせい、酒のせい、はたまた彼女が隣のベッドにいるせいなのか、なかなか寝つかれない。

そのうちとうとうとして、ふと目をさまし、隣を見る。彼女の手がベッドから外に出て、こちらがわにたれている。その手が僕に向かつてさしのべられているように見えた。思い切つて握ってみる。すると彼女がスリと僕のベッドに入ってきた……。そしてまたスリと自分のベッドに戻っていった。

男女がおおらかに性を謳歌するミトウナ像に心動かされたせいだろうか。こんな夢を見て朝目覚めると、彼女は九時四五分の飛行機でベナレスへたつとかで、早々と朝食をすませ、身支度をしている。そのまま彼女とは、お互い名前も告げずに別れた。



風の葬送

砂、というより灰、あるいは白い粉、といったほうが適切なようにも思える。

この土地の乾期は数ヶ月後に訪れるはずなのだが、すでに地表はひどく乾燥している。台地状の地形をしているその村には川がなく、村はずれにある沼から日常生活に使う水を運ばなければならぬ。飲み水には溜めておいた雨水を次の雨期まで少しづつ使うことになり、当然のことながら前年の雨期の降水量が生活や農作物の育生状態に大きく作用する。畑を見渡すと緑

落合 隆 ピンダー・ラタノー

(バンコック・ワットパクナム)

に覆われているようにも見えるのだが、大部分がイモ畑で他の作物を植えても育たないのだろう。砂地に根を付けたイモの葉が低いところで風にゆれている。

この東北地方の村からバンコックに来ている友人の僧侶に誘われて行ったのだが、正直なところ積極的に行きたくないような場所ではない。私は日本に生れ、あの緑豊かな湿润とした土地にいた。乾燥した冬があるといっても三月になれば青葉が芽吹く。その自然と同様に人間

関係も湿り気をおびている。時にはほど良く、時には過剰なほどに。

村へ行って三日目の夜。お経を上げに行くかと誘われ、少年僧もまじえた六、七人で一軒の家へ向った。どの家も板をまばらに打ち付けてあるだけで、寒期はかなり気温の下がるこの地方、朝方の寒さをどのようにして耐えているのか。私たちがその家の二階に上がると三〇人ほどの村人が集まっていた。

その日の朝、家の青年が他界した。



長い間病気で寝たきりだった青年の遺体は、テント状に張られた黒い布に

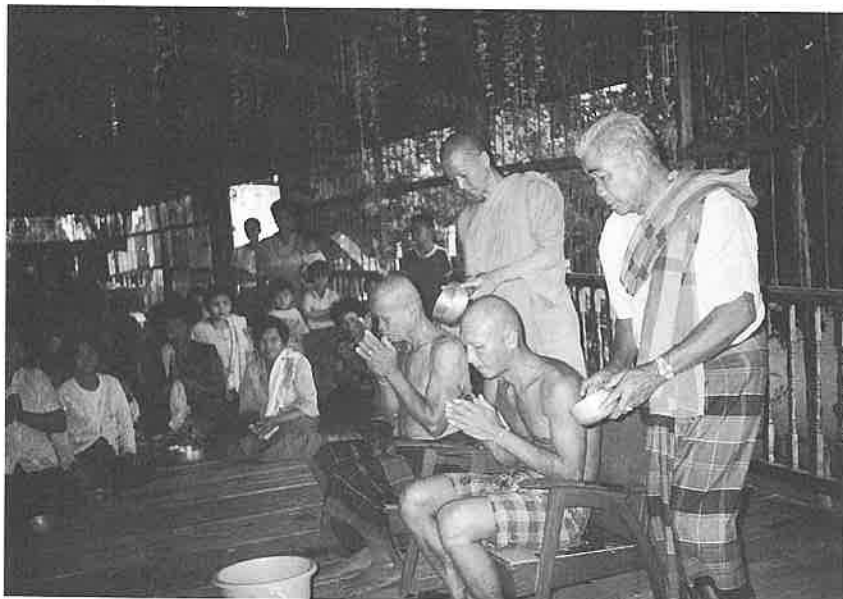
覆われ、脇には手製の粗末な柩が置かれている。人々は酒を酌み交し冗談を言っては大声で笑い合っていて、一見しただけでは何の集まりなのか見当がつかない。色着きの銀紙が貼られた柩は、別の世界から届けられた正体不明の物のように、部屋の中央で押し黙ったままだい。

翌日の午後はその家で沙弥の得度式が行なわれた。弟や甥が四人。村の住職に戒を授けてもらい三衣に着替える。ブワット・ナー・ソツブ（靈前得度）といわれるこの慣習はまだかなり残されていて、死者の係累の者が得度することによって得られるブン（徳）が、他界した者に送り届けられると考えられている。その四人の子供が先頭になり柩につながれた紐を持ち、百人あまりの村人たちが行列になって村を出て行く。私は、この村の寺には火葬の設備がないので隣の村まで行くのかと、同じように紐を持ちながら考えていたのだが、それが間違いである



霊前得度(ブワット・ナー・ソップ) 4人の子どものこの日1日だけの得度式

2人の農民が得度を行う。私は背中に聖水をかける



ことは間もなくわかった。雑木林、といっても半分死にかけたような木が、やっとの思いで立っているといった村はずれのその場所で行列は止った。

火葬はこの雑木林で行なわれるのだ。

丸太が組み上げてあり、すでに準備は整っている。泣いている者は一人もいない。照り付けて日射しの下の乾いた死。

数種類の読経の後、柩は数人の男たちによって持ち上げられ、丸太の上に置かれる。あお向けになつていた遺体を横向きに変えたのだが、何か意味があるのだろうか。長めの丸太が左右から柩を押さえ付けるように置かれると、村人たちは木の枝に葉を数枚くしぎしにしたものを下の方に一人一人置いてゆく。その葉に火が着けられると数秒のうちに丸太に火がうつり、さらに柩の板が燃え始める。それと同時に遺族が硬貨を空中にばらまく。村人たちは歓声をあげ

ながら先を争ってひろい集めている。

どの顔も笑っている。まちがいに笑っている。

私は遺体が燃えつきるまで見ているつもりでいたのだが、全員で村へ帰らなければいけないと言われ、やむなく友人の僧と村へ向かう農道を並んで歩いた。

「これはとても失礼な質問かもしれないが、仮にあなたの父親が亡くなった時も、この雑木林でこの様にして火葬にするのですか。」

「そうです」と、淡々と答える。そして、「あの場所と道をはさんだ反対側にある場所で子供の遺体を火葬にします」と、彼が指さしたもう一つの雑木林はどこか全体に白っぽく、少しかすんでいるように私には見えた。

その翌日、私は一人で雑木林へ向った。その場所は禁域を示すために数本の切り取った立木

で矩形に囲ってあった。大腿部のあたりだろうが、まだ燃えきっていないようなところもある。いくら病気で長い間寝ていたといつても若い肉体、すぐに灰になろうとはしない。むしろ充分に生きえなかつただからこそ生への、肉体への渴望には強いものがあつたのだろう。

前日は私自身始めて体験することで周囲を見回す余裕がなかつたのだが、その林の中には火葬の跡がかなりある。まだ半年ぐらいかと思われ、ものも、ほとんどまわりの地面と区分けのつかなくなつてしまつたものもあり、よく数えれば十ヶ所以上になるだろうか。黒く変色した壺や皿、線香の燃え残りがあつてはじめてそれと知れる程度で、骨や灰は風に吹き飛ばされてしまつてゐる。

消滅。人が消滅してゆく過程が目の前に拡がっている。

村にもどつてから聞いてみたのだが、ある程

度の金持ちなら骨を集めて寺院の一角に安置することもあるが、ほとんどはそのまま林の中に捨て置かれるらしい。寺院に置かれる場合でも、使い古されたプラスチックのオイル缶に入れ、無造作に壁からぶら下げてあつたりする。村人たちの普段の生活の中での、かなり親密に見える大家族主義といつた湿り気と、死と死後のあつかいの乾いた様相。

この落差はどこから来ているのか。

東アジアの、あの地中の暗がりへ、あの意識の暗がりへ隠すようにして死を閉じ込める風習はこの土地にはない。

コラート高原からイサーン地方にかけての乾燥地帯は風の吹く日が多い。青年の死が白い粒子となつて空中を舞うようになるまで、さほどの時間はかからない。

仏歴二五三六年、西歴一九九三年、二月。

横浜善光寺留学僧育英会に多額のご寄付



このたび、横浜善光寺留学僧育英会顧問でケイヒン株式会社代表取締役会長の大津正二氏（横浜市磯子区在住）より、故・大津敦子様（大津氏夫人）のご遺志により、横浜善光寺留学僧育英会に、五百万円也のご寄付をいただきました。かねてから、仏教興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成する留学僧育英会に心を寄せておられたとのこと。育英会では、故人のご遺徳を偲び、いただいた浄財を有効に役立たせていただきたいと存じます。

ここに故人のご冥福をお祈り致すと共に、謹んでお礼申し上げます。

平成五年五月

横浜善光寺留学僧育英会

理事長 黒田武志

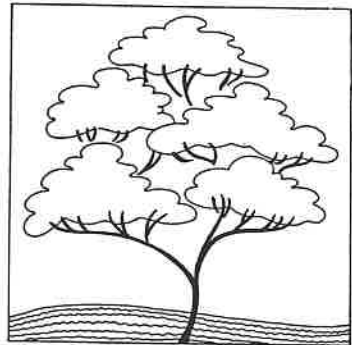
森山師を送る言葉

このたび森山大行師が南米開教総監に御就任
なされました。これは曹洞宗はじまって以来の、
全く異例の抜擢であり、海外布教の若返りのた
めよろこぶべきことと思えます。

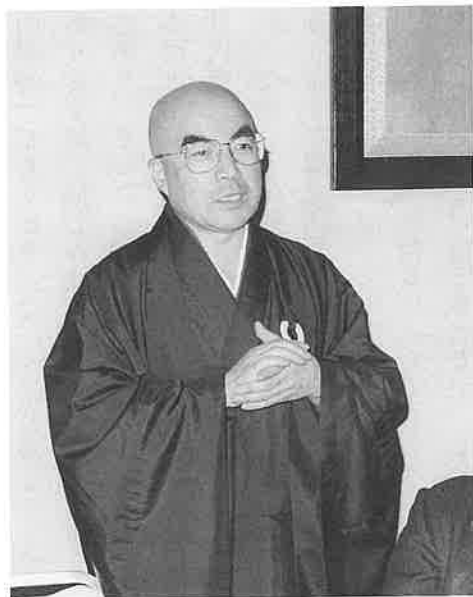
開教総監という役職は、南米のほか、北米と
ハワイに置かれておりますが、北米の山下総監、
ハワイの松浦総監は共に八十歳代のお方であ
ります。そうした年齢ベースの中で、五十歳代

で開教総監の重責を担われるとは、宗務当局の
大英断もさることながら、森山師の力量と徳望
のしからしむるところであります。

私は善光寺さんの紹介で十年ほど前はじめて
森山師に会いました。その時、「これは絵になる
風貌だ。将来輸出できる禪の顔だ」と思いまし
た。といいますのは、かつてフランスで大活躍
された弟子丸さんが素晴らしい成果を挙げられた



要素の中で、あのご面相の果たした役割はたいへん大きかったのではないかと思います。フランス人が達磨大師の再来かのように思ったらしいということはご本人から聞いた話であります。が、そういえば森山師の弟子のフランス人バシユール・ルース浄信さんは森山師を若き達磨大師のように敬慕されたのではないかと思います。彼女は善光寺留学僧第四期生に採用されま



したので私共とも親しい間柄なのですが、昨年南フランスに禅堂を建てられました。

そうした経緯からみて、海外布教の経験豊かな森山師は、将来フランスに渡り、ポスト弟子丸の禅をフランスに挙揚するのではないかと思っていたのですが、今回計らずも南米大陸からお呼びがかかり、開教総監として赴任されることは、男子の本懐これに過ぐるものはないと思います。

開教総監というのは開教師とは格が違うのです。ハワイの開教総監松浦師は私と同郷で、師は私の師寮寺の首座でしたので中学時代から親しい間柄であり、五十年來文通しておりますが、彼の長い長い開教師時代は「レバレンス松浦」として手紙を出しておりました。それが開教総監になると途端に「ビショップ松浦」に変わるのです。宗門でいえば「老師」が「禅師」に変わるようなもので、「ビショップ森山」はいわば「森

山禪師」であります。たいへん名譽なことであります。ありますが、何しろ地球の裏側の国に出向くのであり、そこには言葉の障壁があり、また経済事情と治安の問題もあり、さらには日系社会の世代交代に伴い、日本的布教の行詰りもあるといった様々な困難が待ちかまえております。そうした中で禪堂新築という事業が目前に控えております。

それで、ただ気軽るに「おめでとう。いってらっしゃい」では済まされない。しっかりと頑張ってください。達磨大師でさえ九年面壁して慧可大師を得たのであるから、四年の任期を少なくとも三期ぐらいはつとめしつかりした基礎を築いてほしいと激励しようではないかという気持ちでこの会を發起し、ご案内申し上げますところ、大勢の皆様にご参集いただき本当に有難うございました。発起人を代表して厚く御礼申し上げます。



四月のお茶会

桜の花の下で “清和会” 開かれる

平成五年四月三日。やわらかな春の陽差しと満開の桜の中、裏千家茶道一流の師、鈴木宗幹先生のご自宅にある“日々庵”(東京都世田谷区)において、清和会のみなさんによる優雅で楽しいお茶会が催されました。

鈴木先生のご尊父は裏千家流の茶の湯の手引書を何冊も書かれている、著名な鈴木宗保先生。親子二代に亘り、駒沢大学茶道部の講師も歴任されておられます。横浜善光寺の方丈は、大学時代ずっと茶道部に在籍しておりましたが、そ

のとき学んだのが鈴木宗保先生でした。また、今回、薄茶席の席主となられたのは、黒田方丈の茶道部後輩にあたられる新美昌道氏。お茶会は、九時半から三時まで、黒田方丈の“濃茶席”、新美氏の“薄茶席”、大磯の松月製による“点心席”、終始なごやかに会は進められました。

集まってきてくださった清和会のみなさんは総勢約百五十人。中には広島からわざわざ駆けつけてきてくださった方も。それぞれが、茶の湯という、非日常的な、心豊かになる空間でコ

御茶	豊栄の音	此御用器
御菓子	ふやき	養生
器	備前摺鉢	骨人造
	以上	
茶碗	原歩手造 黒共箱	
茶杓	銘 吹茶去 物金並共箱	
茶入	瀬戸肩衝	
	御家元箱	
水指	竹根 一灯直書付 同箱	
	銘 達摩	
釜	中川一政手造土釜型トテ	
	銘 烈造	
花入	肥後耳付	
香合	染付 笠	
花		
床		

總持位隱禪師筆 頌
春有百華秋有月、

ミニニケーションをはかり、忘れかけられつつある美しい日本の心を満喫して帰られたようでした。

大浜正さんは、次のような手紙を後日送ってくださいました。

『過日は鈴木先生御宅でのお茶会にお招き賜りありがとうございました。治ざいました。治兵衛先生の桜な

ぐりの炉縁の味わいと、中川先生の釜肌や文字の具合がマッチしていて最高でした。覚々齋の手造りの黒大茶碗、鉄のごとく、黒田方丈さまにびったりで、時代差を感じない、とても楽しい、すばらしいお席でした。魯山人先生のすり鉢もみごとで、大宇宙を感じ、豊かな気持ちになりました。

あたたかな茶日和、桜もほころび、花のトネルの下を幸せな気持ちで通り帰りました。茶の香の飛ばないうちにお礼申し上げたく存じます』

きつとみなさん、お茶会で感じた穏やかな喜びのひとときをお家にまで持って帰って、ご家族に笑顔とやさしさを分け与えられたことでしょう。

観桜茶会



平武五年四月廿二日
 春日 観桜茶会
 會記
 立 新美昌道氏

床 尤唐筆請和歌紙新聞
 目先長在上下句
 春日 観桜茶会
 平武五年四月廿二日

花 竹舟 利舟是
 花入 利舟是
 赤合 利舟是
 茶 蒲田茶 香 池
 心 蒲田茶 香 池
 風 雲母 香 池
 相 行 香 池
 水指 御家元在明同部 香 池
 芳君 御家元在明同部 香 池
 茶杓 内原香通好思草香 香 池
 徳持信律師伴共同部 香 池
 茶碗 銘 池田川
 菰 内能香箱
 替 銘 花の山
 雨浦 鑿手 牙庵箱
 蓋置 銘 白鷗
 建水 鐵部 墨台
 于菓子 遠山前御早の心 香 池
 家 赤茶 相水地 香 池
 漆 舟在列 香 池



▲薄茶点前の新美昌道氏

▼薄茶席





▲日々庵庭



◀ 日々庵主鈴木宗幹先生

▼ 薄茶席連客





▲善光寺方丈点前



▲薄茶席花



▲日々庵長老武田大氏、飯塚平八郎氏



◀濃茶席床



◀濃茶席にて
善光寺婦人会伊藤会長を囲んで

▶井高帰山先生を迎えて



▼横塚宗寿先生とともに





老いてなお、よき導師に
恵まれて

香川県 豊永 緑

このたび宗教法人生長の家の雑誌『光の泉』十二月号誌上、横浜善光寺の黒田武志ご住職さまと初めて出会わせていただく法縁にあずかりました。それぞれ宗教、宗祖は違っても、争うのはおかしい。みな、一つの幸せに向かう道なのだからというような生長の家創始者谷口雅春先生と同思想のご住職さまのインタビュ記事、拝読させていただきました。深く感動いたしました。

また、ご住職さまの若い日のご苦勞のほど、読みますむにつれ、涙が浮かんでくるのを止められませんでした。どんな逆境も苦しみも、すべて心の糧としてしまいう偉大な平成の名僧を見つけさせていただいた気がいたしました。雨の中をとぼとぼと歩かれ、ついに涅槃金まで使うほどに窮されたお姿は、私もご住職さまほどの厳しさではなくとも、似たような体験をしたことがあるので、どれほどお辛かったですであろうと胸が詰まっています。また、自分を騙した男に逆に感謝するお心の尊さ…。

失礼ながら、僧界の一部では地に落ちた末世のような時代になったといわれることもある現代で、ご住職さまのようなお方がおられることを知ることができ、これ以上の喜びはありません。老いてよき導師に恵まれた幸せでいっぱいでございます。

「光の泉」を読んで以来、私の話を聞いてくださる方はこの方以外にいない、と毎日思いつめるようになりました。誌上には詳しい住所、連絡先等が記されていないなかったので、お手紙を差し上げたいけど、どうしたらいいものか途方にくれ、とうとう勇気を

持つて出版社に問い合わせ、教えていただいた次第でございます。

思い起こせば、私の女としての若き日々は、精神的な苦痛をなめ尽くした辛いことばかりの繰り返しでございます。何度自殺の誘惑に負けそうになったか知りません。三度の家出を続け、暗い夜道を行くあてもなくとぼとぼと。死んでしまつたらどんなに楽だろうと思ひながら。そんなとき、私はある青年から、五銭の小冊子を買つたのです。生長の家の小冊子でした。当時の私の、それはまさに金字塔でございます。み教えを

生きる尼僧にもなりましたが、それを返上し、母なき四人の子の新しい母親にもなりました。み教えのままに生きることを誓つてからは、数々の奇跡の体験もし、あの苦痛の日々は本当にあつたのだろうかという思いがするほどの幸せになれたのでございます。

そしてさらにはこんなすばらしいご住職さまのみ教えにも触れることができた…。神さまが、私にまた一つの幸せを与えてくださったような気がします。

きつと私もまもなく、人生のゴールインを迎えることので

しよう。今は、その一歩手前、一所懸命生きていたい、と、私の半生を「自分史」として綴る毎日でございます。もう、原稿用紙に二百枚以上になりましたが、いつかご住職さまにも読んでいただけることを夢みて、感謝の日々を送っております。

第二の人生のテーマは
「心の安らぎ」

栃木県 植竹 久夫

私は今年で満五十五歳になり、長年勤めていた旅行会社を定年退職することになりました。その後は、関連会社に

移籍となり、十年くらいはそこで勤めることができそうです。ただし、役員として末席をけがすので、成績が悪いとクビにされるかもしれません。

でも、クビにされるかどうかよりも、いつまでも元気で働くことができるかどうかがちよつと心配ですね。経済不況で厳しい昨今、働けるのは体にもいいし幸せなのです。が、老化だけはどうしようもないので不安です。黒田ご往職さまのように、いつまでも青年のような大志を抱いてがんばることができればいいのですが。

さて、これまでの「転勤族」からやつと縁を切ることができ、この四月からは故郷である栃木の自然の中に転居し暮らすことになりました。栃木県庁に挨拶にいくと、県庁内や県警本部の中枢には高校時代の同級生の友人が顔をそろえており、まことに心強い限りです。あらためて、我々もそんな年代になったのだなあと実感いたしました。

第二の人生をこうしてスタートさせ、このところよく考えるのは、自分にとって「心の安らぎ」とは何なのか、どうしたらそれを求めることができるのかということです。

実家で気分転換をしたり、墓参りをして先祖に祈ることも多くなってきました。

宗教にも今、たいへん関心を持つています。これも「心の安らぎ」を求める気持ちが強くなっていることと関係がありそうです。今度一度、坐禅を組んでみたいと考えています。その折にはぜひご教示いただきたく存じます。

自然の流れのままに

意義ある人生を

兵庫県 東郷 優

「始め有らざるなし、克く終わり有るは鮮し」と申しま

すが、とにかくにもこの春無事に、三十七年間お世話になった株式会社ナリス化粧品を退社いたしました。終わりをめでたく結ぶことができたことを本当に感謝しております。

ふり返れば、ナリスに勤めさせていただいてよかったと思えることが数多く思い出されます。仕事も楽しかったし、すばらしい人との出会いもたくさんありました。先代社長との出会いは、まず一番にあげられます。「ああ、この人なら信じてついていける」と確信して、ともに仕事ができたことは、一生忘れることはで

きないと思えます。職業こそ違いますが、黒田武志先生との出会いも、私の人生の貴重な宝です。初めてお会いしたときの印象を今でもはつきり覚えています。「初対面だというのに、なぜかとても懐かしい思いがする人間がいるものだ。まるでずっと以前から、目に見えない何らかの手で出会わせていただけたような気がする」と感じたものでした。そして、会うたびに、先生に強烈に魅きつけられていったのです。「何という奥深い男だろう。強く激しく情熱的。なのに、その中に繊細な感じやすさと優しさを兼ね備えてい

る」。この一見不条理な性格の複合性が、きつとすばらしい魅力となつていたのでしよう、先生はあれよあれよという間に大きくなられました。

そんな黒田先生に最後にお別れのご挨拶をいただいて、とても嬉しく感じました。ナリスの苦難時代を偲び、そして、現代は繁栄に踊り忘却されがちな、*「続ける」ということ*の大切さを語られました。私も最後までナリスが好きでしたし、今でも死ぬほど好きです。

退社するとも私は、「四月には、桜が咲くと同時に新入社員もたくさん入ってきます。

これから咲くもの、散つていくものがあるのは自然の流れ。その流れのままに、退めさせていただきます」と最後の挨拶をいたしました。「会社にも六十歳前後の人がたくさんいます。よくいってくれました」と喜んでいただけました。

しかし、愛着と未練……。退社後一カ月間は、それは淋しい気持ちがありました。

ふと、黒田先生に昔いただいたご本の一節を思い出しました。これは、ある一禅僧の言葉です。

『人の世は微妙なり。ある時期は大いに有用であり役立つ

た人物でも、その時期が過ぎて新しい時期に移れば、もう用をなさぬもの。四季の衣服に似たり。春は春衣。季節季節に用をなす。四季は毎年相似たり。人相同じからず』

まったく思いました。今は心も落ち着き、収入も大事ですがそれ以上に、意義ある人生を過ごすために、武士は食わねど……の精神で、自責し、己を厳しく律して参らねばと思っております。

かつて先代社長にこんなふうに教えをいただいたことがあります。

「君は小学校卒だね。それはそれで良い。でも人並ではない

けない。この訓を基とせよ。

貧富貴賤は天命で有つて神道に立つ。繁栄は祖先の余慶と伝統の厚恩による。これを忘れることなく忠勤せよ。利欲の私道を絶ち、かたく義理の本心を守りて立てるならば、富貴決して偶然にあらず。

これから余命も、この教えを胸に歩んで参りたいと思ひます。

黒田先生には長年、兄弟共々たいへんお世話になりました。まだ一人、傾奇者かばきが残っております。かぶき者を指導することは不可能といいますが、しかし、だからこそお

もしろい存在なのかもしれません。どうぞよろしくお導きのほどをお願い申し上げます。



善光寺住職・黒田武志老師の軌跡

『明日を生きる』に寄せて

●「明日を生きる」は、人生の指針として、まことにありがたく、参考になりました。もっと早く読んでいれば、私の人生観もだいぶ変わったように思います。

静岡県 岩谷 朝吉

遠に尽きることない仏の大生命に通じることであることを教えられ、私もそのように生きていきたいと思えます。

東京都 林 博明

●黒田方丈さまの人生の歴史と年輪を感じ、また、人間の生き方がありのままに表現されていて感銘を受けました。人間、一生懸命に打ち込んでいけば、無常の中にならながら、それは永

●「明日を生きる」を読み、心温かく、豊かな気持ちを持たせていただきました。

神奈川県 田村 憲子

●青春の日の夢から、日常の五心に至るまでの、

黒田ご住職の生きざまを拝読し、たいへん感動し、自分自身が磨かれました。

東京都 斉藤 稔

●心に染まる「明日を生きる」を、永く座右に置かせていただきたいと存じます。

埼玉県 永井 光延

●黒田先生の貴重なご体験、感銘深くし、心身ともに引き締まる思いがしました。ナリス講堂の参禅会は、早や二十七年前になりますが、先生のご指導はなつかしく、生命に強く印象に残っております。

兵庫県 面川 勝治

●「いったいこの感じは何だろう」と、何か言葉ではいえない幸せな感覚を味わせていただきました。仏教の仕事にたずさわり、数多くの

書物を読んだはずなのに、「明日を生きる」はまったく新しい新鮮な感動です。仏教の誠は托鉢——本当に嬉しい文を読ませていただきました。

静岡県 山口 博信

●ご苦勞された体験や、多くの尊い経験が、今の武志様を生んだんですね。白純様の穏やかな姿が浮かんでまいります。

神奈川県 黒田 トシ

●黒田住職さまのお若い頃のご修行の様子を知ることができ感動いたしました。いっそうのご指導をよろしくお願いいたします。

大阪府 金田 孝子

●幼少年期のご苦勞の数々、托鉢修行の厳しさには並々ならぬものがあり、涙のにじむのを禁じえませんでした。ありがたく、誠に法幸に存

じ上げます。

長野県 伊藤 真愚

ります。

東京都 宇衛 康弘

●「明日を生きる」にはたいへん感銘を受けました。以前からいろいろとご活動の様子は聞きしてはいましたが、詳細なお話を読ませていただくのは始めてで、あらためて感動いたしました。

神奈川県 新井 勝龍

●たいへん興味深く、心打たれる思いで読ませていただきました。

神奈川県 田中かほ里

●あの特異な体験、修行があつてこそその海外留学僧派遣育英会の発願・発表であることを深く感じさせられました。ありがとうございます。

静岡県 鏡島 元隆

●黒田ご住職さまには頭が下がるばかりでございます。私も、私自身のやり方しかできませんが、少しでもご住職さまに近づけるよう精進いたす所存でございます。

神奈川県 萩生田千津子

●黒田さまのご講演「明日を生きる」にはたいへん心打たれるものがございました。今後ともご活躍くださいますよう、心より念じ上げてお

新名称「横浜善光寺留学僧育英会」に 決定

横浜善光寺の黒田武志方丈が理事長を務める、「善光寺海外留学僧派遣育英会」の名称が平成五年二月六日に開催された理事会において、「横浜善光寺留学僧育英会」に変更されることが決まった。日本の若き僧侶を海外へ送り、仏教の原点にもどり互いを尊重し理解し合い世界平和へ導くことを願ってスタートしたこの会。設立九年を迎え、海外からの日本留学希望者が年々多くなってきたことから、この新名称が誕生することとなった。

新名称決定と同時に、名誉顧問、顧問、理事、参加が新たに委嘱された。

横浜善光寺留学僧育英会新名誉顧問は次のとおり。

大本山永平寺貫首

丹羽廉芳禪師

大本山総持寺貫首

梅田信隆禪師

天台宗座主

山田恵諦猊下

東京大学名誉教授・東方学院院长

中村 元先生

大韓仏教曹溪宗

尹月ユングオルハ下禪師

靈鷲叢林通度寺方丈

スリランカ大菩提会会長

ヒデイガレー・パナテッサ大僧正

タイ国ワットパクナム住職

プラタムパンヤーボデー大僧正

森山南米開教総監の激励歓送会
開かれる

森山南米開教総監の激励歓送会 開かれる

この春、南米開教総監としてブラジルの南米別院仏心寺に赴任した森山大行老師を激励して歓送する会が平成五年三月十二日、横浜

中華街で開催された。この会は、横浜善光寺の黒田武志方丈が中心となり、善光寺留学僧育英会が主催したもの。黒田方丈と森山総監は、駒沢大学茶道部の先輩後輩という間柄で、長年の道友同士。当日は、善光寺育英会の関係者や森山総監とごく親しい友人知人、約四十名が会場である「華正楼」の新館に集まった。

まずはじめに発起人を代表して、善光寺留学僧育英会の常務理事である千葉県柏市、龍光寺住職・佐藤俊明老師が挨拶。

「海外布教の若返りのために喜ぶべきことと思います。十年前、善光寺さんの紹介で森山師に会ったときから、これは絵になる風貌だ。将来、輸出できる禅の顔だ」と感じましたね。これから開教総監となり「ビショップ森山」つまり「森山禪師」と呼ばれることになるわけですが、これはたいへんすばらしい名誉なことです。しかし、その一方で、地球

の裏側の国に出向くということは、さまざまに困難も待ちかまえていることと思います。どうか、苦難も乗り越えて、四年の任期を少なくとも三期ぐらいいは務めるぐらいの気持ちでがんばってください」

と激励の言葉をのべられた。

次いで、森山老師が出家する前の学生時代から三十五年來の友人という仙台市 大満寺住職・西山広宣氏（東北福祉大学助教授）が、「互いに切磋琢磨しあったかけがえのない友」と交遊の一端を披露。

善光寺の黒田方丈が出席者一人ひとりを紹介したあと、森山総監の道友、神奈川県 吉祥院住職・小秀夫老師が乾杯の音頭をとった。

森山総監は、

「日本の仏教界のことは諸老師におまかせします。ブラジルのことはどうぞ私におまかせください」

とユーモアまじりに決意のほどを語り、ごく親しい友人たちの心のこもった集いに終始、感激の面もちだった。

**黒田理事長、辞令を渡すため
韓国、タイ国へ**

理事会で決まった新名誉顧問の辞令を渡すためさっそく二月、横浜善光寺留学僧育英会の黒田武志理事長が、韓国の大韓仏教曹溪宗靈鷲叢林通度寺の尹月下禪師のもとを訪れた。次いでマレーシアのメタ・ピラ禅堂視察の序でタイ国ワットパクナム住職プラタム・パンヤーボデー大僧正と会見、辞令を手渡した。お二人とも国を代表する高僧。両氏は快く黒田理事長を歓迎し、これからも育英会を通じて親睦を深めていこうと誓いあった。

また、三月にはスリランカ大菩提会会長の



プラタムバンヤーボデー大僧像正



尹月下禪師

ヘデイガレー・バナテッサ大僧正が来日。四月二日(金)横浜善光寺を訪れ、黒田方丈と親しく歓談され、今後も相互の交流をはかり、世界平和のために力を合わせていきたいと激励の言葉を交わし合った。



ヘデイガレー・バナテッサ大僧正と

東隆眞先生、中外日報と大法輪で まぶこころを説く

長年の夢だった韓国の曹溪山松広寺拝登を、昨年八月に果たした駒沢女子大学副学長・東隆眞先生(横浜善光寺留学僧育英会理事)の論文『韓国松広寺と普照国師知訥』が、四月九日、十二日、十三日と三回に亘って中外日報に連載された。曹溪山松広寺チョググサンソングワクワンサは、大韓仏教曹溪宗の三大寺院の一つで、僧宝の寺院としても知られ、韓国の禅の根本道場として位置づけられている崇高な仏教寺院である。松広寺の開山の祖は普照国師(一一五八―一二一〇年)。智訥禪師と呼ばれ、曹溪宗開山の祖ともいわれている高僧。

松広寺の前住持から、知訥禪師の著作を集めた全集『普照全書』を恵与された東先生

は、その中におさめられている『真心直説』についても紙上でわかりやすく教えてくださっている。人間が誰でもそなえている『まごころ』。しかし、本当のまごころの力を発揮できる人もいれば、そうできない人もいる。どうすれば、発揮できるのか：先生のご文章によつて、日本や台湾にも伝わっている、まごころの真の意味と大切さを、読者は改めて気づかされるだろう。

また、東先生は、知訥禪師の禪と、日本の道元禪師の禪の共通点と差異点を示し、両者を比較考証してみること、日韓の相互理解と交流をはかることに役立つと述べられている。そして最後に次のように結ばれている。「いま、地球、人類の危機的状況のなかで、宗教、仏教の位置づけと役割が問われている。(中略) 仏教者である限り、僧侶であろうと学者であろうと檀信徒であろうと、それぞれ

重大な責務を担っているはずである。大乘仏教と上座仏教を問わず、日本と韓国とを問わず、縁のあるところから、できるところから、釈尊の真心に通じる道を探っていかなければならない。このたびの韓国・松広寺拝登は、そのことを私に教えてくれたのであった」

『大法輪』六月号には「台湾・台北の仏教点描」と題し、昨年十二月に、黒田方丈と訪問した台北市の仏教事情などを発表されている。ここには、「真心直説」の関係資料を蒐集するなかで、台湾の僧・林秋梧法師と、駒沢大学第八代学長・忽滑谷快天博士との深い師弟関係を知ることとなった経緯などが述べられている。林秋梧法師は普照国師の著作『真心直説』の注解書『真心直説白話注解』を著わしている。

善光寺ニュース

育英生韓仁徹氏がフィラデルフィアに 観音寺を建立



善光寺留学僧育英会第八回育英生である、
韓国の韓仁徹氏がこのたびアメリカのフィラ

デルフィアに

「観音寺」を

建立した。

韓仁徹氏

は、立正大学

大学院文学研

究課で博士後

期過程仏教学

を専攻。物質

的には繁栄を

享受しながら、

その反面、



▲観音寺

精神的には孤独感と淋しさを抱いている現代人を、仏教の教えによって救っていきたいと願い、絶えず未来社会を見つめ、これからの仏教徒のあり方を考え続けてきた。私たちはもともと世間に対して、精神的な依るところとして貢献しなければいけない。つまり多くの人びととその苦しみをともに味わい、その苦痛から立ち上がる智慧を彼らに揭示しなければならぬ。観音寺——カンノンブツデイス トテンブルは、きつとアメリカ在住の多くの人に心の安らぎを与える場所となるだろう。

浅草寺「仏教文化講座」で 黒田方丈が講演

東京・浅草寺が主催する第四四九回「仏教文化講座」が、四月二十三日（金）に新宿駅西口の安田生命ホールで開催され、黒田方丈



が「海外に留学僧を派遣して」と題して講演。育英会を設立した動機や現状などを、心を込めて語った。

育英会顧問の小谷亀太郎氏 駒沢女子大学を訪問

善光寺留学僧育英会顧問で、タイ・バンコクにある世界仏教徒連盟本部事務次長の小谷亀太郎氏（バンコク在住）は、来日中の五月十七日（月）、黒田方丈と共に駒沢女子大学を



訪問し、東隆真副
学長（善光寺留学
僧育英会理事）の
案内で、学内を見
学した。

**育英生引田弘道氏が日本印度学
仏教学会賞を受賞**

五月二十二（土）、二十三（日）の両日、高
野山大学で開かれた日本印度学仏教学会（印
度学・仏教学における最大の学会）、第四四回

学術大会において、善光寺留学僧育英会の奨
学生・引田弘道氏（愛知学院大学文学部助教
授）に、日本印度学仏教学会賞が授与された。
昨年十一月の東方学会賞（東方学会）に次ぐ
受賞である。心からお祝い申し上げます。

**不動明王大祭並びに
大般若会法要を厳修**

五月二十八日（金）午前十一時から、恒例
の身代り不動明王大祭並びに大般若会法要が



金岡秀友先生

佐藤俊明老師を大導師に厳修された。多勢の皆様が参集。家内安全、身体健全、商売繁昌など、御祈願・御祈禱が執り行なわれ、東洋大学・金岡秀友先生の講演に、耳を傾けた。

不動明王大祭香語

火中現身眼発瞋

火中身を現じ眼、瞋を発す

金剛宝剑払根塵

金剛の宝剑、根塵を払う

明王威徳昭昭顕

明王の威徳、昭昭として

成寿山頭緑樹新

成寿山頭、緑樹新たなり

恭しく惟れば、山門本日 身代り不動明王

大祭の吉辰に相値う。
謹んで大般若経を転読し、聖不動経・慈救呪・消災妙吉祥陀羅尼を誦誦し、その功德・回らし以て身代り不動明王に供養し奉る。
専ら祈る。正法興隆、万邦和楽、国土安隱、

山門鎮静、消災消除、諸縁吉祥ならんことを。更に祈る。当寺総檀家中、本日参詣の善男子、善女人、諸願成就、如意吉祥ならんことを。至禱至禱

島崎義孝氏が善玄寺の住職に

横浜善光寺留学僧育英会の第3回生で成寿寺でお馴染みの島崎義孝氏が少林山養玄寺に住職として入山されました。今後のご活躍を期待いたします。



◇ 成寿歌壇 ◇

わが道は念と行との二人づれ

行くべき処着く処仏まかせの旅路かな

手にあまる大き荷物を背負いつつ

今日も山路を登りゆくわれ

とし重ね老の身なればしみじみと

そのさみしさとその実を知る

(東京都 錦戸 新観)

巡拝の金剛杖にとりすがり

室戸岬の荒波に立つ

小波立つ池の面は白鷺の

影なうつつして朝日輝く

(香川県 豊永 緑)



天童寺住持明暘法師を名誉顧問に推戴

横浜善光寺留学僧育英会

李幼麟さんは上海復旦大学を卒業、良寛研究のため来日、駒沢大学に留学し、善光寺留学僧第三期生となった異色の人材である。この李さんを案内役として今回の中国訪問が企画された。目的は、一、天童寺拝観と住持明暘法師を名誉顧問に推戴すること。二、杭州浄慈寺拝観と如浄禅師の墓前に詣でること。三、北京雍和宮（ラマ教寺院）で修行中のラマ僧嘉木揚凱朝を留学僧として受入れるについての最後の詰をおこなうことの三点。

六月十六日天童寺に拝登すると、明暘法師、予定が変わり昨日上海の龍華寺（兼務寺）に出かけられた由。そこで徳雲副監院並びに上海人民政府高官王生洪先生を通しての電話連絡により、私たちの旅行日程に合わせて二十日北京の広濟寺（兼務寺）で会ってくださることになった。それで予定通り翌十七日は杭州に赴き、浄慈寺に拝登、釈聖興知客和尚の案内で如浄禅師の墓前で読経。ついて十八日北京經由で西安に飛び、大雁塔、小雁塔拝観、兵馬俑坑、玄宗皇帝と楊貴妃の遊んだ華清池など観光し、二十日北京に戻り、広濟寺



に明陽法師を訪れ、名譽顧問就任をお願いした。役員名簿を提示すると、「両大本山狹下、山田天台座主、中村元先生等の名前をごらんになり、「みな知ってる方々」と顔を綻ばせて快諾、堅く握手をかわして激励してくださった。

次に二十一日、ラマ僧の受入れについて、これは半年も前、台湾の林夫人を通して北京雍和宮で修行中の嘉木揚凱朝を留学僧として受入れてほしい旨連絡があり、本人からも必要書類が送られてきたが、入国手続や身許引受け等につき調整が難航した。というのは、片や台北、片や北京、そして日本語が通じないというのが原因。そこで今回、三者が北京で会合し、結着をつけることになった次第。李さんの同時通訳で話は首尾よくまとまり、嘉木揚凱朝は九月以降愛知学院大学に入学可能の見込み。

今回の旅行の成功は李さんの語学力、人脈、そして人柄に負うところ極めて大で、善光寺留学僧がその力量を発揮してくれた最初の成功例といえなく、これは善光寺留学僧育英会としての画期的な成果だった。



読者のたより

雪深い中で
読む温かさ

沖田 玉映
新潟県

私は今、雪深く、熊も出るような山奥に入り修行をしております。医者に行ったり用事があるときは、新潟市内に泊まりがけでいくようなところです。そのような地で拝見させていただいた、成寿第二十号…。善光寺老師さまのご活躍ぶりがわかり敬服するばかりです。スリランカの仏跡からは、はるか昔の人びとの願い求めた聖境のありさまが伝わってまいりました。また、

永平寺、総持寺参拝の旅では、みなさま本当に和やかに深い絆で結ばれていることを感じ、とても穏やかな幸せな気分となりました。このような気持ちになれるご本を拝読する機縁に恵まれたことをしみじみとありがたく思っております。

仏さまに感謝して
生きるすばらしさ

伊藤 幹雄
兵庫県

子どもたちがそれぞれ成長し、長男は来年大学を卒業予定で就職も決まり、次男は今年四国の大学に入学できました

た。これもすべて、仏さまの
ご加護の賜です。私の社業も、
研修センターが増築された
り、工場の生産現場の拡張を
予定していたり、順調に発展
しています。これもまた、仏
さまのおかげです。日々仏さ
まに感謝して生きることのす
ばらしさを実感しています。

「心もそろろう」を
口ずさんで

東京都
大金きよみ

私は小さい頃から、仏教少
年少女会に毎週土曜日に行っ
ては、和尚さまのお話を聞き、
終わると、「月影の歌」など歌

ったり、おゆうぎをしながら
楽しく家に帰ってまいりまし
た。そのおかげで、八十三歳
になった今も、毎日「ナムア
ミダブツ」を唱えぬ日はあり
ません。このごろは、それと
同時に、『成寿』第二十号の一
五四ページにあった、藤本幸
邦さまの、「心もそろろう」とい
う詩を口ずさむようになりま
した。

『はきものをそろえると心
もそろう

心がそろうとはきものもそ
ろう

ぬぐとときにそろえておくと
はくときに心がみだれない
だれかがみだしておいたら

だまっつてそろえておいてあ
げよう

そうすればきつと

世界中の人の心もそろうで
しょう』

今日は病院で、私も人のほ
きものをそろえてまいりまし
た。なんだか嬉しい気持ちに
なりました。

『成寿』は貴重な
情報源

千葉県
村田 一夫

「宗派の垣根を越え、グロ
ーバルなものの方ができる
修行を目指して、世界的な広
い視野を持ち、国家を越えて

相互理解し合える僧を一人でも多く世にだそう」として始まった、海外留学僧派遣遣育英会も、すでに九回を数えるとのこと。黒田方丈さまの力強さ、信念に心打たれます。

『成寿』も第二十号に達し、ますますおもしろく内容深く、毎回楽しませていただいています。海外旅行に満足にいけない小生は、貴重な情報源として、有意義に拝読させていただきます。方丈さまのまごころに、合掌し、感謝申し上げます。

スリランカの写真、
なつかしく

長野県
小笠原隆元

私は二十年ほど前にスリランカに訪れたことがありません。ダンダーラの石窟内の壁画と仏像のすばらしさには圧倒され、あのとときの感動は忘れられません。このたび『成寿』でスリランカ各地の写真や報告書を見て、なつかしく嬉しい思いがいたしました。『成寿』は、いつも数冊まとめては製本して、私の枕元に置いてあります。本当にありがたいことです。

日常から離れて
ホッとして

東京都
栗本 将信

日々、会社という大きな組織の中にいて、疲れ切つてしまいそうになったとき、私はときたま、感動的な外の世界へ旅立ちたくあります。映画を見たりしてホッとするときもあります。数年前にはスリランカへ旅行しました。今回、『成寿』で、聖山シーギリアの乙女の壁画や、涅槃像の写真を見て、なつかしさを感じ、ホッとした気分が甦りました。

すばらしい出版活動に
感激

千葉県
椎名 宏雄

黒田武志住職の『明日を生きる』を読ませていただき、
托鉢行脚時代のご辛苦にいた
く打たれました。こうした、

一般僧侶にはなかなかマネの
できない積極的な活動性が、
黒田老師を形成する大きなエ
レメントであることは疑いあ
りません。

美しいグラビア、大きく見
やすい活字、そして、ますま
すコクのある記事の数々……こ
れだけのすばらしい仏教誌

を、仏教界における絶大なる
出版活動として誇りに思い、
ますます発展していくことを
心から念じております。

ただただ主人のおかげと
感謝

神奈川県
里 チエ

私どもは、終戦を迎えた翌
年の昭和二十一年の十一月に
朝鮮から引き上げてまいりま
した。しばらくは私の実家に
家族でおりましたが、東京へ
行くという主人について、息
子三人とともに実家を出て自
立することになりました。戦
後の混乱期、どうなるかとも

思いましたが、紆余曲折を乗
り越え、主人はたいへんな苦
勞をして自分の仕事を持って
くれました。おかげで三人の
息子たちを、何とか食べさせ、
教育することもできました。
私も息子たちも、主人のこ
とは、本当にすばらしい努力
の人だとしみじみ思っております。
それに比べて私は、何
の能力もなく平凡で、ここま
でやってこれたのは、ただた
だ主人のおかげ、と、仏壇に
お供えをして、感謝する毎日
です。

心の富める者に
なりたい

石川県
大平れい子

日蓮上人さまは、「私は日本一貧しき者なれど、仏法をもつて論ずれば、第一の富める者なり」とおっしゃいました。日蓮さまは、清貧に甘んずる生活をしながらも、心の中はいつも豊かで、靈山浄土の釈尊とともに生活をしておられるような、法悦に満ちあふれたお気持ちで過ごされたのです。

ありあまるほどの物の中で、ぜいたくに暮らしながら、

心の中は貧しく、殺伐とした現代に住んでいる私は、日蓮さまの生き方を見て、大いに反省いたしました。まだ二十歳なので未熟ではありますが、日蓮さまのような心の富めるような人になれるよう努力していきたいと思います。心の富める者とは、信仰の中から生まれてくるのですね。

カラーグラビアの
すばらしさに感銘

神奈川県
落合 一恵

このたびのスリランカご訪問といい、黒田老師さまのたゆまぬご着想とその行動力に

はただただ感服させていただいております。私などの思考発想をはるかに超越した、まさに雲上人のごとき存在にさえ感じられ、このようにお手紙を差し上げることも恐縮に存じます。今回の『成寿』も、いつもながらの内容の充実に加えて、カラーグラビアのすばらしさに感銘いたしました。この上は、ご老師さまの高邁なご誓願、「宗祖を通して釈尊に還れ」の精神がますます円えんじょう成されますようにお祈り申し上げます。

スリランカの様子が
よくわかりました

神奈川県
安藤 嘉則

今回の『成寿』では、黒田
老師の「明日を生きる」、また
「スリランカ特集」にとても
心魅かれました。「明日を生き
る」には、たいへん感動を覚
え、今日の善光寺における教
化活動・海外留学僧派遣育英
会の原点を、老師の若き日の
行脚の日々に見たような思い
です。「スリランカ特集」では、
巻頭グラビアは貴重な写真で
あり、同時に現在のスリラン
カ仏教の様子を詳しく知るこ

とができました。私の尊敬し
ているウパティッサ師が幾度
か写真に登場されており、師
が情熱を傾けているスリラン
カの幼稚園の様子も知ること
ができ、本当に嬉しく思いま
した。

回をおうごとに
充実するご本

福島県
遠藤 由美子

光陰矢の如しの言葉のよう
に、御母堂さまがお亡くなり
になられてから一年余が過ぎ
てしまいました。まるで夢の
ようでございます。どんなに
かお淋しい毎日であられたこ

とかと謹んでご拝察申しあげ
ます。ご無沙汰を重ねており
ますが、早く拝登しご焼香さ
せていただきたいと、その日
を待ち望んでおります。

雪に閉じ込められておりま
すと、無性に横浜の空気がな
つかしくなります。時折、『成
寿』を拝読しながら、回をお
うごとに充実する内容に驚き
つつ、温かい思いで胸一杯に
させていただいております。

黒田方丈さま、奥さまがおひ
まになられることは絶えてな
いのかもしれませんが、いつ
か心ゆくまでお話できたらど
んなに嬉しいかと、お優しい
お声を思い出します。お目も

じ叶いますことを、心から願
っております。

大好きな善光寺さまに
納骨させていただいて

神奈川県
中尾 憲悦

昭和五十八年三月、私は善
光寺さまに、亡き家族の遺骨
をお預りいただきました。離
れがたい気持ちでいっぱい
ございましたが、いつまでも
そばに置いておくわけにもい
かず、それに納骨は私の念願
でもありましたから、一番安
心できる、大好きな善光寺さ
まに納めさせていただいたの
です。あの日から十年余り：

方丈さまはじめ皆さまには、
本当にお世話になりました。
ありがとうございました。無
事に今日の日を迎え、本望で
ございます。

善光寺さまにおうかがいす
るたびに心が安らぎ、自分の
実生活のみにくさに恥ずかし
い思いがいたします。生きて
いる限り、その現実との戦い
が続くのでしょうか…。人生
を前向きに考え、できるかぎ
り周りの人の幸せを思っ
て暮らしているつもりな
のですが、しよせん、私は
驕りたかい人間なんだと反省
することがあります。

近い将来、私も横浜を離れ

る日がくるかもしれませ
んが、どこに行きましても
善光寺さまのことは一生
涯心に残ることと思いま
す。

方丈さまもお体を大切にな
さって、どうぞますます皆
さまを希望と安らぎへお導
きくださいませ。奥さま、
お寺の皆様によりしくお伝
えくださいます。ありが
とうございました。





多くのお便りありがとうございます。
ございます。



★『成寿』は、かたちも中身もたいへん立派なもので、一寺院でよくぞここまでと感服いたしました。

東京都 井上 文夫

★佛心理解にはほど遠い者で

すが、毎回、文章、写真、絵それぞれに心ひかれ、しばし時間のたつのを忘れます。ありがたいとは、このような時間に逢えることと勝手に解釈しながら、拝読させていただいております。

神奈川県 広島 一雄

★いつも頭の下がる思いで記事を拝読させていただいております。このたびはスリランカ特集としてたくさんの写真が載っており、かねてスリランカの仏跡を参拝した頃のことを思い出し、なつかしく思いました。

東京都 芦辺 鎌禅

★美しいスリランカの写真の数々、堪能させていただきました。

東京都 飯田 利行

★生長の家の機関誌「光の泉」で、黒田武志住職の「じんせい拝見」の記事を読みました。世界平和というグローバルな願いをこめてのご活躍に、あらためて敬意を表します。

栃木県 大嶋 正

★おかげさまで私も元気でおります。親が元気でいることが、子どもへの思いやりと都合よく考えてがんばっています。

神奈川県 石川多加子

★私は、スリランカの聖地を頭において書かれたであろうと思われる「バクテイ シャタカ」なる讃歌を訳したことがあります。ですから、各写真に興味深く拝見させていただきました。

東京都 真野 龍海

★余暇をみて心静かに拝読させていただいています。黒田ご住職さまの御心の豊かさ、寛大さ、そしておやさしさが私の心の奥深くにしみ入り、ただただ、感慨無量でございます。

神奈川県 栗林 豊

★『成寿』を拝読させていただき、かつて知るすべもない世界を、今はふるさとを思うような気持ちで受け止めることができると感じました。これからもどうぞお導きくださいますようお願い申し上げます。

岡山県 島屋原百合子

★郵便物の中に、本山から配送された『眺竜』四月号が入っており、読んで参りますうちに御老師が本山からの派遣僧として、タイ国ワット・パクナムへの記事云々があります。

した。

この御寺は、私にも御縁があり、去る昭和五十八年二月梅田禅師様のタイ国公式訪問の折、私も御随行を許され、参拝して参りました。早速その時のアルバムと日誌を取り出し、当時を思い浮べた次第です。

アルバムからは、お寺の所々に沢山の日の丸の旗が立てられ、禅師様大歓迎の横断幕も掲げられ、僧達の盛大な御出迎えをいただき、又日本からの留学僧もおられ、案内と通訳に当っておられました。そしてアルバムの写真説明には総持寺とゆかりの寺ワ

ット・パクナムと記してあり
ました。

又、日誌では、法要で大悲
心を皆と諷誦すと書いてお
り、当手を振り返り懐しく思
った次第です。

大曲市 鈴木光太郎

★急に大玄さんにお会いでき
る機会を得ました。

大玄さんとは十年前のアメ
リカのみネソタ以来の仲でござ
います。大玄さんが佛門に
入られることとなり、しかも
曹洞宗に関心を持ち、偶々ご
老師より得度をしていただき
ましたが、何とご老師のご親
戚が私どもの近くの常在院様

とは、ご縁の不思議なことに
只々驚くばかりでございます。

今回おみやげに、貴寺の機
関誌「成寿」をいただきましたし
て有難うございます。興味深
く読ませていただいております。
ご老師の、今は亡きご母
堂様に寄せられる追慕の念
を、私も同じ気持ちで拝読致
しました、ご母堂様のご冥福
をお祈り申し上げます。

また真摯な佛教者として生
きようとする熱意のある若者
に慈愛あふるる手をさしのべ
られ、報恩事業として海外留
学僧派遣育英会を運営されて
おられることに深く感銘を受
けております。この事業の

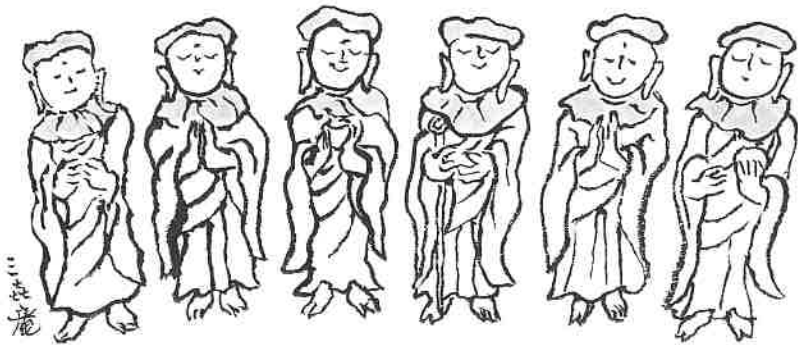
益々の発展を祈念申し上げる
ばかりでございます。

福井県 田中 孝学

★いつも楽しく、また、気持
ちが引き締まる思いで拝読し
ています。黒田方丈さまをは
じめ周りの方々が活き活き
と、そして清らかに生活して
おられる様子が伝わってま
います。

埼玉県 今泉 源由





いつも温かいおたよりありがとうございます。成寿では、読者のページをいっそう心ふれ合う豊かなものにしていきたいと考えております。そこでみなさまからさまざまなテーマのおたよりを募集し、掲載させていただこうと考えています。

●テーマ例

「私の新発見」「お料理アイディア」

「うちの素敵な家族紹介」

「うちの近所のユニークなお坊さま」

「私の作った詩、俳句、短歌」

「投稿写真」「成寿のご感想ご意見」など何でもけっこうです。

おたよりお待ちしております。

〒233 横浜市港南区日野町一六〇四

成寿山善光寺

「成寿」編集部

留学生からのたより

アメリカ

藤田 一照

ごぶさたしております。先日は『宗教と現代』『女性佛教』を送って下さりありがとうございました。自分の拙い文章がああいう雑誌に載って少々気恥しい気がします。

さわやかな初夏をむかえ畑仕事が本格的に始まりました。4月末から5月はじめにかけてロスアンゼルス市の禅宗寺の坐禅会のみなさんがタサハラ禅センターで3日間の摂心をもたれ私を講師として呼んで下さいましたので、行ってまいりました。今月はもうひとつ近くの Insight Meditation Center という南方佛教系の Meditation をしているところで典座教訓の話をする事になっています。来月はボストンの同じような Meditation Center で「磨磚作鏡」というテーマで話をします。曹洞宗の僧がこの界限にあまりいないので私のような未熟者にもこういう依頼があるのです。自分の勉強と思ってひきうけさせてもらっています。

先日、例の修道院を Easter 祭の折にたずね、古式にのっとりた儀式に参加させていただきました。ある神父さんとも個人的にインタビューをしました。もう一度つっこんだところをきいてそのうちひとつの文章にしようと思っています。この神父さんは16歳の時からこの道に入られ現在45歳の方です。来歴、修道院での生活ぶりを中心にうかがいましたが、現在アメリカのキリスト教界の一部で進行中の瞑想ブームに対して伝統に立つ側から興味深い意見をいただきました。(この方はイギリス出身です。)東洋の修行法(Yoga や坐禅)の影響をうけてキリスト教の伝統の中に埋もれていた瞑想行を復活させようという動きがキリスト教の活性化の一端として進行中ですが、これをどう見るかというところに焦点をあててひきつづき学んでいきたいと考えています。またベネディクト会の会則を我々の清規の観点から検討してみると、双方の「僧院」という修行形態の異同が浮きぼりになるのではないかと、今、漠然とですが思っているところです。

はなはだ簡単ですが近況を述べさせていただきました。

2月の伝達式には参加できませんでしたが、他の第9回留学僧の方々にもよろしくお伝え下さい。

合掌

留学生からのたより

オランダ

早川 敦

理事長先生におかれましてはますます御清栄のことと御慶び申し上げます。

今週より第三学期がはじまりボーデヴィッツ教授のシュヴェーター・シュヴァタラウパニシャッド、ファン・ダーレン博士のヴィシユヌプラナーナその他の授業に出席しております。先日ヘーステルマン教授と修士論文のテーマについて協議し、古代インドの葬儀について研究したらどうかとの指唆を頂きました。葬礼の研究を通じて古代インド部族社会の構造に迫ることができれば、仏教研究の面からも面白いかと存じます。

6月に佐藤誠司氏がキール大学に留学が決定との知らせを耳にいたしました。同氏にとってもインド学研究室にとっても慶賀すべきことと存じます。誠に研究室ぐるみで御恩にあずかり、感謝の言葉もございません。権氏、佐藤氏と共に学問に励み、御恩を報じたく存じます。

まずは右まで。末筆ながら理事長先生の一層の御健康をお祈り申し上げます。 謹言

93年 4月24日

ご寄付御礼

〈育英会寄付者〉

大津 正二殿 五百万円
 匿 名殿 百万円
 久保田賢一殿 三十万円
 越石 周平殿 十万円
 丹羽 徹象殿 十万円
 宮林 昭彦殿 十万円
 瀬之間政勝殿 十万円
 遠藤 岑翠殿 十万円
 中村 淳子殿 八万円
 三浦 靈園殿 五万円
 日本宗教研究会殿 五万円
 石川 征一殿 五万円
 飯塚 トリ殿 五万円
 永代 素宏殿 三万円
 安藤 康哉殿 三万円

一郷 正道殿 三万円
 片山 一良殿 三万円
 柳下 明殿 二万円
 小泉 孝子殿 二万円
 中村 正信殿 二万円
 岩井 文子殿 二万円
 萩生田千津子殿 二万円
 太田 好信殿 一万円
 大場 満洋殿 一万円
 国安 智哲殿 一万円
 田代 盛夫殿 一万円
 越前 竹子殿 二万円
 新木 定夫殿 一万円
 松沼 正雄殿 一万円
 内海 忠男殿 一万円
 匿 名殿 一万円
 匿 名殿 一万六千円
 井上 葉智殿 五千円

須佐 栄治殿 一万円
 太田 正孝殿 一万円
 大金 五男殿 一万円
 稲垣 重弘殿 一万円
 田口 基夫殿 一万円
 羅 漢 寺殿 五万円
 潮 音 寺殿 四万円
 佐々木教悟殿 三万円
 宮本 延雄殿 三万円
 岩波 道俊殿 二万円
 石井 修道殿 二万円
 見 性 寺殿 二万円
 柴田 秀晃殿 二万円
 能 光 寺殿 一万円
 吉原木工所殿 一万円
 椎名 宏雄殿 一万円
 黒田 トシ殿 一万円

〈成寿賛助〉

豊永	太田	村上	島屋原	宮田	国安	伊藤	桜井	奥山	齊藤	徳山	大津	飯田	櫻井
緑殿	好信殿	博中殿	百合子殿	林産殿	智哲殿	真愚殿	秀雄殿	大観殿	みよ殿	暉純殿	正二殿	利行殿	和子殿
三千円	五千円	五千円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円

「横浜善光寺留学僧育英会」ならびに「成寿」に、上記の方々よりご寄付をいただきました。心からお礼申し上げます。



FOREWORD

Last autumn, Zenkoji-Temple women's club went and worshiped at Eiheiji-Temple and Sojiji Soin-Temple. It has been my dearest wish and I am very pleased that every participants were very glad about that.

Eiheiji-Temple and Sojiji-Temple, which are very famous as the headquarters of the Soto Sect in Japan, and many people for worship has been continuously visited there.

However, people has been gradually decreased who know the following facts; Sojiji-Temple had been at Noto Peninsula for 6 years, propagated Soto Sect doctrine all over Japan. It has been only 80 years or so since Sojiji-Temple moved Tsurumi Yokohama. That's what I thought we should go and worship Soin. Now I hope that every Soto Sect temples and believers must be more and more interested in Soin.

So this volume runs the writing of introduce Soin by Professor Azuma and the sketch of Soin. Please think of that as valuable treasure.

Next topic is my visiting Malaysia this spring. Rev. Sato's writing about this trip appears in this book, so that maybe you know that Zenkoji Scholarship has grown up to be called for by unexpected society. This is contrary to our first anticipation.

By the way, the countries which I visited with Rev. Sato reached 10, as a start we visited India 1987 and other countries. Fortunately, we celebrated 25 anniversary since our temple has established. A total member of scholarship priests were 47, and the countries where they went were 18. Now we are considering memorial events, and as one of the plans we think to publish travel book. Please looking forward to seeing this book.

編集後記

▼成寿二十一号をお届け致します。

一九八三年夏の創刊号から十年を経て二十一号となりました。毎号、伊藤三喜庵先生に表紙絵を飾っていたが、改めて創刊号から振り返ってみますと、感無量でございます。これも偏に檀信徒の皆様、善光寺に心をお寄せくださる方々のお力添えと、心から感謝申し上げます。

▼善光寺ニュースでもお伝えしましたが、「善光寺海外留学僧派遣育英会」の名称を「横浜善光寺留学僧育英会」と変更しました。留学僧は今までに18カ国47名を数えております。一寺院が始めたことではあります。次第に各方面から注目されてきており、その重責を感じますと共に、一層の努力をさせていただきた

いと思う日々でございます。

▼能登の総持寺祖院では、昨年八月に遷化された監院鷲見透玄老師の後に、鷲見老師と関わりの深い丹羽徹象老師が就任されました。善光寺育英会では丹羽老師を顧問にお迎え致しましたので、グラビアと本文で祖院を特集しました。

▼昨年十一月、スリランカ訪問の折に、大菩提会会堂で、ヘティガレー・パナティッサ大僧正にご紹介いただいてお会いしたエクスサランサー・R・プレーマダササ大統領は、五月一日、爆弾テロで暗殺されました。

半年前の大統領との固い握手を思うにつけ、あまりのショックな事件に、ただ驚くばかりです。心からご冥福をお祈り申し上げます。

▼三十年前の私との出逢いを綴ってくださった東郷敏氏の一文は、熱の

籠ったものです。第一部は次号も続きます。どうぞご期待ください。

▼次号の特集は中国です。道元禪師がご修行された天童寺を、佐藤俊明老師、黒田方丈が中国の留学僧・李幼麟師と共に拝登し、その記事を集めます。

▼7月23（金）、24（土）の両日は、本寺・栃木県光真寺の夏大祭です。参拝ご希望の方は善光寺事務局までお申し込みください。

▼盛夏を迎え、皆様には充分にご自愛くださいませ、日々を大切に過ごして参りましょう。

成寿 第二十一号

平成五年七月二十日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野町一六〇四

電話 〇四五（八四五）一三七一

FAX 〇四五（八四六）二〇〇〇

印刷所 神奈川新聞社出版局



三
世
尊





横浜善光寺

成·寿

21卷

SEIU

夏季号

1993年



横濱善光寺刊

苦を受け止めて

「すべての行は

くるしみなり」と

かくのごとく

智慧もて知らば

彼は

その苦しみを厭うべし

これ清浄に入るの道なり

(法句経)

大本山総持寺祖院



浩然と屹立する大本山総持寺祖院の山門。前は、はくじきょう白字橋。



仏殿。客殿を兼ねている。襖には、山岡鉄舟の雄渾な書作品がある。





僧堂。内部の正面には、「選仏場」の大額がかかげられている。渡辺玄宗禅師が遷化される前年(94歳)に書かれた。



経蔵。江戸時代の建築。屋根の句配の曲線が美しい。



伝燈院。ご開山瑩山禪師のご靈廟(開山堂)。



衲衣を着て、その上に袈裟(大衣)をかけた僧形のすがた。法界定印をむすび、結跏趺坐している。頭上には、化仏・阿弥陀如来を安置。慈雲閣ご本尊観世音菩薩。



慈雲閣。明治31年の火災をまぬかれた。祖院で最古の建造物ということになっている。いわば総持寺の伽藍の原点。



瑩山禪師頂相

大本山總持寺藏



峩山禪師頂相

大本山總持寺藏

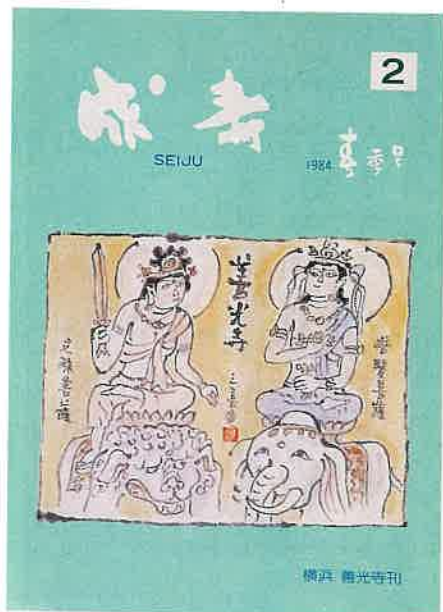
『成寿』のあゆみ

～創刊号から第20巻まで～



1983年(昭和58年)夏季号にはじまった『成寿』も、1993年春季号で第20巻となりました。これを一つの区切りとして、この10年間を振り返ってみたいと思います。

▶一九八三年 夏季号 創刊号
 カラー◆開創十五周年記念式典によせて
 カラー◆開創十五周年記念茶会
 特集◆開創十五周年記念式典
 “偉業を讃えて”
 座談会◆善光寺0歳から15歳まで
 64頁



◀1984年 春季号 第2巻
 カラー◆二つの得度式
 カラー◆善光寺収蔵品
 留学僧派遣育英会の発足

64頁



▶一九八五年 夏季号 第3巻
 カラー◆南方仏教の仏・法・僧
 座談会◆タイの僧院での生活
 第一期留学僧論文

80頁

1986年 春季号 第4巻

カラー◆文殊・普賢菩薩

カラー◆胎藏界曼陀羅

カラー◆善光寺収蔵品

座談会◆タイの僧院にて

80頁



1987年 春季号 第6巻

カラー◆善光寺釈迦殿内陣

カラー◆第一回留学僧タイより帰る

特別寄稿◆留学の決心(中村元)

第二回留学僧論文

88頁



▲一九八六年 夏季号 第5巻
 カラー◆円空仏・不動明王像
 カラー◆ボリスカウトの参禅会
 カラー◆善光寺収蔵品
 特集◆燃え続ける芸術人生—伊藤三喜庵先生を訪ねて

80頁



1987年 夏季号 第7巻

カラー◆インドへ
旅行記◆インド旅行記(佐藤俊明)
特別寄稿◆インド留学のころ(高崎直道)
第三回留学僧論文

106頁

1988年 春季号 第9巻

カラー◆詩

カラー◆二童子開眼法要

特別寄稿◆日仏セミナー

(フランス・パリで講演)

講演◆仏との出逢い(錦戸新観)

▼ 106頁



第8巻

成書

SEIJU

1987

冬号

横浜 善光寺刊



第9巻

成書

SEIJU

1988

春号

横浜 善光寺刊

▲ 一九八七年 冬季号 第8巻
カラー◆ニューヨーク・マウンテンセンター
カラー◆タイ留学僧激励
カラー◆美術シリーズ
特別寄稿◆禅について(鎌田茂雄)
講演◆ふるさとへ還るおみやげ
(遠藤太禅)
122頁

一九八八年 夏季号 第10巻
 カラー◆タイ ワットパクナムよりの奉迎仏
 特集 ◆タイ法式による得度式
 調査・研究 ◆アジアの遺跡保存と日本人(石澤良昭)
 112頁



第 11 巻
 成者
 SEIJU
 1988 冬季号



横浜 善光寺刊

▲ 1988年 冬季号 第11巻
 カラー◆中国の仏
 特集◆海外留学僧派遣育英会の将来について(東隆眞)
 第四期育英生入選論文
 106頁

1989年 春季号 第12巻
 カラー◆ロス・ゼンマウンテンの法戦式
 特集◆前角老師の偉業(佐藤俊明)
 128頁



戒 毒

SEIJU

1989 秋 季号



横浜 善光寺刊

▶ 一九八九年 秋季号 第13巻
 カラー◆燦然と輝く大日如来
 特別寄稿◆世界的視野に立つ宗教
 家の育成を(山田恵諦)
 対 談◆世界に活眼を開く人材を
 育成したい(庭野立正校成会会長・
 黒田任職)

138頁

戒 毒

SEIJU

1990 春 季号



横浜 善光寺刊

◀ 1990年 春季号 第14巻
 カラー◆甚妙泰佛国土を歩く
 カラー◆タイふれ合いの旅
 特 集◆ロイ・カトーンの祭り

136頁

戒 毒

SEIJU

1990 秋 季号



横浜 善光寺刊

▶ 1990年 秋季号 第15巻
 カラー◆志は仁なり 韓国を歩く
 カラー◆韓国ふれあいの旅
 特 集◆韓国仏教の現状と今後の
 展望

第六回派遣僧入選論文

150頁

1991年 秋季号 第17卷

カラー◆二仏像成り御堂に坐す

カラー◆開山・榎庵白純大和尚

十三回忌法要

特集◆二仏像成り御堂に坐す

講演◆激動する世界の旅(伊藤博)

第七回育英生入選論文

▼ 160頁



▲ 1991年 春季号 第16卷

カラー◆照耀一念佛 台湾を歩く

カラー◆台湾ふれあいの旅

特集◆台湾仏教交流の旅

164頁



一九九二年 春季号 第18卷

カラー◆韓国・袈裟拝捧の旅

カラー◆ビルマ・世界最大の仏塔

「シユエダゴン・パゴダ」

カラー◆ミャンマー・慰霊の旅

鼎談◆仏の姿に打ち込みて | 仏師・錦戸新観師に聞く

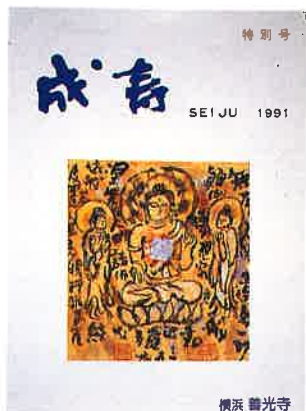
178頁

1993年 春季号 第20卷
 カラー◆スリランカ
 カラー◆永平寺と総持寺祖院参拝
 の旅
 特集◆スリランカ訪問記
 講演◆明日を生きる(黒田方丈)
 ▼ 168頁



▲ 1992年 秋季号 第19巻
 カラー◆アンコール遺跡
 カラー◆追悼 故黒田嘉さま
 特集◆アンコールワット紀行
 第8回育英生入選論文
 172頁

1991年 特別号



1985年 特別号



昭和59年 特別号



◇ 成寿歌壇 ◇

わが道は念と行との二人づれ

行くべき処着く処仏まかせの旅路かな

手にあまる大き荷物を背負いつつ

今日も山路を登りゆくわれ

とし重ね老の身なればしみじみと

そのさみしさとその実を知る

(東京都 錦戸 新観)

巡拝の金剛杖にとりすがり

室戸岬の荒波に立つ

小波立つ池の面は白鷺の

影なうつつして朝日輝く

(香川県 豊永 緑)



カラー	■ 大本山総持寺祖院	成寿のあゆみ	18
巻頭言	●	22
特集	● 瑩山禅師の二大誓願	36
	● 大本山総持寺祖院の伽藍	39
カラー	■ 仏縁にもよおされて	マレーシアとタイ	43
	● 仏縁にもよおされて	56
特別読物	● 出逢い(その一)	66
連載	● くらしの中で読む『正法眼蔵』	76
	● 武徳君の立職を祝す	83
エッセイ	● 知識と知恵	90
留学記	● 二度目のインド国内旅行(1)	93
	● 風の葬送	102
	● 森山師を送る言葉	108
	● 四月のお茶会 桜の花の下で	清和会が開かれる	111
カラー	■ 観桜茶会	113
声	『明日に生きる』に寄せて	117
善光寺ニュース	126
読者のたより	134

題字・さし絵
クラブピア

伊藤三喜庵
五十嵐千彦

『手漉の紙』より

巻頭言

昨年秋、善光寺婦人会主催のもと、かねて念願の永平寺及び総持寺祖院の参拝を実施しましたところ、参加の皆様がたよりたいへんよろこばれましたことはまことに望外の幸いでございました。

曹洞宗大本山、永平寺と総持寺はひろく国中に知られ、参詣、拝観の人波は絶えることなく、ほんとうに結構なことであります。

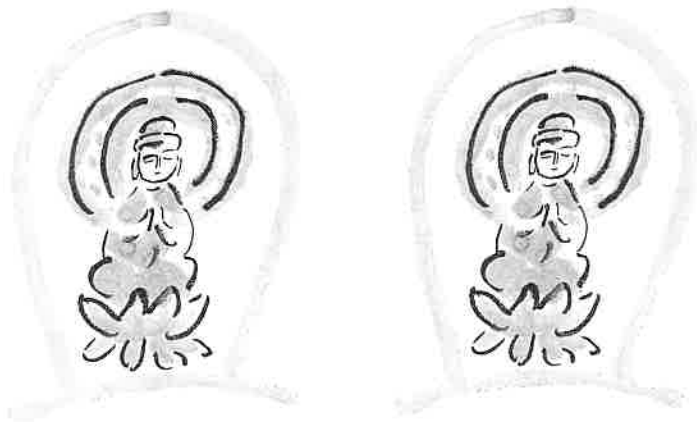
しかし、総持寺がかつて六百年の間、能登半島にあつて、曹洞宗の教線を国中に弘めた中核であつたこと、横浜鶴見に移つてきたのは近々八十年に過ぎないことを知る人は年々減少してきております。この時に祖院を団体で参拝したことはまさに当を得たことであつたと自負するとも、曹洞宗の寺々及び檀信徒はもつともつと祖院に対して関心を深くしなくてはと痛感する次第であります。

それで本号は東先生に祖院紹介の一文を寄せていただき、グラフィックに

は祖院の点描を載せることにいたしました。祖院を大事にいたしましたよ
う。

次に、今春はマレーシアに行つて参りました。佐藤老師の旅行記が載
つておりますのでお読みいただけますが、善光寺留学僧育英会は思わぬ
ところから要請を受けるまになりました。これは当初予想もしなかつ
たことであります。

さて、昭和六十一年インドを振り出しに佐藤老師とともに関係各国を
まわつてきましたが、この程往訪十力国に達しました。さいわい明年は
当寺開創二十五周年に当りますし、留学僧は延べ四十七名、派遣先は十
八力国になりましたので、目下記念事業を検討しておりますが、その一
環として旅行記の出版をと考えております。ご期待をお願いする次第で
あります。



靈妙な槌音

佐藤俊明老師「スリランカ訪問記」(成寿20号)より
「ダンブラ石窟寺院の洞窟に
二千年にわたって響いた
仏像を彫る槌音」に感応して

赤 間 義 徳

「海外に留学僧を派遣し

仏教の振興、世界の平和に

貢献しよう」

大誓願の鉄槌を

黒田方丈さまが

宗派と国境の壁に うちおろした。

昭和六十年以来

留学僧は 四十七名



派遣した国は 十八か国

留学僧たちも

鉄槌をふるって

ひとびとの心に

仏法を刻んでいる。

われら 檀信徒は

毎食のひと口を

献じさせていたたく

喜びに溢れて

耳を澄まそう。

地球全体に くまなく

仏法を刻むまで

たゆまず 彫りつづける

方丈さまと留学僧たちの

靈妙な槌音を

聴くために。

瑩山禪師の二大誓願

善光寺住職 黒田武志

日本曹洞宗総持寺の開祖・瑩山禪師は、二十五歳のとき、

「私は観音さまのように、この世の悩める人たちを、一生をかけて救っていきたい」と願い、二つの誓願をお立てになりました。

一つは、この世が続く限り永遠に、道元禪師の教えを守り広げていくという『白法守護』の願。そしてもう一つは、虐げられていたり、社

会的にも低く見られていた女性を救おうとする『女人救済』の願です。

この二大誓願は一生護持されたものですが、お亡くなりになる直前にも、あらためてお立てになっています。これは、死んでしまえばもうそれで終わりというのではなく、禪師が、三世を貫く永遠の立場に住しておられた方だったからでしょう。



瑩山禅師像

白法守護の誓願

○ 宗派の成立と禅宗の登場

まずは、仏陀の本当の心を求める、ほつ発菩提心の願いである、『白法守護』の誓願を中心にお話しいたしましょう。

仏教には、それは数多くの経典がありますね。その説くところはさまざまで、互いに異なっていますので、すべてを読破して仏教を理解し安心を得ることは、とても難しいことでした。そこで、多くの中から、よりどころとなる特定の経典を選び出し、信奉することによって仏陀の真の意図を明らかにしようとする努力がなされました。そこから「宗派」というものが成立することになったのです。たとえば、『けこん華嚴経』を信奉する華嚴宗、『ほけ法華経』を信奉する天台宗、『三部経（無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経）』を信奉する浄土門……といったふうに。

ところが、ここに一つの批判が生まれてきました。「数多い經典の中から特定の經典をよりどころとするのでは、仏教を正しく理解することはできない。本当に理解するためには、經典の生まれいずる根源にさかのぼらなければいけないのである」と主張する宗派が現れたのです。

それが坐禪宗、すなわち禪宗でした。釈尊がお経を説かれるときは、必ず禪定に入られた。これが經典の生まれいずる根源である。だから、坐禪の修行によってこそ、心の本性が明らかにされ悟りが得られるのである、という主張だったのです。

○ 教宗と禪宗を統一させた道元禪師

さて、禪宗以外の諸宗派のことをひっくり返して、「教宗」といい、先にもいいましたように教宗は經典によって成立しているのです。「仏語宗」ともいいます。これに対して禪宗は、文字・言

語を離れ、心に依ることを重視するため、「教外別伝、不立文字（悟りは、心から心に伝わるものであり、言葉によって書けるものではない）」の立場から、文字や言語にとらわれることを極度に嫌い、それがこうじて、釈尊の説かれた經典までも軽視するようになりました。

そうした行き過ぎの禪宗のあり方に疑問を持ち、対立する教宗と禪宗を發展的に統一させた仏法を説かれたのが道元禪師でした。禪師は、禪宗と称するものは、「仏道をやぶる魔なり。仏祖のまねかざる怨家なり」「宗の称を立せん。如来の弟子にあらず。祖師の児孫にあらず。重逆よりおもし」（『正法眼蔵』仏道の巻）とまでおっしゃっています。かなり厳しいお言葉ですね。しかしその真意は、釈尊の菩提樹下における成正覚を頂点として、それに至る手だてとして説かれた經典は、すべて正伝の仏法そのものであり、一宗一派を分立することは許しがたいこと

であるというお気持ちだったので。

○ 宗旨を世に広げた瑩山禅師

道元禅師はいうまでもなく、曹洞宗の開祖ですが、この、曹洞宗^{ごう}という宗名が世に広がり、今日に至る大宗門となったというところに、実は、瑩山禅師登場の歴史的意義があるのです。道元禅師が、出世間的、脱俗的、理知的、学究的で、宗旨の確立に理想的であったのに対し、瑩山禅師は、世間的であり、情意的であり、実践的に宗門の開発に秀でておられました。つまり、道元禅師は創業の精神能力がこれ以上になく優れていた方で、瑩山禅師はそれを絶やすことなく、正しく大きく広げ続けていくすばらしい才能をお持ちの方だったということですね。

瑩山禅師は、道元禅師の宗旨・白法を守り、よく時代の流れに調和させ、広く大衆に行き渡らせました。しかし、大衆化したとはいっても、

正伝の仏法を水増ししたものではありません。他者を救おうとする大乘的立場に立った『只管^{しかん}打坐^{たざ}（悟りを求めたり、想念を働かすことなく、ただひたすら坐禅をすること）』の修行生活を自ら行いつつ、その禅風を社会に浸透させていったのです。その様子は、釈尊から永平二祖懷奘禅師に至る、仏祖の伝記と法の光の輝くさまを説き示した『伝光録』をはじめ、その他の著作でも明らかです。

○ 永光寺^{えいこうじ}と総持寺の開創

このような瑩山禅師の教化伝道は、世の多くの人びととご縁をつくり、優れた後継者を育成するとともに、多くの寺を開創するというすばらしい事蹟を生み出していったのでした。

まずは、瑩山禅師が開創された永光寺についてお話ししましょう。

今の石川県羽咋市酒井町、当時の酒井保とい

うところに酒匂八郎頼親さかわけの はちろう ちかという地頭職かがおり
ました。その娘さんは、信州の海野三郎滋野信直なほの妻となりましたが、この娘夫婦は、瑩山禅師を深く尊敬し信じ、おすがりして、仏の道を日々熱心に学んでおりました。そしてついに、禅師にお入りいただくことを願ひ求めて、一寺を建立しようと発願し、正和元年（一二二二年）、禅師四十五歳の年の春、酒井保の山を禅師に寄進したいと申し出たのです。そのときの夫妻の言葉はまことにすばらしいもので、

「この山を寄進いたしますので、どうかここに居住していただきたい。寄進したからには、この場所がどんなに栄えようと衰退しようとも、また禅師がたとえ破戒僧になりさがろうとも、さらにはこの土地を他の誰かにお与えになりましようとも、いっこうにかまいません。私たちは、再び管領する気持ちはございませぬ」といふ、至誠あふれるものでした。

瑩山禅師は夫婦の心からの願ひを受けて、その翌年、正和二年、四十六歳の八月にここに茅屋を結んで庫裡（寺院の台所に当たる建物・住職の住むところ）として移られ、終生過ぐす地と定められました。

永光寺はこのようにして開創され、十一年後には禅苑としての規模が整うことになります。しかし、はじめてここにお移りになった頃は、茶湯に松の葉を煎じ、食器の代わりに柏の葉を用い、供養の施米を受けるときは小さなお碗を使い、修行の雲水は飯庫裡や方丈（四畳半ほどの住職の居室）で接待せざるを得ないほどの、きわめて質素な、乏しい物質生活の日々だったのでした。

永光寺が整備されつつある間に、一方では総持寺が開創されました。

それには不思議ないきさつがあるのでお話ししましょう。



永光寺と同じく能登国（現在の石川県）の鳳たけ至郡げしくん櫛比くしひのしやう荘しやうに、諸岳もろおか寺しという、行基菩薩の開基のお寺がありました。ここは、五百年來、観音菩薩さまをご本尊とした、庶民の信仰厚い霊場でした。

さて、このお寺の院主は、定賢じやうけん律師りつしといいましたが、元享元年（一二三〇年）四月十八日夜、（瑩山えいざん禪師ぜんじ五十四歳の年）たいへん不思議な夢をごらんになりました。本尊の觀世音菩薩が夢枕むせまくらに立たれ、こう告げられたのです。

「いま、釈尊の第五十四世でいらっしやる尊い人が、この国の酒井保の洞谷山（永光寺のある場所）に出世して、大いに仏の教えを説法されている。おまえは、すみやかにこの寺を、その聖者に譲り、永く仏法を發展させる道場にしなければいい。」

一方、それからまもない四月の二十三日の明け方、永光寺の禪堂で坐禪をしておられていた

瑩山えいざん禪師ぜんじも、ふと、縁起のよい夢を感じられました。それは次のようなものでした。

観音さまが威嚴のあるりりしいお姿で、手には未敷みぶきの蓮華れんげをお持ちになり、こつ然と現れ、「私はある一つの寺基を、師に与えよう」と告げられ、禪師を誘って古刹の三門に連れていきました。そこでは、多くの人びとが、礼儀正しく出迎えています。禪師は思わず、「總持寺の一門、八字に打開す！」（總持寺の家風が世界に広まるであろう。）

と入門の挨拶を述べられました。その楼門には、錦繡きんすいで装丁した『大般若經』六百卷が備えられており、その手前には放光菩薩がまつられ、周囲には堂塔伽藍が美しく並んでおりました。

瑩山えいざん禪師ぜんじは、坐禪中、夢からさめてしばらく感嘆しておりましたが、それから何日か日は流れていきました。

一カ月半ほどたった六月八日、瑩山えいざん禪師ぜんじは教

化の旅に出られ、諸岳寺の近くにもまいられました。その噂を聞いた定賢律師は、あの靈夢のお方はこの人にちがいないと確信し、一山の多くの人がとともに出迎えられました。話がたまにたま靈夢のことになり、二人の靈感がまったく符合していることに驚いた定賢律師は、夢のお告げにしたがつて、一山をあげて献上することにしたのです。申し出をこころよく受けられた瑩山禪師は、夢で唱えた法語にちなんで、寺号を「總持寺」、山号を「諸嶽山」とし、律院を禅林に改めて、さかんに教化活動を展開されることになったのです。

○ 瑩山禪師の強い決意

ことしより 八幡やわたの神かみの あらはれて
わが立つたぎ 杣まの 守まもとなるかな

われ棲すむと 那坂なさかの山やまも 踏みふならし
苔けのしたきて 人ぞ訪ひひ来る

この二首の歌は、瑩山禪師のお詠みになられたもので、『太祖常済大師御詠歌』第一番・第二番になっていきます。その解説をみてみましょう。「ことしより…」という最初の歌は、禪師が五十五歳のときの作で、あの、夢のお告げのことを詠まれたものだと言われていきます。八幡の神とは、仏法守護の神、八幡大菩薩のことでしょう。禪師は、この神さまの応援をととても喜んでおられるのですね。

前にも述べましたように、永光寺を開創してから永い間、貧しさに甘んじて仏道修行に励んでこられましたから、それを見ていた八幡大菩薩が応援してくださったのです。その応援によって、仏法がこれからますます勢いさかんに栄えていくであろう兆しがはっきりしたと禪師に

は思われ、その悦びの気持ちを歌に表したのでしょう。「わが立つ杣」の杣とは、樹木を植えて材木を採る山のこと、「守」とは「まもり」すなわち守護のことです。

「われ棲むと…」という二番目の歌は、最初の歌を詠まれた翌年、五十六歳六月四日、やはり、夢に關したことを歌に詠んでおきたいという思いで作られたものようです。歌の意味は、われ棲むと——（私がこの寺の住持として仏の修行を行っていることを、世の人びとも知っていることであろう）、那坂の山も踏みならし——

（那坂はさかまく波のこと。さかまく波のように険しく起伏の激しい山をも踏みならし、デコボコの山路が平らになるほど、次から次へと参禅問法の人が訪ねてくる）、苔のしたきて——苔いっばいの山路もいとわず大勢の人びとがやってきて、私の道場で修行に励んでくれる。これはまことに仏法の興隆である）ということであ

りましょう。

この歌のあとには、「ここを以て、子孫絶やすべからず。道人相続して、来際寺院興行。仏法断絶すべからず、これを知れ。後鑑のためにこれを記す」と書かれています。仏法の興隆を法孫たる者、決しておろそかにするでないぞ、ゆめゆめ断絶あるべからず、という瑩山禪師の心が表れています。「これを知れ」という命令形の強い言葉にも、断固たる決意のほどが感じられますね。

○ 達成された『白法守護』の願

さて、白法守護に燃える瑩山禪師の名声は、いち早く中央地方に広まりました。当時の天皇・後醍醐天皇のお耳にも伝わりました。やがて天皇から十種のご質問がくだり、それに対する瑩山禪師の奉答がたいへん深く天皇のお気持ちにかなっていたので、元享二年八月二十八日、

天皇の意を伝える書・りんじ綸旨を賜り、総持寺は日本曹洞宗賜紫出世の道場となるのです。綸旨の要旨は次のようなものでした。

「能登国の諸嶽山総持寺は、中国の曹溪山、六祖大鑑慧能禪師の正しい法灯を継いで、それより洞山良价禪師に伝わる曹洞禪の奥深い道理を広く世の中に明らかに示してきた。それゆえとくに、日本に二つとない禪苑であるので、『曹洞宗出世の道場』として補任する」

この綸旨の下賜については、歴史的事実として疑義もあるとされますが、永い宗門史においては、総持寺はこの綸旨によって出世道場として一宗の本山たることが認められ、同時に総持寺を中核とする宗団が正式に「曹洞宗」と称するようになったと伝承されています。

それが今日の大宗門となったのであり、瑩山禪師の二大誓願の一つ『白法守護』の誓願は、めでたく達成されたのです。

女人救済の誓願

○ ご母堂の願いを受け継がれて

次に、『女人救済』の誓願について申し上げます。先ほども述べましたように、瑩山禪師は非常に世の中の多くの人びととのご縁が厚く、とくに女性に縁深いお方でありました。

女性を救いたいというお心の根源となっているのは、禪師の母・懐観大姉の感化でした。この母君に向ける、ご恩への感謝の思いが、広く世の女性の悟りの心の開発へとつながっていくのです。

禪師五十一歳のとき、加賀の浄住寺にいらっしやった母・懐観大姉が八十七歳でおかくれになりました。

その臨終の枕辺でのご遺言、

「女性というものは、苦勞の多い運命に定められて生涯を過ごさなければなりません。どうぞ

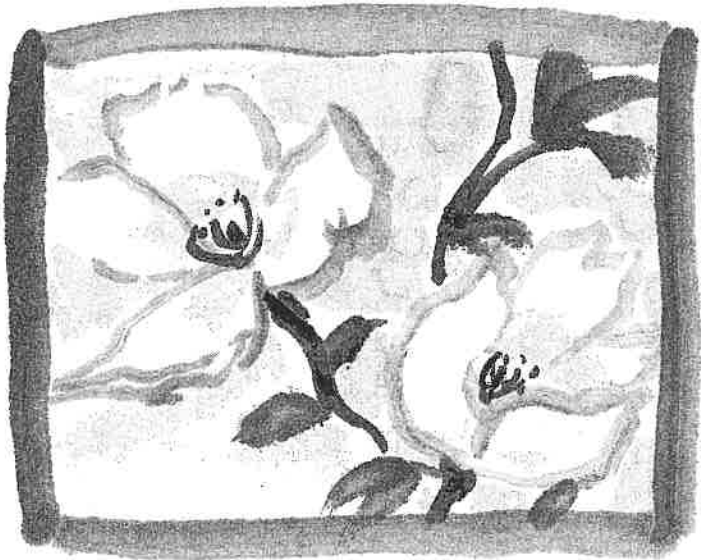
薄幸の女性のために、本当に幸せになることのできる心の支えを与えていただきたい」

このお言葉が、心にしみ込んだのでしよう、男尊女卑の風潮はなほだしい当時、瑩山禪師は思い切つてこの悪い慣習を打ち破り、『女人救済』の願をお立てになつたのです。

○ 女性の心を尊重

母・懐観大姉が亡くなつた翌年、瑩山禪師五十二歳の年の八月六日、前にも述べた、永光寺開基・滋野信直夫人が永光寺にきて、出家得度したいと禪師に求められました。禪師は一時は躊躇しましたが、夫人の決意の固いことを知り、また、

「昔、永平高祖が中国から戻つてきて、京都の建仁寺にいらつしやつたとき、私の祖母・明智優婆夷^{うぱい}を得度してくださつたことがあります。私はゆうべ、このことを夢にみて、なつかしい



思いでいっぱいになりました。そんな翌日にこうしてあなたが出家を求めていらした。もしかしたら、あなたは祖母の再来かもしれませんね」

といわれ、得度式を挙げられ、尼となった夫人を「黙譜祖忍」と名づけられました。

それから三年後、禪師五十五歳の年の六月十八日には、洞谷山下の勝蓮峰に「円通院」を建立し、これを祖忍尼に与えて、修練の地とされましたが、このときの様子を『洞谷記』に沿ってお話しましょう。

禪師は祖母・明智優婆夷と、悲母・懷観大姉の遺徳を慕って、ゆかりの十一面観音を円通院のご本尊としておまつりしました。あわせて禪師の頭髮とへその緒を白蠟の筒に収めたものを観音像の台座に入れて。そして、黙譜祖忍を寺の住職としました。禪師は、この円通院をお守りするため、母君の終生の念願だった女人済度の誓願の成就を祈る寺とされたのです。

祖母のために円通院を建て、開基・黙譜祖忍尼の道場とし、また、母のために宗門最初の尼寺「宝応寺」を建てて、明照尼を最初の房主と定め、その後継者は尼僧の中から選ぶようにいわれました。出家することもなかなか許されなかつた当時の女性にとっては、すばらしい心の支えができたことでしよう。

これらは道元禪師の男女平等、女性尊重思想の実現であるといわねばなりません。

「ひたすらに かける願いは あらたかや

玉の台に 紫の雲

南無常済大師 南無常済大師

この、『太祖常済大師御和讃』にも表れているように、瑩山禪師の、ひたすらな、ただ一筋の誓願は、あらたかな靈験となって、今日の大宗門を形成するにいたったのです。

日本國北陸道能登

掃比庄諸岳觀音堂者

行基菩薩建立也當庄最功

伽藍而 觀世音菩薩

靈驗無雙道場也草創年舊

緣記紛久然而右老相傳云

行基建立 浮屠語傳行基拜

立伽藍必雀不巢比堂自古雀

不巢誠知行基建立靈場耳

於是予又不求受當寺請而

與行禪法干時元亨元年

四月廿三日晚天在國國酒井洞谷而

感瑞夢當寺本為教院改欲為

車記

自王后將相悉皆屏之祈請

產生平安當庄姬婦可祈之

靈驗必可揭焉矣為後鑑

記之諸人同心合力立當寺

山門仰國通 冥應至禱至禱

如受難記尚以猶務同十六日赤原重告云
昨夜四壁同桂山神光臨當庄六月

元亨元年六月
與性又山門行門是山門為因通禱也

十七日託禱而披露

諸岳山松持寺中興沙門

釋迦牟尼佛立十四世佛法

瑩山 紹瑾記

瑩山 紹瑾記

瑩山禪師真筆・總持寺中興緣記

大本山総持寺・二祖峨山紹碩禪師が書かれた『総持寺開闢縁起』には、

「総持寺は観音大士の霊場として、その大士の靈驗あらたかなること、たとえるにものなし。ひとたび大士に祈願するところあれば、難産も立ちどころに除き、死児の命もただちによみがえるべし殊に霊場の当主・瑩山禪師は、釈尊五十四世の法孫にして、よく仏家の正法をつぎ、声誉はなはだ高し、さきに奏対するところの十種の法語は誠に得難き演法なり。この希有の霊場、この大禪師の居住所は挙げて皇運無窮の祈願所となると。日本曹洞宗第一の道場というべし。」

とあり、総持寺が仏の偉大なるお力の著しい道場であることが述べられています。私どもが、自分の利益になることだけを考えるのではなく、まごころを持って祈願すれば、その祈りは

伝わり、ただちに聞きとどけていただけるとう、ありがたい大本山なのです。

現在、総持寺は、横浜の鶴見に所在地が移りましたが、鶴見の本山からは、西の方に富士の霊峰を仰ぎ見ることができ、前には大いなる太平洋を見下ろすことができ、鶴見ヶ丘には、五十余棟の堂塔伽藍が建ちならび、まさに「玉の台に紫の雲」そのまま、瑩山禪師の偉大な誓願力の結実に目をみはるのであります。



大本山総持寺祖院の伽藍

横浜善光寺留学
僧育英会理事

東 隆 眞

曹洞宗 大本山・諸嶽山総持寺（神奈川県横浜

市鶴見区鶴見二一一一）の旧址には、その門

頭に「大本山総持寺祖院」とした大石柱（新

潟県産赤御影石。岩本勝俊禅師筆。昭和四六年

造建）が立てられている（石川県鳳至郡門前町）。

いまからおよそ六七二年まえの元亨元年（一

三二二）五月のなかば、のちに曹洞宗の太祖と

仰がれる瑩山禅師は、密教系の教院、諸岳観音

堂を住持・定賢権律師から譲与された。諸岳観

音堂は諸岳比古神社（羽咋郡の二所宮にある）

の別当であったといい、そもそものは奈良時代、

行基菩薩の創建にかかわる古刹と伝えられる。

この諸岳観音堂がすなわち諸嶽山総持寺の前身

である。瑩山禅師は、この教院を革めて禅院と

なし、みずから開山第一祖となった。

爾来およそ六〇〇有余年、諸嶽山総持寺は、

日本曹洞宗教団発展の拠点として大いに盛えた

のであるが、明治三十一年（一八九八）四月一三

日の夜、不慮の火災によって一山の諸堂宇の大

半を失い、明治四四年（一九一一）一月、新

天地を現在の横浜鶴見が丘に求めて移転したの

であった。その後、能登門前の旧址も見事に復

興して、前述のごとく「大本山総持寺祖院」とよんで、近年は、その面目をいよいよ發揮している。監院丹羽徹象老師は、前監院故鷲見透玄老師の後をうけて平成四年六月一日に就任されたが、さきごろ横浜善光寺留学僧育英会の顧問にも就任された。八〇有余歳のご高齢であるが、若い雲水僧たちと起居をともにして太祖大師の祖廟に奉仕されている。まことに近来まれにみる高德の老師である。

ここで、簡単に、祖院の主な伽藍の要点についてご紹介してみよう。

祖院の主な伽藍といえば、山門、仏殿、法堂、庫院、浴室、僧堂、東司のいわゆる七堂伽藍を指すのはいうまでもないが、このほかに、伝燈院、慈雲閣、そして三松閣、経蔵、鐘樓、放光堂、待鳳館、紫雲台などがあげられよう。

このうち、慈雲閣、大祖堂、伝燈院、山門、経蔵をとりあげてみたい。

慈雲閣は、大祖堂の左側の奥まった高台にある。諸岳観音堂がこの堂で、火災をまぬがれた祖院最古の建造物という。本尊は行基菩薩の作という僧形の観世音菩薩。総持寺の伽藍の原点がここである。

大祖堂は法堂のこと。太祖堂と書いてある本があるが、太祖堂ではない、大祖堂である。一般の寺院の本堂にあたる。

内陣の正面には瑩山禪師をおまつりする。左右に高祖道元禪師と二祖峨山韶領禪師および五院開基をおまつりする。また、堂内の左側には、本山守護三宝大荒神と定賢権律師をおまつりする。よそのお寺では例のない様式である。

総けやき造り。三二・七三メートル四方の入母屋造り。明治四三年（一九一〇）九月再建。正面の欄間にかかげられている樺材の透彫り一四枚は、瑩山禪師の一代記をあらわしたものの。

伝燈院は、開祖瑩山禪師の靈廟である。元祿

六年（一六九三）の再建。横浜鶴見の総持寺にも伝燈院がある。能登の永光寺にも伝燈院がある。すなわち開山堂のことである。

山門は、昭和七年（一九三二）九月に再建。

山門の楼上には僧形の地藏菩薩と観音菩薩（この二菩薩を放光菩薩とよぶ）をはじめ一六羅漢、五〇〇羅漢がおまつりしてある。楼上の正面の大扁額（およそ壹一枚分の大きさ）「諸嶽山」の大字は加賀前田利為の筆跡である。

総けやき造り。瓦葺き。楼門二階建て。間口およそ二〇メートル、奥行きおよそ一四・四メートル、高さ一七、四〇メートルという豪壮華麗な大山門である。この大山門が再建された原動力には、山崎心英という尼僧の辛苦が加わっているのである。

経蔵は、一切経を納める八角宝形づくりの輪蔵で回転するようになっていた。寛保三年（一七四三）、加賀前田家六代藩主吉徳の寄進。石川

県重要文化財指定。屋根の勾配が実に美しい曲線をえがいている。

なお、境内に、芳春院というお寺がある。加賀前田利家の奥方（法号・芳春院殿花顔宗富大禅定尼）の院号をとった前田家ゆかりの寺である。私は、現任職飯田徹宗老師（祖院副監院）には御高誼をいただいている。先代の渡辺頼応は、私の受業師、法幢師であったので、学生時代は、毎年、芳春院へ帰省した。かつて名布教師とうたわれた石田義道老師が芳春院の後任として、かの沢木興道老師を指名した。だから、世間では、沢木老師は、「宿なし興道」とよばれているが、必ずしもそういうわけではないのである。このことを知る人はまれであらう。

（駒沢女子大学副学長。文博）

主要参考文献 井上清司、桜井秀雄『総持寺』曹洞宗宗務庁） 佃和雄『能登 総持寺』（北国出版社）ほか

仏縁にもよおされて

マレーシア・タイ



▲リングム夫妻と黒田方丈

▼左から坂井氏、リングム氏、佐藤老師、黒田方丈



KURODA BUNKO の木札▶
を取付ける黒田方丈



▼ SATO TANK の木札を
打ち込む佐藤老師



▶ 記念植樹する黒田方丈



◀ 屋外坐禅場





▲ワット・パクナムにて
左からご住職、黒田方丈、
佐藤老師



▲ワット・パクナム副住職

▼シャングリラホテルにて





◀ 右から福田氏、佐藤老師、黒田方丈

▲ 右から落合師、黒田方丈、佐藤老師、キッティ・ワンソン師

仏縁にもよおされて

善光寺留学僧育英会
常任理事 佐藤俊明

仏縁

方丈さんがまだ若かりし頃、大本山総持寺で修行中、参禅指導を担当している時、一人の中年紳士が何回か臘八攝心や夏季攝心に参加していた。立川市在住の坂井司氏である。

この仏縁が三十五年後の今日、私たち二人をマレーシア訪問に導くことになったのである。

坂井氏ははじめ武蔵野の般若道場とか博多の聖福寺の門を叩き、臨濟禪に参じたのだが、機縁が熟さなかったため、曹洞禪に鞍替えし、よ

き師井上義衍老師に出会い、十年余その膝下で参禅弁道にはげんだ老練の居士である。

ニューヨーク港湾局在日貿易代表としての役職にあった坂井氏は、視野のひろい、そして海外に多くの知己を持つ国際人である。三年前に退職して自由の身になった坂井氏は、スリランカに工場を建てようとしている友人の協力要請に応じ、たびたびスリランカを訪れ、その途次マレーシアを通過したのであるが、坂井氏にとってこの国は、戦時中ビルマへの転属の際三カ月滞在了た想い出の地で特に愛着を持ってい

た。たまたまスリランカの比丘に紹介され、マレーシア仏教団体を訪れている中に、クアラルンプール郊外に仏教信者を対象とした瞑想センターを開いているリンガム氏に出会った。話し合ってみると、彼の並々ならぬ禅への関心と瞑想センターをひろく活用したいという熱烈な願望を知り、孤軍奮闘しているその姿に感動し、

これはなんとか本腰をいれて協力してあげなくてはという気になり、リンガム氏また予期せぬ素晴らしい協力者の出現に無上の喜びを感じ、二人ともどもに相携えて禅風の挙場に精進しようということになった。そこで坂井氏は道場の一角に八畳間ほどの居室をつくり、日本とマレーシアの間を往還している。

まことに奇特な浄業を続ける坂井氏の、同行リンガム氏をひろく世に紹介してほしい、出来得れば留学僧も送ってほしいとの要請にもとづいて、今回の旅行が実現した次第。なお、留学

希望者については、リンガム氏は国際的視野に立っての活動を考えている禅宗僧侶で、英語の上達を望む人であればよろこんで迎え入れ、英語の指導にあたりたいという。リンガム氏にとって英語はほとんど母国語といえる。もち論センター滞在は食費を含めて無料とのこと。

リンガムさん

四月五日出発。成田空港第二ターミナルもマレーシア航空も私にとってはともに初利用の旅である。成田空港第二ターミナルはフランス人の設計になるものとか、まことに感じのいい建物で、チェックイン・カウンターと搭乗待合室の間をシャトルで結んでいる広々としたもの。ちよつと日本離れた感じがするが、飛行機に乗ってから、滑走路までジャンボ機の巨体を十分間も移動させるのだから燃料の消費も相当なものだろうと、余計なことながら考えさせられる。

さて、マレーシアの首都クアラルンプールはバンコクとほぼ同じ経度なので時差は二時間と
思っていたら実は一時間だけ、これまた不思議
なものの一つ。飛行時間は直行便で七時間二十
分なので、現地時間午後四時五十分、スバン国
際空港に到着した。クアラルンプールの中心か
ら西へ二二キロの地点にある空港である。

空港には坂井氏とリンガム氏夫妻が迎えて
くれた。リンガム氏はよほど写真が好きと見え
て、私どもの姿をとらえてはさかんにシャツタ
ーを切っている。そのカメラ、聞けば三十年前
に買ったものとかで、今日の日本ではお目にか
かることのできないオールド・カメラであるが、
それ以上に驚いたのは氏の愛車ボルボである。
日本ではポンコツとして誰一人かえたりみない
であろうほどの痛々しい古物である。私は『正
法眼蔵随聞記』の「学道の人は尤も貧なるべし」
という言葉を思い出し、リンガム氏が真実弃道

クアラルンプール市内



の士であることを感じ取った。

ホテルに着いて、坂井氏の通訳を介して、リシガム氏の心の遍歴を垣間見ることができた。

彼はインド系マレーシア人で、熱心なヒンドゥー教徒の家に生まれ、その感化を受けて子供のころはよくヒンドゥー教寺院をお参りする熱心な信者だった。それがカソリック系の中学校に入るに及んで、十五歳のころからカソリック教への熱烈な傾斜がはじまり、ほとんど毎日のように礼拝堂に通い、教会へは毎日曜欠かさずお参りし、手にはロザリオ（数珠）を持って常に祈りの言葉を口ずさんでいた。しかし卒業後は自分独りの信仰生活に沈潜するようになり、グループ活動との接触は次第に薄らいでいった。

一九五六年（マレーシア独立前）彼は英国政府からの奨学資金を得て渡英留学し、帰国後マ

レーシア政府に奉職した。この頃は特に宗教団体に加わらず、スポーツや社交関係に忙しく、結婚したのもこの時期である。（二一女をもうけ、彼女らはいずれも医師となって成長している。）

この時期、彼リシガム氏は経済的にも豊かだったが、社会の醜い競争や人間の飽くなき食欲さを見せつけられ、人生の歓びを失ない、深刻に悩むようになったが、彼の信ずる宗教は何等救いの手助けとはならなかった。

一九六六年、彼はさらに勉学を続けるため渡英留学した。ここで彼の宗教に対する関心が再燃した。そしてクアラルンプールに帰ってくる時、たまたま瞑想修行を続けている若い大学講師にめぐり会い、その影響で仏教関係の著作物をひろく漁ることになった。そしてクアラルンプールにおける上座部仏教の最大の寺院の住職とも知り会い、この人を手助けすることになり、世界各地へ送られるテープの作成、テキスト編

集への助力、ラジオ、マレーシアの仏教讃歌合唱プログラムの作成などに従事し、自らも日曜集会での法話、大学や他の寺院での法話もおこなうようになった。また仏教徒の特別修養会やセミナーなどに参加し、先輩僧侶に道をたずねたが、彼の真実探求の心を満たしてくれるものに出会うことがなかった。そこで彼は寺を去り、ヒンドウの先生のもとでヨガの修行をはじめ、またヒンドウ系のいろんな団体に加わり、勤務時間後それらの宗教団体のところで時間を過ごした。一九八一年にはマレーシアのギータ・ア・シユラム（ヒンドウ教典ギータの研究団体）の機関誌『神聖なる心に』に「ヨガを称えて」の一文を発表し、翌年の第六回国際ギータ会議では「心の再生と平和」についての論文を発表している。これと相前後して、国際精神学協会会長の要請によりヨガ教室をはじめた。そしてヒンドウ教やガンジーの教えを真

剣に学んだが、いずれも彼の心を満足させるものではなかった。

そこで彼はすべてを断念し、禅こそわが進む道と心にいいきかせ、独自の道を歩む決意をし、坐禅修行を実践し得る場所の探索を開始した。そして三年の後、さいわいにもバトウアランに恰好の場所を見つけた。

彼は全財産を投げ出し、ジャングルを切り開き、整地をおこない、修行道場の建築に取り組んだ。そしてその道場を「メタ・ビラ」(Metta villa)と命名した。Mettaはパーリ語で「友愛の心」、villaは英語で「別荘」の意。

「メタ・ビラ」が建造されると、多くの友人や僧侶など、メタ・ビラを利用する人々の来訪がはじまった。現在は在家の仏教信者団体の月例集会にも利用されている。しかしまだ施設の利用は充分とはいえない。リンガム氏は中国系マレーシア人、さらに意欲的にインド系マレー

シア人に対し、禪の紹介をもくろんでいる。それは彼の真理探究の過去の心の遍歴の結果、やむにやまれぬ誓願である。

彼はいまマレーシアの人びとに坐禪を紹介しようとして懸命の努力を捧げている。

メタ・ビラ

クアラルンプールは「ガーデン・シテイ」とも呼ばれているという。なるほど、熱帯樹のこもり繁った、街全体が公園のような緑豊かな街である。これはこの国の豊かさのシンボルでもある。道路もよく整備され、四通八達している。郊外に出ると道路の両側は見事な椰子の植林で、かつてのゴム林を椰子林に切り替えたものだという。造成ゴムの生産可能な今日、天然ゴムの採集は手数がかかり収益が少ないのにくらべ、椰子は捨てる物がないといわれるほど生産性が高く、ゴムから椰子への切り替えが出来る

クアラルンプール市内



なかつたスリランカにくらべるとその差は一目瞭然だといわれる。

椰子の林を通り抜けて西北にクルマを走らせると約三十キロしてバトゥアラン (BATU ARANG) という町に着く。最近町に昇格したばかりという小さな町である。この町の小高い丘の上に木立に囲まれた一角に建っているのが



「メタ・ビラ」建物入口

「メタ・ビラ」である。訪問者がなければクルマの音ひとつしない閑静なところである。

建物は約四十坪ぐらいで、坐禅ホールの三方を、応接室、図書室、三つの居室、炊事場、二つのシャワー兼用トイレ、それに「東京コーナー」と称する坂井氏の居室が取り囲み、南面が全部窓になっている。敷地は約一千坪で、来訪の宿泊施設、四畳半ぐらいの「クテイ」と呼ばれる小さな建物が二棟、それに屋外坐禅場、語り合いの広場などがある。みんな手造りである。よくもここまで頑張ったものだと感心する。

「文庫と水道タンクを作りたいので少々ご援助願いたい」ということで、黒田理事長も快諾した。リンガム氏は早速「KURODA BUNKO」、「SATO TANK」と書いた木札を準備して来たので、私たちはそれぞれの設置場所にその木札を打ちつけてきた。また、大きな木になって大きな実がなるといふジャックフルーツを二人



坐禅ホール内部

記念植樹



別々のところに記念植樹して来た。

リンガム氏は、「妻もこのごろはよく坐禅します。娘たちも私の生き方を理解して禅に関心を示しています」と言うが、生活の資をして社会的地位のシンボルである役職を捨て、来年からは完全に無収入生活にはいるという。ここまで来るには母娘の大きな抵抗があったに違いない。しかし二人の娘もいまや医師として一人立ちしており、今後は心おきなくこの道に精進できることであろう。

昼食近くになると、二人のメンバーがやって来た。一人は町の医師、いま一人は工場経営者だった。私どものお昼の会食に招いたものだった。

この機会に何か質問ないか、という坂井氏の誘導によりいろんな質問が出て、それなりに答えたのだが、その答えがたいへんわかりやすい

ということ、このことが翌日のクアラランプールでの別のグループとの会食の時も出て、わかりやすいテキストを作ってほしい。こちらで英訳するからということになった。

マレーシアは回教国なので酒は飲まない。三日間滞在の間、現地の人と二度会食したがいずれも酒、ビールは出なかった。この話は酒の上と実現するである



緑陰で歓談

うし、そうなればこれは大きな成果となるであ
ろう。

再 会

四月八日、マレーシアに別れを告げて、十二
時四十五分スバン空港を離陸、バンコクに向か
う。一時間の時差があるので、一時間四十五分
間飛んで午後一時半ドン・ムアン空港に着陸す
る。

留学僧の落合師と、日本留学を希望している
プラ・シャーンシャイ・キッティワンソンの二
人が出迎えてくれた。東京に帰る搭乗日時の変
更手続で意外に時間を費し、ホテルに着いたの
は午後五時頃だったが小谷亀太郎氏は根気よく
長い時間待っておってくださった。早速所要の
連絡をしてワット・パクナムに向かう。

二月の理事会で、

大韓仏教曹溪宗靈鷲叢林通度寺方丈

落合師(左)とプラ・シャーンシャイ・キッティワンソン師



尹月下 禪師

スリランカ大菩提會會長

ヒデイガレー・パナテッサ大僧正

タイ国ワット・パクナム住職

プラタムパンヤーボデー大僧正

のお三方を名譽顧問に推戴した。その決定に基き、去る二月、理事長は韓国に出向いて尹月下禪師に辞令を手交し、三月には来日されたスリランカのヒデイガレー・パナテッサ大僧正に辞令を渡したので、今回辞令を持参してタイに立寄った次第である。

プラタムパンヤーボデー大僧正はことのほかよるこび、今後の協力を約してくれた。

ついで病気の静養中の副住職の河北邦雄師、プラ・パワナ・コーソントンテラ老師を見舞って帰った。

翌九日、落合師とキッテイ・ワンソン師の兩名がホテルに来訪。同師の日本留学希望につい

て意見交換、引続いて福田千城氏と会う。

福田氏は今から二十七年前、まだ上智大学の学生だった頃、伊達木氏（現神奈川新聞社論説委員）と二人連れで、春休みを利用して貨物船に乗ってバンコクに着いた。上陸してみると、待つてはるはずの友人の姿が見えない。埠頭に立ってても仕方がないのでバスに乗ることにした。別に行くあてもない旅なので、一番遠くまで行くバスにしよう、乗ったバスがトンブリ行きだった。降りたところがワット・パクナムの近くで、おばあさんが何やら話かけてくれる。『ついて来い』日本人がいる』といつてもらしいことがおぼろげにわかったのでそのおばあさんについて行くと、そこがワット・パクナムで、日本の坊さんが四人いた。その中に佐々木さんと黒田さん、それに石附さんと佐々井さんがいた。（注 佐々井秀嶺氏はインドに帰化し、イン

ド仏教徒の指導者として活躍している。」

「何しに来た」「別にあてがない」「じゃ、寺に泊まれ。タダで済むからそうしろ」ということになり、二人ともサマネンというお小僧さんになって毎朝托鉢の同伴をした。

朝は五時に起こされるし、遊びには出れないし、逃げ出そうと思っていたら黒田さんが、ワット・リヤブという寺に日本人納骨堂がある。その掃除をするからいつしよに来いという。

嫌々ながら行ってみると、日本人物故者の過去帳やお位牌がある。それを掃除せというので、仕方なしに掃除をしていると唐行きさんの位牌がいくつもある。身体を張って異国で頑張ったのかと思うと胸を締めつけられるような気になったことを今でもはっきり覚えてる。これが黒田さんとの出会いで、二週間ほどして別れ、その後マレーシア、シンガポールをまわって日本に帰り、卒業後、佐々木さんに「海外で働き

たいが、どこか使ってくれる会社はないか」と手紙を出したが、折返し、「ない」という返事が来た。仕方なく国内にとどまることにして日通の入社試験を受けて合格した。そこでそのことを佐々木さんに報告したら、佐々木さんは小谷さんにそのことを話してくれた。すると小谷さんは「日通をやめても来る気があるなら使ってみよう」というので、日通入社一日にして退職、バンコクに来たのだという。

バンコクに来て二、三職種を変えたが十年前から外食産業をはじめ、精進努力の甲斐あって福田氏はいま二十の店舗を擁する「大同門レストラン」を経営している。私たちはシーロム街という日本でいえば銀座通りに相当する一等地、センドラル・デパートの地下一階にある第十八号店に招かれた。

大同門レストランの売上げは目下のところ業界第三位とのことだが、ここ二、三年の間に五



福田氏の事務所にて

十店舗オープン、そして株式上場を目指しており、上場までは業界第三位の実績を確保したいと意気込んでいる。

事務所と各店舗がオンラインで結ばれており、コンピュータ化は業界トップの座にあるとこのことで、上場の暁にはバンコクからパタヤ、チェンマイ、南タイへの主要道路に多目的なロード・サービスの店舗開設を目論み、夢をふくらませている。たのもしい限りである。

縁とはまことに不思議なものである。ホンのわずかに二週間、ワット・パクナムで出会った二人が、二十七年後の今日、片や世界中に留学僧を送る異色の寺院住職となってワット・パクナムを訪れ、片やバンコク屈指のレストラン経営者となって思い出の地に相会するとは。

思えば今回のクアラルンプールとバンコク訪問は二十年三十年も前の仏縁にもよおされたもので、仏縁の大切さを教えられる旅だった。

東郷 敏

出逢い（その一）

○からの出発

成寿春季号（二十卷）にて、波乱万丈に富んだ大圓和尚さまの、『明日に生きる』を楽しく、とても、おもしろく壮快感さえ感じながら、一気に読ませていただきました。昭和四十年、△○からの出発▽成寿山善光寺開創のころに、おもいを馳せ、当時青春真直中の先生が、既に、時を変え、処を変えては、遠大な将来の夢を高らかに、お話ししておいでございました。人並みでない新しい思想と、新しい時代の、新しい布教の在り方に着目して、新しい寺を興したい、必ずや、寺をおこすんだと、発願利生（註）、いかにも、城でも築く意気であり、活力に充ちた、その頃の黒田武志先生を、想い出しております。若武者二十

発願利生（修證義第四章）
佛心を発し、佛心に生き、佛心の光明

と慈悲とに生きるこ
と。世の為人の為に(ま
ず自分ではなく、まず
人に)よかれと念願す
ることが菩提心(佛
心)。一旦、決心し、計
画し、誓い、約束した
以上は、それを全うす
る。

六歳の、輝ける青年僧であります。
それ迄、私は、先生の生い立ちや、
生れ育った環境を全く知る由もな
く、何を言うておいでなのか、寺
というものは、古く、代々と続い
てこそ△名刹▽の所以であり、い
まどき新しい寺をつくるなど、考
えも及びませんでした。

先生は、いつでも一方的にご自
分のお考えを吐露されるのであり
ます。曰く、私はここに百年の計
を建てたい。一宗一派にとらわれ
ず、ただあと始末だけするような
寺はいらない(単に葬式や法事な
ど)。これからは、世界に広く人を
求め、これからの青年達に未来を
託せる様な、人材育成の場をつく
りたい。そして自分の手であらゆ



1965年総持寺にて

る分野の、あらゆる人たちにチャンスを与え、世界の舞台に送り出し、世界観のある人を育てたい。そして、普く人心の救済をしたいなど、承りますれば、なるほど御説ご尤も、事あるごとにですから、私にしてみれば「一体、寺とは何ぞや」、とても凡人の私に考えられるようなことではなかった。当時あまりに遠大な構想に、唯々戸惑うばかりでございました。

なにせその頃から、地球規模のお話でありますから、ハアハアと笑いながら聞くより術がなかったのです。この先生、話しているうちに、どんな夢がふくらんでゆくよううで、何時間話しても、おさまらなくなってしまう。私は先生を見ていて、どうしてこんなに、単純明快でわかりやすいご性格なのか、なのはどうして思うことを、思うようにつくり上げてゆかれるのか、不思議で仕方がない。また、人の何十倍も気性が激しく、まるで野武士みたいに見えるのに、二人で相對しているとき、いつの間にか仙人みたいに枯れて見えてくるから不思議だ。ほんとうに若いのか、年寄りなのか、つかみどころがない。いいかえれば真実ありのままの御方なのかもしれない。いつでも無私の姿勢が貫かれており、全く私心私欲の無いところが、人をひきつける、大きな根源ではなからうかなどと、思ったりもする。それでいて、先生はいつでも、何に對しても真剣だから、お話ししていて、気が抜けそうで気が抜けず、私は困りました。こうして翻って、いま善光寺の足跡を觀れば一目瞭然、三十年前に、先生

が謂いつづけ、念じ続けておいでだったことが、いつの間にか、その通り、違えず、確実に、実行、実現しておいでなのでありますから、先生にしてみれば、何の不思議もなく、あたり前のことなかもしれません。先生は唯、天に課せられたご自分の道を約束通り、歩いておいでになったのかもしれない。しかも、人が歩いた道ではない、いつでも他人のマネをせず、創造的に、夢と理想に燃えて、ご自分の力で歩いて行かれる、そんな先生を観ていると、チャンスというものは、準備していた心に幸いしている様に思えてくる。そして今日もまた、限りなく△可能性への挑戦▽をしておいでなのである。この△可能性▽というものは、可能にするための努力を一生懸命しているもののみ与えられる特権なのかもしれない。いよいよ以て笑いごとではなかったようです。

無一文の私

善光寺育英会海外派遣留学僧も、すでに五十名を超えようとしている。これらの方々が、世界各地に学び活躍なさっている偉業は、一介の寺の成せる業ではない。しかも国籍、民族、性別、職業、宗派を問わずであるから、先生の大無辺の思想と御人格が伺われてならない。

(生を明らめ、死を明らかにするは) 佛家一大事の因縁(修證義第一章)

道元禪師の謂われる、まこと『佛家一大事の因縁』(註)か、先生は立派なご両親と立派な御兄弟に抱かれながら、いわゆる△清貧の思想▽ではありません

真実に生き、価値ある人生として生きる。死すべく生まれてくる人間の一生。こんなことを教わる環境を得る因縁（内因外縁）。

疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げて之を枕とす（樂しみ其の中に在り）（述而第七一五）粗末なものを食べ、水を飲み、肱を曲げて枕がわりとするような、極めて貧しい境遇の中にあつて、道を志す楽しみは、自ずからその中にある。

が、簡素で風雅な環境で成長され、或る時は仕方なく、又或る時は自ら求めて、苦勞に苦勞、修行に修行を積み重ね、その失敗だらけの青年期に、「羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦」と日本の津々浦々に一年有余も托鉢行脚し、論語の一説を借りるなら、『疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げて之を枕とし』（註）ながら、道に志し、又各本山での修行は幾多にも及ぶ、並をはるかに超えた修行中の御方。相對しているや、小さな会社の、あまりに小さな営業マン。日夜利潤追及に目をむき出して勤しんでいるわたくし。水と油、世界の異う先生との方向を簡単に共有するなど、難しいことではありません。

さて、少しづつ実現への道は開かれていたのでございましょうか、先生は語気も弾んで「どうするか、どうしよう。何をするにも、ある程度先立つものがある。さてとなれば△無一文の私▽いつも、何時もどうしたらよいか、私は考えている」と申され、顔をジーツと見つめて、お話しをされるのでありますから実に、破戒力と説得力があります。

「東郷さん、私の願いは、宗派にとらわれてしまふ様な日本の、枝葉の仏教ではなく、真の仏教を学びとるところにある。だからとて、決して、枝葉を軽んずるといふことではない。就中、幹が尊く、大地に這う、根と幹がなければ枝葉の生命はない。従つて、限りなく△宗祖を通して 釈尊に還る▽ことが、私に課せられた使命なんです。

山に登らばすべからく頂に到れ、海に入らばすべからく底に到れ：(永平広録) 山に登るならば必ず頂上、海なら底。そうでないといふ深い浅い(宇宙の広さ)が分からない。

故きを温ねて新しきを知る(以て師となすべし)(為政第二―二―)古い事実をたずね究めて、そこから将来の新しい道を導き知ることが出来る。

述べて作らず、信じて古を好む(述而第七―一―) 古人の残したものに就いて考えを述べることはあつても、自分古道を固く信じ、深く古道を好んで、新しいものを作るものではない。

道元禪師はネエ、『山に登らばすべからく頂に到れ、海に入らばすべからく底に到れ、山に登り頂に到らざらんは、宇宙の寛宏を知らざらん、海に入りて底に到らざらんには、滄溟の浅深を知らざらん』(註)と教えてある。高さも、広さも、深さも、そこに行かねば、其処に立たねば、そこに坐らねばわからんのです。やがて、私はインドを訪ねます。そして、さらに、さらに、いろいろな国に、その佛跡を訪ね、お釈迦さまが、二千五百年前に、何を説かれたか、その歴史をも、この体で、肌で感じとつて、初めて仏教というものが、私に親しみ、私の血となり肉となつて、この真理を体現して、ようやく、釈尊の、仏教の真髓を、説く資格が私に得られると思つて居るのです。私の新しい創造は、論語の『故きを温ねて新しきを知る』(註)の道理に合致し、さらに『述べて作らず、信じて古を好む』(註)人間から発していると思つています』とおっしゃる。先生のお話しはいつでも、原典から説かれますから、難しいのです。特に私にはです。

新しい寺づくり

先生は、なお続けて、「私は決して、新規の説を作るなどということとは、毛頭考えている訳ではありません。ここところは、間違いがあつてはなりません。確認しておきますよ。やがて、求めているものをこの手でしっかりと掴み、私

の思うこと、考えていることを堅固にした上で、私の信念に基き、これを具体化するために、その拠点となる、新しい△寺づくり▽をやりたいのです。道元禪師ではありませんが、それこそ『自己の自己にてある、模索におよばず』の言に従うて、取り組みたいと思っています。そんな、こんな考えていると、私には、残された時間が、あまりにも微い。限られた私の人生の中で△何がやれるか▽たとえ一歩でも、少しでも、実現するためにはどうしても、急がねばならぬのですよ。わかってくれますか」

どうもこの先生は、話す相手を取り違えておいでのようで、私は応えられない相手ではない。頼れる相手でもない。しかしそれをよく承知の上で、自分を盡し、自分を推しておいでのになる。対応力の乏しい私は、いつも、台風の吹き過ぎるのを待つしかない。ああ、ようやく通り過ぎたな、と気を抜いてしまっている、やがて吹き戻しがある。いつの間にか、私は分かった様な顔をして、合槌を打ってしまったている。理解できない自分が恥かしいとも思うのか、自分を繕ってしまったている。これが誤解のもとであり、やがて段々と本気になって、深みに入りこんでしまいます。

この延長線上に、先立つ根源である先代社長があることを、言わず、語らず、認識し共有していることは、誰よりも、二人がよく承知しておりました。私は応える力と知恵はなくとも、先生のこの大志を、なんとか叶えてあげられる

方法はないものかと、思い詰めてしまつて、識らず、知らずのうちに、立場を超えて、共有できる様になつていたことを思い出します。しかし誰だつて、やりたくて出来ないのが、人間の常ではありません。また思う方向の逆に運ばれてしまうのも、どうしようもない人の常であります。どうもこの御方には、それがない。

先生は、初めから、ご自分の中にキツチリと整理されたものがあり、その用意と準備は、見事整つていたのでございましょう。どうして、あの若さで、あの夢が描けたのか。私には、全くわかりません。おそらく、生まれ育つた環境と、あらゆる難行苦行のご体験と、幅広い、素晴らしい人脈に起因すること確かな様でございます。

しかし所詮、夢だけで、お腹がいっぱいになるはずがございせん。そのころ、お会いするときまつて、異常な空腹感に襲われるのは、何だったのか。そしていつの間にか、私の先代（のち開基）や現社長を介して、先生との結び目は、大きくなり固くなり、いよいよ先生の話術と魔術と情熱と溢れる人間味に翻弄されて行くのであります。ここらあたりは、何とも適当なことばで表現しにくいのでありますが、言い知れぬ、先生の人間的魅力にとりつかれながら、時は大きく動いて行くことを観じないわけには参りませんでした。兎角一時もジーツと静止しない、くろだぶし衛星でありますから、電波は、とき、ところ

構わず、どんどん飛び込んでくる、知る人ぞ知る、在り方、御方であります。さて、話が前後してしまいました、少し始めに戻ります。

はじめての参禅

昭和三十九年の夏、会社の「幹部社員教育」ということで、横浜・総持寺の夏季撰心会に、先代社長（のち開基）に連れられ、七名程、参禅致しました。先代をはじめ、現社長共々、誰一人として、経験のない者ばかりでしたから、その時のことを思い出しますと、今でも身が震える思いが致します。ここらあたりは、黒田先生と、私どもの葛藤と闘いの、大事な部分と心得ますので、少し、くわしく述べさせていただきます。

私は自分で求めて入山したわけではありません。会社で置かれた立場上、給料のため、ボーナスのためにと仕方なく参禅している有様でございましたから、不遜とは思いますが、始めから、心を陶冶するとか、少しでも、自分を高めるとかいう気持はなく、参禅に期待するものは、出発する前から失せておりました。従って逃げ腰であり、何とか、うまく時間を過せば、それで充分と心得て、ただ坐るだけで、事足りると思っておりました。どんな処でも大概、逃げ場所がありうまく隠れる場所がある、そんな処を必ずや、発見できるものと安心して臨んだつもりでした。でもこの世界は、勝手が違い面食らってしまいました。

1964年 7月



過去、経験したことも想像したことも全くない、異様な世界であることを知るまでに、ほんの僅かでした。やがて骨の髄まで思い知らされてしまいました。私が発見した、逃げて、隠れる場所は、何処も精鋭の闇魔さまがいっぱい駐屯しており、私はすっかり観念してしまいました。会社にとっても、当時、幹部社員が、七名も留守することは、経営上危険をとまなう大冒険。この年、会社も創業三十周年を迎え働き盛りでした。折しも戦後が終り、日本中が、東京オリンピック開催景気で、沸き返っており、国鉄自慢の東海道新幹線開業、さらに名神高速道路開通も、この年であり、日本が時間的に急に縮まって、何か大きな時代の流れと、経済成長も国際間競争力を増しながら、著しい変革をもたらしておりました。会社も変わらず、時代の波に乗り、経営環境も、にわかには明るく、大幅な増収増益と目を見張るものがあつたようです。それだけに、また、社員も急増し大事な社員教育が追いつかず、そのころ一夜仕立ての一人代表社員が闊歩し始めたことも、先代社長にとっては悩みでもあり、会社が飛躍する喜びよりも、むしろ社

員教育が、おろそかになる事を憂慮していることはよく承知しておりました。それだけに、先代社長は社内では、勿論のこと、どうしたら、幹部社員、管理者を、厳しくできるか、あちこちに教育の場を探し、此処もその一つであったようです。

この撰心会に期するところも、少なからずあることを、私も慮って、しっかりと取組まねば天罰があたると、やゝ反省しながら、いよいよ坐ることになりました。しかし、慣れた御方は何でもない事と思いますが、私は人一倍躰が固く、思うように坐れない。ただ坐るだけなのに、それができない。生半跏趺坐だと言われた。それでさえも、覚束無いのでありますから、五日間を過すということは、先代を慮つたにしても地獄の底でした。

それでも一日一日と坐り続けるわけですが、求められる、感謝報恩の気持ちどころではありません。坐が進むごとに、誓いとは程遠く、不平不満愚痴の蟠る姿勢でありますから、さぞ御指導の雲水方も、私に憐れみを、観じられたことでございましょう。精も根もつきるころ、私共を引率した先代も、率先垂範せねばならぬたてまえ、引くに引けず、随分参っておいででした。とき六十五歳の先代社長でした。

先代も、辛さを共有され、痛いなあ、ガンバレやア、わしも痛いが頂上が見えたぞ、がんばろう、と、今にも頼りない私共が、この寺を飛び出しかねない

様子を見て取った、先代精一杯の声援とへおもいやり✓だったのでございませう。

葛藤と闘い

さて、私は入山以来、参禅中どうにも許せない、一人の雲水を、ハッキリ、見届けておりました。私共は、捕われの身。如何せん、この場では、手も足も口も出せないダルマさん。数ある雲水の中で、飛び抜けて、厳しく、少しの油断も許さず、見逃さず、続けざまの指導と警策はズッシリと、食い込んでくる始末。身を削り、骨を砕く様な入れ方と、堂を真一つに割る様な、大声で叫ぶ。「コラッたるんどる！」はまだいい方で、「貴さま死ぬエッ！」とくるから、思わず、躰が天井に吹きあがってしまう。この雲水、教えるのではなく、ドナリ散らすようなあり方に、私はいつの間にか見えない背後の敵と、相対しているような、変な気概が起っていることに気付きませんでした。何処に持っているいきようもない、苛立たしく、遣瀬無い気持ち、何やらこの雲水に一点集中してしまい、必ずや、仕返しをしてやらねばと終り近づくにつれて、あきらかに、この雲水と、戦闘状態に這入っておりました。これまで一度でも何らかの経験があれば一種の気合いと、思うたのでありましょうが、環境が環境だけに、この理性なき輩、血気盛んな年頃だけに、本気で闘っているのですから危い



(何を四悪と謂ふ。)教へずして殺す、之を虐と謂ふ(堯日第二十二) 人を教育せず罪を犯したからといって殺すのを虐、平素の戒めをせず俄かに出来るようになれば殺すというて出来ねば殺すのを暴、命令をゆるやかにして期限を嚴重にせめたてるのを賊、与えねばならぬものを出し渋る、いかにもケチを小役人根性、これを四悪と謂ふ。

参禅は身心脱落なり。身に所作なく、心に思量なし。(不思量にして現じ、不回想にして成ず)(洞谷記・瑩山禅師語録)

ものでございます。

参禅会での教え方は、一度限り、最大効率を狙って、実に簡単明瞭、しかし作法ルールの濃やかさ、メンタルなものの含めて非常に難しく、一度や二度でわかる様なものではありません。黙って坐れば、全て、解決というわけには参りません。孔子の『教へずして殺す、之を虐と謂ふ』(註)、多分、会社や職場でも同じような過ちをしているのでありましょう。つくづく反省させられました。雲水方も、きつと教えたつもり、わかっていくれるつもりであったことと思います。如何せん積極的に受け入れようとする私の△素直さ▽がないのでありますから、わかり易い佛教の教えを、わかりづらく、親しみにくくしてしまったこと、私自信に原因すること否めません。初めから、坐る動機、目的が明らかに間違っておりました。人に知られるための坐禅であり、自分の修養のための学問でなかったことが悔やまれます。従って坐っていても、形はあれど姿がない。姿はあれど心が無い。何とも情けないこと、恥かしいことこの上ありません。瑩山禅師は『参禅は身心脱落なり。身に所作なく、心に思量なし』(註)と教えてくださいました。これまでの、心の迷いや、とらわれ束縛されている、自分を解放して身も心も、おだやかさを取り戻すことである。これを身心脱落という。しかもそこでは、もはや、右往左往した心も行動も表現もなく、小賢しい考えなど一切生じないものだ。と、喝破しておいでございま

す。私は、あべこべでありますから、どうにもなりません。後にも先にもこのような不心得を持ったことは、全くありません。

まことに往生際の悪い参禅者となってしまいました。お陰さまで、私の葛藤と闘いゆえに、いくらか痛みも分散し、ようやくどうにか打ち上げの太鼓を聞くことができました。その瞬間、大声上げてそこら中、走り回りたい訳わからぬ、感動を押さえることができませんでした。

のち、先代社長の述懐に「自分も三日目ぐらいまでは、死んだほうがよいと思うほど辛かった。四日目ごろへやれるVという自信がついた時は、うれし涙が止まらなかつた。これは一生忘れることはないと思う」(昭和39年・成寿ゆり11号)と書き残しておられます。「また社員が警策でたたかれる時は、自分がたたかれるよりは、十倍もつらかつた。また坐が終るごとに、元気で頑張っている顔を見ると、自分のこと以上にうれしかつた」と、残しております。私はこんな先代の御気持など知ろうとする、余裕が全くありませんでした。

先生との出会い

さて、闘い終って、解放され、間もなくお互いさま、ホツとした気持で、思いの感想を述べあっておりました。その時、異口同音やっぱり一人の雲水について、大なり、小なり、尋常でない感情が残っております。先代にこの

愛語、利行、同事（修
證義第四章）

之を愛しては、能く勞
せしむること勿らん
や。焉に忠ありては、
能く誨ふること勿らん
や（憲問第十四―七）
愛するならば、その人
の為に苦勞を厭わず出
来るだけのことをして
勉めないでいられよう
か。忠実であるならば、
そのことについて知ら
ない人に教えないでい
られようか。ただ可愛
がることだけが愛の本
質ではない。

ことを言いますと、全く、自分の耳を疑ってしまいました。この雲水について、正反対の見方と評価であり、状況は一変してしまいました。あの雲水こそ、わしが探し求めていた御方であり、あの御方のお陰で此処に参禅した甲斐があった。あの雲水こそ、まこと特別な御方である。この参禅中、わしはあの雲水の一挙手一投足、一言一句、見続けてきた。あの御方の教え方こそ、△愛語、利行、同事▽（註）ではないか。論語の中にも『之を愛しては、能く勞せしむること勿からんや。焉に忠ありては、能く誨ふること勿からんや』（註）とある。真に人に苦勞をさせることのできる人、これは愛の人である。もしも、人に間違いがあり、それを見て見ない振りをせず、直視して、直してあげ、正してあげられる、忠言をもつ人、これは△まこと▽の人である。また同じく『言を知らざれば、以て人を知ることなし』（註）とある。人の吐く言葉は、その人の心の表現であり、その人の全人格を現わしている。……お前は、それがわからんのかとでも言う様に、ジーツと私の目を見据えて、人を見抜くことのできないことに、とても悲しんでいる様子でした。

「なあ、心するがよい。人を叱る、人をたたく、人に厳しくできるは、並の心掛けと修行でできるものではない。人の為を思う（For others）と、こういふは、その人に余程な愛情と△おもいやり▽がなければできぬこと。あの御方にはそれができるのだ。偉いイツ！」この時、先代の目に光るものがあつた。今にも



こぼれ落ちそうな大粒であった。嗚呼！己
んぬるかな、此奴め、何の泪か知る由もあり
ません。「キミたちイ！ 何とも素晴らしい御方
ぞ！」

ただ、しばし沈黙でした。私は返す言葉が
ありません。冷たい水を、頭の上からザブー
ツと、ぶっかけられたような衝撃を受けてし
まいました。憎い憎い、悪い悪いと思うてい
た人が突然、大恩人に変ってしまふ。何とも、
悲しい心を持ってしまったもんだ。どうした
らよかろう。後悔が先になつ。あの時の反省
ほど私にとって複雑で難しいものはありませ
んでした。学ぶことの乏しかった自己中心の
哀れな姿、大恩人を極悪人と、取り違えてし
まったこの愚者。こんな気持で山を下りられ
たものではない。しかし、なぜか同時に、価
値ある五日間が蘇り、あたりがパーと開け
てきて、新しい自分に巡り会えたような気が

してならなかった。何とも言えぬ感動であった。

私はしゃくりながら、帰り支度をしていると、突然、ドドツと、私共の部屋に飛び込んできた一人の雲水。「ヤー皆様どうもどうもお疲れさまでございませした。みなさんヨク頑張られました。どうぞ気をつけてお帰りください。また、ドウゾ、どうぞ」ですから、耳にこびりついた、あの懐しい声であります。何とも、言いようのない、一時でした。

先ほどのショックが覚めやらぬ時、タイミングよく、よくも飛び込んでおいでになったもんだ、葛藤半ばにして、自分をコントロールできないまま——「先生ッ、△悟り▽とは何ですか！」「エッ」と発するなり矢庭にドツカとあぐらかいて、坊主頭を搔きながら、「悟りですかアー、アツハツハー、悟りですか。△悟り▽がわかれば、私は、此処にはおりませんヨ。よろしいですかアー」

こんな応えが方があっていいのでしょうか。呆氣にとられてしまいました。ほのぼのとした空気があたりを払い、ふあーっと聖者が駆け抜けたような心地、なんと素晴らしい響きなんだろう。底抜けに明るく、天真爛漫、何と温もり溢れる人間味。この新鮮な感動に、躰が震えてしまいました。

この雲水、先代が言われるように、素晴らしい輝きを放つ。一体この雲水のもつ、この美しさの根源は、何なんだろう。摂心も終り、雲水の皆さんも後始末に忙しかろうに、わざわざ山の頂上の奥の奥、私共の部屋まで上ってきて、労

佛種縁による 佛果を生ずる因種（菩薩の所行は縁による）

（子は温にして勵し、威あつて猛からず、恭しくして安し（述而第七—37）孔子の弟子が先生の態度風貌を言うたところ：

つてくださる、この雲水。『佛種縁による』（註）とはこのことか。実に頼りない返事ではあつたが、いかにも禅問答的である。沸騰するような共感を覚える。一緒なんだなアー、同じ所に立っておいでなんだ。のち読んだ論語の中にその時の雲水をダブラしてしまいました。『温おんにして厲はげし、威いあつて猛たけからず、恭しくして安し』（註）いかにも、おだやかではあるが、その中におのずから、引き締まったところがあり、自然に具った威厳はあるが、かといって威張おごつたところがない。またうやうやしく慎み深い窮屈きうくつな所が全くない、いかにもゆつくり、ゆつたりとしている：先ほど先代の言われた、一挙手一投足、一言一句を思い出す、見事な振る舞いである。ついさっきまで、チツトも変らない、私の目、耳なのに掌返してこんなにも見方、心変りできるものか。私は、すっかりこの雲水に一体感を観じてしまった。この雲水こそ、若き日の黒田先生であり、私共にとって生涯忘れ得ぬ、熱き出会いであつた。

株式会社ナリス化粧品勤務

第十回海外留学僧募集について

目的 佛教を修学するものうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、または海外より受入れ佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

派遣先 世界各地

派遣期間 一年間とするも場合により延長するも可

給費 派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員 2〜3名

提出書類

- (1) 論文
- (2) 保証人と連署した願書
- (3) 卒業証明書
- (4) 履歴書
- (5) 推薦書
- (6) 健康診断書

提出レポート

● 禅の国際化と私の役割

● 二一世紀の仏教と私の役割

● タイの仏教に学びたいこと

● 未来社会の仏教と私の役割

いずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五〜一〇枚

原稿切 平成五年十二月十日

横浜善光寺留学僧育英会事務局

くらしの中で読む『正法眼蔵』

——面授の巻—— その二

成興寺住職 小倉玄照

〈本文〉

この面授の道理は、釈迦牟尼仏しやくかむにぶつのあたり迦葉しやうがつの会下えいかにして面授し護持ごぢしきたれるがゆゑに、仏祖面なり。仏面より面授せざれば諸仏にあらざるなり。釈迦牟尼仏しやくかむにぶつのあたり迦葉尊者かしょうそ者をみるみること親付しんぷなり。阿難・羅睺羅らかうらといへども、迦葉の親付におよばず。諸大菩薩しよたいたくさつといへども、迦葉の親付におよばず。迦葉尊者の座に坐することえず。世尊と迦葉と、同坐し同衣しきたるを、一代の仏儀とせり。迦葉尊者したしく世尊の面授を面授せり。心授せり、身授せり、眼

授せり。釈迦牟尼仏を供養恭敬くきやうくわんけい、禮拜奉觀らいはいぶくわんしたてまつれり。その粉骨碎身こなつちり、いく千万變いくせんまんへんといふことをしらず。自己の面目は面目にあらず、如来の面目を面授せり。

釈迦牟尼仏しやくかむにぶつ、まさしく迦葉尊者をみます。迦葉尊者、まのあたり阿難尊者をみる。阿難尊者、まのあたり迦葉尊者の仏面を禮拜す。これ面授なり。阿難尊者この面授を任持じんぢして、商那和修しやうなわしゆを接して面授す。商那和修尊者、まさしく阿難尊者を奉觀ぶくわんするに、唯面与面ゆいめんよめん、面授し面授す。かくのごとく、代代嫡嫡の祖師、ともに弟

子は師にまみえ、師は弟子をみるによりて面授
しきたれり。一祖一師一弟としても、あひ面授
せざるは仏仏祖祖にあらず。たとへば、水を朝
宗せしめて宗派を長ぜしめ、燈を續して光明つ
ねならしむるに、億千万法するにも本枝一如な
るなり、また啐啄の迅機なるなり。しかあれば
すなはち、まのあたり釈迦牟尼仏をまぼりたて
まつりて、一期の日夜をつめり。仏面に照臨せ
られたてまつりて、一代の日夜をつめり。これ
いく無量劫を往来せりとしらず。しづかにおも
ひやりて随喜すべきなり。

釈迦牟尼仏の仏面を礼拝したてまつり、釈迦
牟尼仏の仏眼をわがまなこにうつしたてまつ
り、わがまなこを仏眼にうつしたてまつりし、
仏眼睛なり、仏面目なり。これをあひつたへて、
いまにいたるまで一世も間断せず面授しきたれ
るは、この面授なり。而今の数十代の嫡嫡は、
面面なる仏面なり、本初の仏面に面受なり。こ

の正伝面授を礼拝する、まさしく七仏釈迦牟尼
仏を礼拝したてまつるなり、迦葉尊者等の二十
八仏祖を礼拝供養したてまつるなり。

△現代語私訳▽

この面授のことわりは、釈迦牟尼仏が過去七
仏の六代目である迦葉仏の下で、親しく面授さ
れて七代目となり、それ以来大切に護り伝えて
来たわけだから、いってみれば、仏や祖師の面
をいきいきと伝えることである。仏の面から面
授しなければ、仏ではないのである。釈迦牟尼
仏が、まのあたりに親しく迦葉尊者をみられた
から迦葉尊者はそっくりそのまま仏の面となら
れた。釈尊のかたわらで待者をつとめられた阿
難尊者も、釈尊の實子である羅睺羅尊者ですら
も、迦葉尊者のびつたり一枚となった親しさに
は及ばない。もろもろの大菩薩といえども、迦
葉尊者ほどには釈尊と親密な関係とは言えない
し、もちろん釈尊との関係に於て迦葉尊者の座



著者紹介

小倉 玄照

おぐら げんしょう

一九三七年 岡山県に生まれる。一九六〇年 駒沢大学仏教学部禅学科卒業。一九七三年 曹洞宗大本山永平寺講師。著書には、『永平寺の四季』『禅と食』『新譜 勸坐禅儀講話』(いずれも誠信書房刊)等がある。現在 岡山県苫田郡加茂町 成興寺住職

よりも控えて坐らなければならない。釈尊と迦葉尊者は、同じ座に坐り、同じ袈裟を身にまとうのが、仏法のさだめである。迦葉尊者は親しく釈尊の面授を面^{かお}で受けられたのである。心で受けられ、身^{からだ}で受けられ、眼^{まなこ}で受けられたのである。釈迦牟尼仏を供養してうやうやしく敬い、ねんごろに礼拝してまみえたてまつたのである。釈迦牟尼仏にまみえるたびに徹底して迦葉尊者は自我をくたくと幾千万遍、とても数えきれたものではない。自己の面目はすっかり消えてしまつて如来の面目そのものになりきつてしまつたのである。

釈迦牟尼仏は、まさしく迦葉尊者をみられた。迦葉尊者は、同じように親しく阿難尊者をみた。阿難尊者はまた、親しく迦葉尊者に釈尊から伝えられた仏の面^{かお}を礼拝した。これが面授といふものである。阿難尊者は、この面授を持ち伝え、商那和修と出会い面授した。商那和修尊者は、

まさしく阿難尊者をみだてまつた時、面^{かお}と面^{かお}とがしつくり信頼関係で結ばれ、面^{かお}で授け、面^{かお}で受けることが行われた。このように代々の正統の祖師は、例外なく弟子は師にまみえ、師は弟子をみることによつて面授して来た。一祖といえども一師一弟たりとも、たがいに面授が行われなければ、仏でもないし祖師とも言えぬ。たとえば、水が流れて大河となり海に注ぐように、仏法が時とともに栄えるように努め、燈^{とも}を消すことなく常にともし続けて輝かせるためには、実にさまざまやり方があるし、木の本と枝先は同じ一本の木であることを忘れてはならぬ。また今まさに孵化しようとする雛が内側から殻^{から}をつつくと、母鶏^{はは}がすかさず外から殻をついて破るといふ、いわゆる啐啄^{そとく}同時の故事のような師と弟子の間の微妙な機微のことも重要である。そういうわけだから、いずれの仏祖も、まのあたりに釈迦牟尼仏を見守りたてまつりつ

つ生涯を送ったのである。寝てもさめても、仏のお顔に見守られながら生涯を過ごして来たと言つてもよい。そのようにしてはてしない永遠の過去から生まれ変わり死に変わりして今に至つたと言つてもよい。そのことをしずかに思いつつ今に生きる自分に感慨を覚えるべきであらう。

釈迦牟尼仏の（つまり仏の）面を礼拝したてまつり、釈迦牟尼仏の仏眼をわがまなこにしかと写したてまつるのであるから、わが眼はそのまゝ仏のめんだまでであり、仏の面目である。それを釈迦牟尼仏以来一代も欠かすことなく今に伝えて来たのは「面授」のおかげである。ほとけのいのちが数十代にわたつてきちんと伝えられて今に至つていふという事実は、面と面とが仏の面として向かいあったということであり、今に生きる自分は、釈迦牟尼佛そのものの面と出會つてそのいのちを受けついただということだ

ある。この正しく伝えられた仏のいのちを伝えようとする師匠を礼拝することは、まさしく永遠の過去から釈迦牟尼仏にいたる七仏を礼拝したてまつることであり、それは同時に迦葉尊者以降の二十八代にわたる仏祖の一人を礼拝し、供養したてまつることになるのである。

単伝と複伝

在家者は、なぜ「ほとけのいのち」を面受正伝出来ないのか、という点について少しふれたいおきます。

親から子、子から孫へと「人間のいのち」を伝えていく、いわゆる生物的な相続は、遺伝子の相続と申してもよいかと思いますが、有性生殖の人間の場合には、男（父）と女（母）の両方のいのちを混合して（生物学では、「染色体の交叉」というようですが）伝えていくために、例えば私（父）のいのち（遺伝子）を百%まる

ごと子に伝えることは不可能なのです。それは、次のことばで明らかです。

「ある個体の子孫は性的パートナーの子孫によつて汚染される。あなたの子供は半分のあなたでしかないし、あなたの孫は四分の一のあなたでしかない。数世代を経たときに、あなたが望めるのはせいぜい、あなたのわずかな部分をもつた、つまり数個の遺伝子をもつた多数の子孫をもつこと——たとえそのうちの幾人かがあなたと同じ名字を名乗っているにしても——である。」(R||ドーキンス『利己的な遺伝子』)

仏法の正伝面受は「単伝」ということばが象徴いたしますように、師に伝えられた「ほとけのいのち」の百パーセントを資(弟子)に伝えようとしませぬ。ところが、生物的な相続は、R||ドーキンスのことばのように、男女二人の親から一人の子へ「いのち」を伝えるのですから、いふなればファイフティーフファイフティです。片親

のいのちの半分ずつを伝えあうわけですから、仏法の正伝面授が「単伝」であるのに対し、それを仮に「複伝」と名づけて区別してみたのです。がどんなものでしょうか。

「単伝」を目ざすためには、当然のことですが俗縁はすべて捨て去らなければなりません。

『正法眼藏随聞記』は、その間の消息を

「学道の人、世情を捨つべきに就いて重々の用心有るべし。世を捨て、家を捨て、身を捨て、心を捨つるなり。」

「家を遁捨して親族の境界をも捨離すれども、我が身に苦しきことを為さじと思ひ、病発しつべき事を、仏道をも行ぜしと思ふは、未だ身を捨てざるなり。」

「また身をも惜まず難行苦行すれども、心仏道に入らずして、我が心にそむく事をば、仏道なれども為^せじと思ふは、心を捨てざるなり。」

ここで強調されていることは、生物的な遺伝

子の影響を一切捨てきってしまったわけなければ師からの正伝面授は不可能だということ。その状態を『正法眼蔵随聞記』は、

「知識もし仏と云ふは、蝦蟇が蚯蚓をぞと言はば、蝦蟇が蚯蚓を、是れらを仏と信じて、日比ひごの知恵を捨つるなり。この蚯蚓をの上に仏の相好光明、種々の所具の徳を求むるもなほ情見改まらざるなり。ただ当時の見ゆる処を仏と知るなり。」

師に徹底して随順しえてこそ単伝なのだということがここでは強調されているのです。

とは申しましたが、遺伝子の影響を一切排除してしまふことは、仏道の論理からは可能であっても、実際はむずかしいことです。例えば、出家という一大事を考えてみても、両親の乳幼児期からの関わり方が遠因になればそれはありえないのですから、「単伝」も「複伝」と複雑にからみあっているのです。

釈尊の実子である羅睺羅尊者が、なぜ迦葉尊

者のように釈尊とびつたり一枚となりえないか——問題を解く鍵はどうやらそのあたりに潜んでいるように私には思えます。

それにしても師のすべてを資（弟子）に面授する、というのはすこぶる単純明快です。俗縁の一切を捨て切ることとは至難なことですが、もしそれが可能であれば、正伝の面授面稟は世俗の親子間のフイティーフイティーの「複伝」よりもよほど簡単だと言えます。理論的には、「単伝」は、無性生殖による遺伝子の相続に似たところがあるとも言えるからです。

野性の厳しさが世俗に失われ、横着本性が肥大し切って、遂には親子関係が破綻しつつある今、仏道修行における単伝のありようを参究してみることによって、かえって野性的本能的にごく自然に行われていた人間のいのちの伝承相続の方法論に示唆が与えられるのではないかという気が私はこのごろしきりにします。

武徳君の立職を祝す

結制について

今日は三月の五日啓蟄、まことに春らしい日和の佳き日、方丈様のご長男武徳君が立職の式を挙げられるめでたい日であります。

今日の式典「法戦式」に参列したことのない方が殆んどかと思えますので、簡単にご説明かたがたお祝いの言葉を述べさせていただきます。

インドでは四月から七月にかけては雨季で、毎日凄い雨が降ります。そこでお釈迦さまは、四月十五日から七月十五日までの九十日間、お弟子さん方を祇園精舎とか竹林精舎といったお寺に集め、外出を禁じ、合宿修行させたのであります。これを「雨安居」とか、九十日間の合宿修行なので「九旬安居」といい、また「結制」というのであります。九十日安居の制度のもとに修行僧を結集するとう意味であります。そしてこの九旬安居を重



ねた回数により僧侶の階級がきまるようになり
ました。

この九旬安居、結制の法がインドから中国
に伝わりましたが、中国にはインドのように
雨季がありません。しかし、結制という九旬
安居は修行上たいへん有効適切な方法ですの
で、九十日間の安居を、夏冬二回おこなうよ
うになりました。そしてこの結制のことを「江
湖会」と呼ぶようにもなりました、その由来
は、というと、八世紀の頃、中国は唐の時代、
江西省に馬祖道一、湖南省に石頭希遷（この
方の即身仏が総持寺に祀られてあります）と
いう偉い禅師さまがおり、おおいに禅風を挙
揚されました。そこで当時、「二大師にまみえ
ずんば共に禅を語るに足らず」といわれ、天
下の雲水たちは江西省の馬祖道一、湖南省の
石頭希遷と、両禅師の間を往来して修行しま
した。それらの雲水を称して時の人々は「江

湖の禪客」といいました。江湖とは天下という意味で、そこから雲水が大勢集まって結制安居することを「江湖会」というようになりました。

この結制修行、江湖会が日本にも伝わり、明治以前までは方々の寺々で結制修行がおこなわれ、大勢集まって僧侶としての資質の向上に精進したのであります。ところが明治にはいつて教育制度が確立し、教育機関が着々整備されるに伴って教育方法もおのずからかわり、学校や僧堂で年間を通して集中的におこなうようになりました。そのため、方々の寺々で分散しておこなわれていた結制は教育機関としての意義の大半を失ない、結制修行は僧堂に任かせる形となりました。

しかし、お釈迦さま時代から続いた歴史ある結制ですので、実際の修行は僧堂にまかせるとしても、儀式として残ることになって今

日に及んでいるのであります。

結制中もつとも大事な儀式は五則法問といつて、結制のはじめ五日間の法要であります。通例第一日は住職、第二日は首座、第三日は書記、第四日は副寺、第五日は知客というふうな結制修行上重要な役職を担っている五人の方々が、公案といつて修行と悟りについで重要な問題を討議し合うのですが、今日多くは五則の第一日の住職の結制上堂と第二日の首座法戦式だけがおこなわれております。

僧侶の三出世

では首座というのはどういう人かといいますが、よく内閣の首班などといわれますが、その首班に相当する言葉、または学校の生徒会長や級長といったような意味で、結制修行中、常に一般修行僧の先頭に立つ重要な役職であります。したがって昔は雲水の中の最古

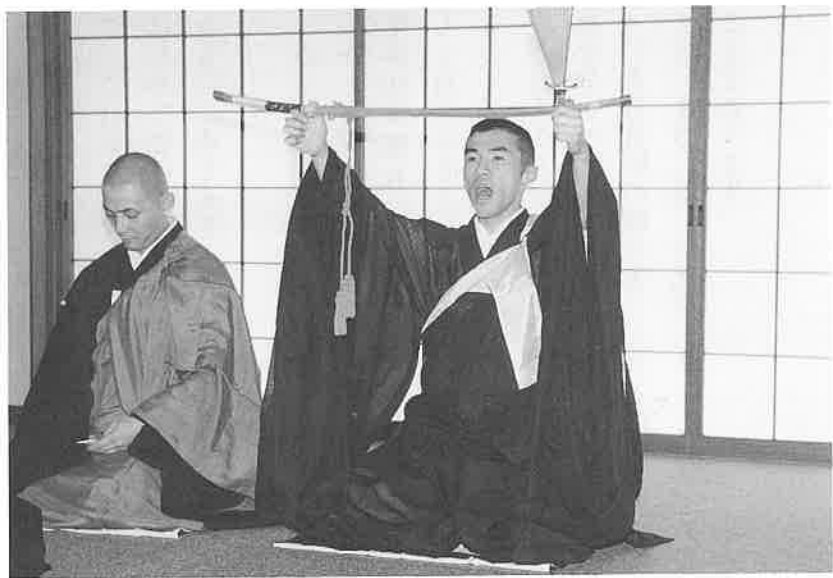
參の者を選んでこれに充てたものであります。だから首座のことを別名「長老」ともいうのであります。ところがいつの間にかやらそれが変わり、一度首座の職につかないといつまでも小僧として一般修行僧の下積みとなつておらねばならず、したがつて出世の端緒をつかむことができないということ、実際の年齢と得度してからの年齢が規定の線に達すれば誰でも必ずこれを勤めなくてはならないのであります。つまり、僧侶になる者は誰もが首座の職につき、これからおこなわれる法戦式で大勢の修行僧と問答をかわさなければならぬのであります。

さて私ども曹洞宗の僧侶は、生涯を通じて三度出世の式を挙げることになつております。その第一が本日の法戦式で、首座の職に立つところから「立職」といいます。今までは「沙弥」とか「小僧」といわれておりまし

たが、これからは「座元」という位になつて、法衣やお袈裟に白色の裏付けのサンをつけることが許されます。それで大勢の修行僧の中でも、「長老さま」と見分けられ、尊敬されるのであります。

第二の出世はお袈裟替えの「転衣」といいまして、福井にある大本山永平寺と横浜にある大本山総持寺に拝登して「瑞世」という本山一夜住職の儀式を済ませると、今度は「和尚」の位に昇り、色のついたお袈裟をかけることが許されます。それでも法衣はまだ黒色のままです。

第三の出世は「建法幢」、法幢、即ち仏法の旗印を建てることですが、これは結制修行を主宰することであり、方丈様はもう三十五年も前、永盛寺住職時代にすでに結制をおこなわれておりますので、今回は結制上堂は略されて首座の法戦式だけおこなわれます



が、要するに、仏法を宣揚し、多くの修行僧を指導して一人の首座を育成するのが建法幢で、これをおこなうと「大和尚」の位に進み、はじめて色のついた法衣を着用することができるのであります。

さて法戦式ですが、その由来をたずねると、むかしお釈迦さまが靈鷲山りやうじゆせんにおいて、高弟の摩訶迦葉尊者まかかしやうせんじやにご自分の席の半分を頒ち与えて説法を許されたのですが、その故事にならって、お師匠さまと同格で説法することを許されることを意味したもので、これを「半座はんざを分わかかつ」ともいうのであります。したがって本日首座の職に充てられる武徳君にとつては、まさに第一の出世、まことにめでたいことでもあります。

破顔一笑活機圓かなり

さて本日、私は西堂さいどうといつて結制修行中最高のお役目を頂戴いたしました。まことに光栄に存ずる次第であり、それだけにうれしく、歓びの氣持を拙い偈にあらわして持つて参りましたので簡単に説明申し上げ、お祝いの言葉といたします。

師資相統梅庵禪 師資相統す梅庵の禪
密々伝燈父子縁 密々に灯を伝う父子の縁
成寿山頭分半座 成寿山頭、半座を分かち
破顔一笑活機圓 破顔一笑、活機圓かなり

師は師匠、資は弟子のことで、師匠に随つて、当時開山梅庵白純大和尚の教えを相続した。その師匠と弟子は実は父と子の間柄であり、手塩にかけて綿密裡に法のともしびを伝

えて来た。その二十年に亘る精進が実って、ここ成寿山善光寺に於て半座を分かつ法戦式がおこなわれた。

「破顔一笑」というのは、お釈迦さまが靈鷲山におられた時、大梵天王が美しい花束を捧呈して説法をお願いしました。するとお釈迦さまはその花束を手にとって眼の前にかかげ、ちよつとひねっただけでひとことも説法なさない。その席にいた大勢の聴衆はその意を解しかねたのですが、ただ一人摩訶迦葉尊者だけが「お釈迦さまのお心を理解して破顔微笑、にっこりとほほえんだのです。するとお釈迦さまは、「仏法のすべてを摩訶迦葉に伝えおわった」と仰せられました。

お釈迦さまが花束を拈ぜられたのは、言葉では言いあらわすことのできないギリギリのところを示されたのであり、摩訶迦葉尊者がそれを見てにっこりほほえんだのは、仏心を

文字や言語を離れて以心伝心して体得されたからであります。ここから「教外別伝」、「不立文字」などという言葉が出てくるのであり、摩訶迦葉尊者は仏心を伝承した最初の人であり、この出会いを「拈華微笑」というのですが、このことあって以来、文字や言語に捉われず、仏の真意を心から心に伝え、師匠と弟子が密々に法を伝えてきたのが禅の大きな特徴であります。

次に「活機」とは人情の機微に通ずるはたらきのことと、武徳君はお師匠さんと同じ活機をまどかに身にそなえられたことであり、まことにめでたいことであります。なおお師匠さまの号は「大圓」ですので、それにあやかつて「活機圓かなり」と詠んだ次第であります。

方丈様、そして武徳長老さま、ほんとうにおめでとうございます。

知識と知恵

精神科医 宮川健児

ある大学病院の精神科医局に入ってきたばかりの新人の医師たちに、私はこんな話をしたことがある。

「先生たちは、今回、国家試験を合格し、きつと今は、どんな精神科の教授よりも多くの医学的知識を持っているだろうと思う。しかし、知

識では諸先輩に勝ったとしても、哀しいかな先生たちにはまだ知恵がない。精神科医を志すなら、今まで覚えた知識をまず白紙に戻してもらいたい。そして、今後は、知恵を修得する努力をしてほしい」と。

精神科にかかる患者さんには、知識の切り売



りだけではとても治療や指導をすることはできない。目に見えない、他人の心の病を治そうとするときに、医学的知識以上に大切になってくるのが、医師や、患者に関わる看護婦たち個人の人間性、歴史性だと私は思う。受付で、ニコリ微笑み「お大事に」といわれただけで、病が八割回復することもある。

精神科医の場合、一人の患者さんを目の前にしたとき、どこまでその人自身を把握できるか。十人いれば十人の、生い立ち、環境、性格がある。そんな中から起こった病を、一つの医学的治療法だけで解決できるわけがない。きっと、若い医師たちも、自分の生い立ちや環境、性格——祖父母や両親からいわれた言葉、小さい頃に読んだ本、見た風景、辛かった時代、楽しかった時代、自分はどんなふうにごしていたか。現在、自分が一番安心できるときはいつなのか。自分の優越感や劣等感は何なのか——などを医

学的知識にプラスして、一人一人に一番適切と思われる治療法を試みていくことになるだろう。そんなとき必要になってくるのが、知恵なのである。

私が学生だった頃よりも、きっと今の若い医師たちは、そうとう厳しい受験戦争を勝ち抜き、難関をクリアしてきたのだろう。たぶん小学校、中学校、高校でも成績がよく、試験も偏差値も高い点をとっていたに違いない。彼らが子どもの頃というのは、世の中全体が、知識のための記憶術を詰め込み、これに優れている者が、本人も親も教師も社会も、「出来のよい人間」として評価するような風潮になっていた。評価された人間は自信を持って社会に出るのだが、さまざまな荒波の中で、自分の知識がいかに役立たないものかを知り、自尊心が崩れ、中には心の病に陥る人もいる。

人間には側頭葉という知識のセンターが優れ

ている人もいれば、前頭葉、後頭葉、脳幹といった知恵のセンターが優れている人もいる。知識と知恵と健康と、三つとも自信のある人はまれである。しかし、三つともに自信のない人もまれである。なのに「隣の芝生は青い」（私は、隣の麦飯はうまい、というが）と人と自分が劣っている部分をやたら比較したがってしまふ。

勉強したい人はうんとすればいい。音楽や絵画、文章が好きなのはほとんど打ち込み、体を動かして働きたい人はそれで暮らす。そこにはまったく優劣の差はない。究極的には、個々の人が個々の生きがいのために一生を送ればよい。人間とはそういうものだということを、まず私は新人の医師たちに、聞いたかったのである。私の話が、若い彼らに伝わったかどうかかわからない。でも、きつと実際に臨床を続けているうちに、自然にわかってくると思う。そして、私にも経験があるように、心の病気を持つ患者

さんにとつて、最高の精神科医となり得る知恵を持つているのは、一番その人の身近にいて、その人のことを心から真剣に考えることができる家族であり、自分はそれを助けるのが仕事だと気づくときもくるだろう。

●プロフィール

みやがわ けんじ 昭和九年、高知県生まれ。岐阜大学医学部卒業後、同大病院精神科医局勤務。現在、内科神経科・宮川医院院長。岐阜南病院理事。岐阜大学病院精神神経科同門会会長。



足摺岬に近い大自然の中で生まれ育ち、世の中の常識にとらわれない独特の人生観、人間観を持つて患者に接する個性的な医師。昭和五十四年には四国八十八カ所を巡礼。自分で作つた野菜、廃材を利用して建てた囲炉裏小屋「自菜我菜庵」、自然の中でのアウトドアスポーツをこよなく愛す。若い頃から朝は四時、五時に目が覚め、夜は八時過ぎると眠くなってくる原始的な体質という。

インド留学記

その10

二度目のインド 国内旅行 (1)



学 授 岩
大 教 澤
金 助 島

半月三百ルピーの旅へ

インドでの留学生活も半年が過ぎた。またぞろ旅の虫が騒ぎ始めた。サンスクリット語を読むばかりの生活に、そろそろ嫌気がさしてきたのだ。ちょうどそのころひさかたぶりに、日本の義理の妹から便りがあった。新婚旅行でインドに来ると言うのだ。それ幸いと会いに行くこ

とに決めた。落ち合うところはベナレスだ。そのついでに（どっちがいつでなのか分からないが）、半月ほどベナレス近辺を旅することにした。プーナを出て、ボンベイ近郊のダダルで汽車を乗り継ぎ、まずカジュラーホーへ。そこからベナレスを経て、ブツダ・ガヤー（お釈迦さんが悟りを開かれたところ）などの仏跡を巡り、再びベナレスに戻ったのち、プーナへ帰ってこ



インド全図およびその周辺地図

ようという計画だ。

「なにしろ今度は二度目の旅行だ。それにインドに来て半年もたっている。インド人にもインドの生活にも相当なれた(はずだ)。最初の旅行とはひとあじ違った旅をしたい。できるだけインド人の旅に近い旅を試みたい。最初の旅は、すべて一等車で、ホテルはほとんどみんなバスとトイレ付きのところだった。それに日本へのおみやげにレモン・トパーズなんかも買ってしまった。そのせいで半月の旅行に八百ルピー(当時約二万五千円程度)もかかってしまった。八百ルピーといえば、大学の助教教授のほぼひと月の給料じゃないか。インドに住んでいてそんな豪華な旅行をしてはいけない。インドに住んでいる意味がない。せめて大学院生のひと月の奨学金でいどで、半月くらいは旅行できなくっちゃ駄目だ。よし今度は、旅費・宿泊費すべて込みで三百ルピー(約一万円)でやっ

てみよう」。こう考えて、きっかり三百ルピーだけ握りしめ、リュックをかついで旅にでた。

三月五日の夜、九時五〇分発、ボンベイ行きの鈍行に乗る。当然二等車だ。途中ダダルで乗り換えてベナレスまで、料金は外国人学生割引でなんと三ールピー(約千円)。これでベナレスまで約千五百キロ、ほぼ一昼夜まるまる汽車に乗っていていいのだ。三時ごろダダルに着く。乗り継ぎのベナレス行き列車は、六時五〇分発だ。しばらく駅の待合い室で待つことにする。リュックには寝袋と着替えしか入っていないのだが、それでも盗難がこわくて朝まで眠れない。うっすらと東の空が明るくなりかけたころ、駅のホームで紅茶を飲む。ひんやりと冷たい空気のおかげで飲む。ミルクと砂糖のたっぷり入った紅茶。生き返ったような気分だ。すると腹がへってきた。ホームにいる物売りからプーリー(インド式揚げパン)とバージー(野菜のてんぷら

を買い、二杯目の紅茶といっしょに食べる。これが今日の朝食だ。

六時ごろ、ダダル発ベナレス行きの列車がホームに入る。ポーターの男の子には、前もつて二ルピー（六〇円）渡しておいた。それで彼が席を確保してくれると言うのだ。半信半疑だったが、とにかく信用してその子を待つ。すぐに得意気な顔で彼が戻って来た。手を引くようにして席へと案内してくれる。二等車の車内に入ると、座席は日本の汽車のB寝台のような作りになっている。座席は上下とも木製だ。下の席はちゃんとした座席になっている。だが上の席は、すのこのようになっていて。そしてそこにはたいてい荷物が置いてある。どうも網棚のようだ。そのうちの一つに男の子が一人座って手を招きしている。ポーターの友達のようなだ。あたりを見回すと、あいた席などすでない。通路で寝て行くよりはずっとましかと思つて、その

席（というか網棚）に陣取る。寝袋を引いて寝そべってみる。なかなか快適。とにかく体をのばして横になれるのがいい。リュックを枕がわりに寝転がっていると、昨夜の徹夜がきいたのだろうか。お金と荷物の心配はどこへやら、知らぬまに寝入ってしまった。

カジユラーホーのミトウナ像

一等車で旅したときには、ボーイが車室に食事の注文をとりに来た。そして注文しておけば、食事時にターリー（インドの定食）を運んで来てくれた。だが二等車ではそうはいかない。お腹がすけば、どこからともなく車内にあらわれた物売りから、バナナ、キュウリ、ピーナツなどを買って食べるか、途中の停車駅のホームでプーリーとかバージーなどを買って食べるしかない。うとうととしては目をさまし、またうとうととしては目をさまし、お腹がすくと適

当に食べ物を買って食べながら、ようやく翌日（三月七日）の朝六時三〇分にサトナーに着いた。ここからカジュラーホーまでは一一七キロ。駅前で六時四五分発のバスに乗り込み、カジュラーホーへ。料金は五ルピー五〇パイサ（一六五円）だ。カジュラーホーには一〇時二〇分に到着。バスの中で一緒になった日本人男性旅行者三人（二人組の大学生と一人旅の大学生）とともに、まず宿探した。四人相部屋で一人一泊四ルピー（一一〇円）の安宿（Gupta Hotel）に泊まることにする。

四人がそれぞれ貸自転車（一日五〇パイサ＝一五円）を借り、まず西群の寺院群に向かう。そして寺院群の奥にあるヒンドゥー教寺院デーヴィー・ジャガダンパーに到着。この寺院に、エロティックなことで有名なあの男女交合像（ミトウナ像）が、一番たくさんあるのだ。ある。ある。寺院の外壁は無数のミトウナ像でま

さに埋めつくされていた。男女の像が本当にいろんな体位でからみあっている。四八手なんてものじゃない。レズあり獣姦ありの世界だ。こんなものがお寺の外壁に彫られているなんて、いったい何を考えているんだろう。確かに一見そんなふうに見える代物だ。だが、インドの乾いた空気のなか、照りつける太陽のもとで、まじまじと見ていると、まったくいやらしい気がしない。あまりにあげつろげに「堂々と」という感じなので、セックスにはつきものと思ひこんでいた、秘め事的な淫びさが感じられないのだ。性を謳歌するということがあってもいいんじゃないか。むしろそんな気持ちにさせる代物だった。

これらの寺院群が作られたのは、今から約千年ほどまえのことだ。そのころこの地には密教が栄えていた。密教の教えでは、女性が神の力の現れたと考えられていた。だから女性との性

交は、神の力に接するためのものだったのだ。

一般にはこんな説明がされている。確かにこの説明のように、寺院にこんな像が彫られたのは、密教の影響があるのだろうか。だが像を見ているうちに、私は次のようなことを考えていた。

インドのヒンドゥー教徒の人生の目的は、四つあると昔から言われている。すなわち、実利（アルタ）と愛欲（カーマ）と法（ダルマ）と解脱（モークシャ）である。インドという日本では、貧しい遅れた国とか、宗教的な神秘の国というイメージが強い。そのため、時代遅れの身分制度カーストの社会的規範（ダルマ）を守って生活する人とか、解脱を求めて出家して修行するヨーガ行者というような生き方を、すぐ思い浮かべてしまうようなところがある。だが、お金儲けをすること（アルタ）やセックスを楽しむこと（カーマ）だって、堂々と人生の四大目的のなかに含まれているのだ。その意味

では、私たち日本人が、「金儲けやセックスが人生の目的です」とは、本音ではたとえそう思っていたとしても、儒教的あるいは仏教的禁欲主義のせいか、そう堂々とは言い切れないのとは違っている。確かにインドは、今では、映画にキスシーンすら長年登場しなかったという国柄だ。だが昔は、セックスの経典『カーマ・スートラ』を生み出した国なのだから、このミトゥナ像に描かれているように、今よりもっと自由にもっと多様にもっと堂々とセックスを楽しむ人たちがおり、またそうしたことにもっと寛容な土壌があったのではなかったか。そしてそのような土壌の上に、密教の影響も受けて、このようなミトゥナ像が壁を埋めつくすような寺院が作られたのではなかったらうか。

カジュラーホーの夜

西群の諸寺院のミトゥナ像を見て、性に対し



てなんだかとてもおおらかな気持ちになって、宿に戻ると、そこに一人の日本人女性旅行者がいた。女性のインド一人旅なんて珍しいなと思しながら、こちらは四人という気安さもあって気軽に声をかけ、一緒に昼飯を食うことになった。話してみると、名古屋の私立A大学の学生だとのことだった。インドに来る前、名古屋で私が下宿していたのは、そのA大学のすぐそばだった。懐かしさも手伝って、とても話がはずんだ。それに五人ともみんな大学生で、インドをヒッピーみたいに旅しているという気楽さというか親しみもあって、その日はみんな相部屋で泊まることになった。

昼食後、自転車で東群と南群の諸寺院を回り、夕方また宿に戻る。晩飯まではまだ間があるので、みんなで少し散歩することにする。ゴードル川の川辺に座り込んで話をする。そのうち後の三人は先に宿に戻り、彼女と二人川辺に残る。

インドの夕闇は赤くない。「夕焼けこやけで日が暮れて」という雰囲気とはちよつと違う。東の空が白々と明けてくると言うときの、「白々」に近いのだ。変な言い方だけど、白い夕闇にやさしくつまれるという感じだ。その白い夕闇が黒い夕闇へと移りゆく中、僕たちは、今日会ったばかりだということが自分でも信じられないくらい、とつても打ち解けあって、いろんなことを話した。そしてこれ以上話していると、暗くてもう帰り道が分からなくなってしまうくらいになって、やっと宿に戻ってきた。

夕食は五人で酒盛りだ。インド製の甘いラム酒を飲みながら、インド体験談が始まる。圧巻は京都の私立B大六回生の体験だった。なんと彼は、日本から船に自転車を積み込んでカルカッタに渡り、カルカッタからベナレスまで自転車をこいでやってきたというのだ。今は自転車をベナレスの宿にあずけて、ここには汽車とバ

スを乗り継いで来たのだそうだ。これからまたベナレスに戻り、そこから再び自転車で、デリ、ボンベイを回り、金が尽きればボンベイから、そしてまだ金が残れば西アジアのほうにも足をのびして、また船で日本に帰るというのだ。そういう旅の仕方もあったのかと、そのたくましさ感激してみんなで盛り上がり、ラム酒がどんどんすすむ。

そのうち、二人組の大学生のほうは、酔っぱらって先にベッドへ。残った三人でさらに飲みながら話はずむ。自転車旅行の御仁が、ときおり手巻きのタバコを吸っている。ハッシンシ（大麻）かなにかだったのかもしれない。彼の腰が突然ぬけてしまう。彼は這ってベッドへ。最後に彼女と二人残される。二人でさらに飲みつづける。しかしそろそろ限界だ。酒と話はこれくらいにして寝ることにする。

入り口から順に、すでに三つのベッドが占領

されていた。あいているのは奥のベッド二つだ。彼女は一番奥のベッドに、僕はその隣のベッドに入る。カジュラーホーのミトウナ像のせい、酒のせい、はたまた彼女が隣のベッドにいるせいなのか、なかなか寝つかれない。

そのうちとうとうとして、ふと目をさまし、隣を見る。彼女の手がベッドから外に出て、こちらがわにたれている。その手が僕に向かつてさしのべられているように見えた。思い切つて握ってみる。すると彼女がスリと僕のベッドに入ってきた……。そしてまたスリと自分のベッドに戻っていった。

男女がおおらかに性を謳歌するミトウナ像に心動かされたせいだろうか。こんな夢を見て朝目覚めると、彼女は九時四五分の飛行機でベナレスへたつとかで、早々と朝食をすませ、身支度をしている。そのまま彼女とは、お互い名前も告げずに別れた。




風の葬送

砂、というより灰、あるいは白い粉、といったほうが適切なようにも思える。

この土地の乾期は数ヶ月後に訪れるはずなのだが、すでに地表はひどく乾燥している。台地状の地形をしているその村には川がなく、村はずれにある沼から日常生活に使う水を運ばなければならぬ。飲み水には溜めておいた雨水を次の雨期まで少しづつ使うことになり、当然のことながら前年の雨期の降水量が生活や農作物の育生状態に大きく作用する。畑を見渡すと緑

落合 隆 ピンダー・ラタノー

(バンコック・ワットパクナム)



に覆われているようにも見えるのだが、大部分がイモ畑で他の作物を植えても育たないのだろう。砂地に根を付けたイモの葉が低いところで風にゆれている。

この東北地方の村からバンコックに来ている友人の僧侶に誘われて行ったのだが、正直なところ積極的に行きたくないような場所ではない。私は日本に生れ、あの緑豊かな湿润とした土地にいた。乾燥した冬があるといっても三月になれば青葉が芽吹く。その自然と同様に人間

関係も湿り気をおびている。時にはほど良く、時には過剰なほどに。

村へ行って三日目の夜。お経を上げに行くかと誘われ、少年僧もまじえた六、七人で一軒の家へ向った。どの家も板をまばらに打ち付けてあるだけで、寒期はかなり気温の下がるこの地方、朝方の寒さをどのようにして耐えているのか。私たちがその家の二階に上がると三〇人ほどの村人が集まっていた。

その日の朝、家の青年が他界した。



長い間病気で寝たきりだった青年の遺体は、テント状に張られた黒い布に

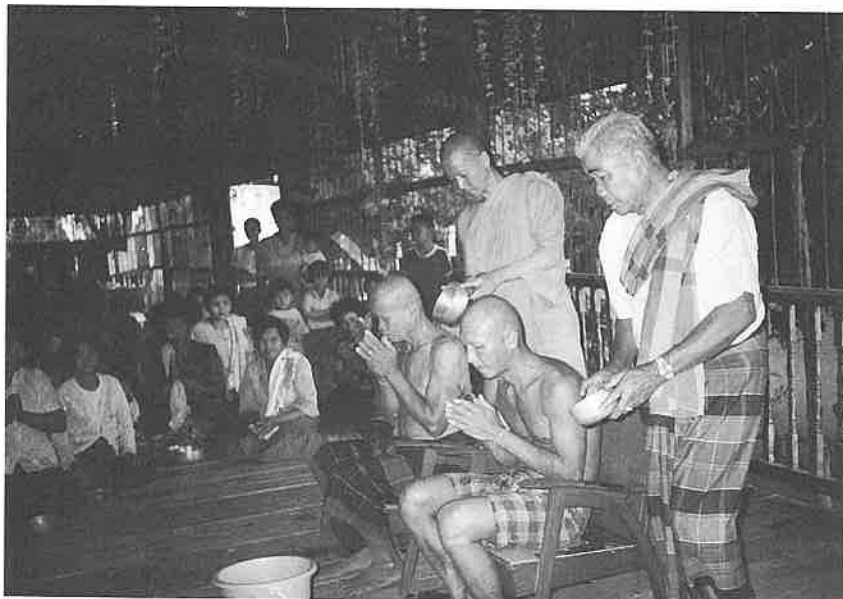
覆われ、脇には手製の粗末な柩が置かれている。人々は酒を酌み交し冗談を言っては大声で笑い合っていて、一見しただけでは何の集まりなのか見当がつかない。色着きの銀紙が貼られた柩は、別の世界から届けられた正体不明の物のように、部屋の中央で押し黙ったままだい。

翌日の午後はその家で沙弥の得度式が行なわれた。弟や甥が四人。村の住職に戒を授けてもらい三衣に着替える。ブワット・ナー・ソツブ（霊前得度）といわれるこの慣習はまだかなり残されていて、死者の係累の者が得度することによって得られるブン（徳）が、他界した者に送り届けられると考えられている。その四人の子供が先頭になり柩につながれた紐を持ち、百人あまりの村人たちが行列になって村を出て行く。私は、この村の寺には火葬の設備がないので隣の村まで行くのかと、同じように紐を持ちながら考えていたのだが、それが間違いである



霊前得度(ブワット・ナー・ソップ) 4人の子どものこの日1日だけの得度式

2人の農民が得度を行う。私は背中に聖水をかける



ことは間もなくわかった。雑木林、といっても半分死にかけたような木が、やっとの思いで立っているといった村はずれのその場所で行列は止った。

火葬はこの雑木林で行なわれるのだ。

丸太が組み上げてあり、すでに準備は整っている。泣いている者は一人もいない。照り付けて日射しの下の乾いた死。

数種類の読経の後、柩は数人の男たちによって持ち上げられ、丸太の上に置かれる。あお向けになっていた遺体を横向きに変えたのだが、何か意味があるのだろうか。長めの丸太が左右から柩を押さえ付けるように置かれると、村人たちは木の枝に葉を数枚くしぎしにしたものを下の方に一人一人置いてゆく。その葉に火が着けられると数秒のうちに丸太に火がうつり、さらに柩の板が燃え始める。それと同時に遺族が硬貨を空中にばらまく。村人たちは歓声をあげ

ながら先を争ってひろい集めている。

どの顔も笑っている。まちがいなく笑っている。

私は遺体が燃えつきるまで見ているつもりでいたのだが、全員で村へ帰らなければいけないと言われ、やむなく友人の僧と村へ向かう農道を並んで歩いた。

「これはとても失礼な質問かもしれないが、仮にあなたの父親が亡くなった時も、この雑木林でこの様にして火葬にするのですか。」

「そうです」と、淡々と答える。そして、「あの場所と道をはさんだ反対側にある場所で子供の遺体を火葬にします」と、彼が指さしたもう一つの雑木林はどこか全体に白っぽく、少しかすんでいるように私には見えた。

その翌日、私は一人で雑木林へ向った。その場所は禁域を示すために数本の切り取った立木

で矩形に囲ってあった。大腿部のあたりだろうが、まだ燃えきっていないようなところもある。いくら病気で長い間寝ていたといつても若い肉体、すぐに灰になろうとはしない。むしろ充分に生きえなかつた青春だつたからこそ生への、肉体への渴望には強いものがあつたのだろう。

前日は私自身始めて体験することで周囲を見回す余裕がなかつたのだが、その林の中には火葬の跡がかなりある。まだ半年ぐらいかと思われ、ものも、ほとんどまわりの地面と区分けのつかなくなつてしまつたものもあり、よく数えれば十ヶ所以上になるだろうか。黒く変色した壺や皿、線香の燃え残りがあつてはじめてそれと知れる程度で、骨や灰は風に吹き飛ばされてしまつてゐる。

消滅。人が消滅してゆく過程が目の前に拡がっている。

村にもどつてから聞いてみたのだが、ある程

度の金持ちなら骨を集めて寺院の一角に安置することもあるが、ほとんどはそのまま林の中に捨て置かれるらしい。寺院に置かれる場合でも、使い古されたプラスチックのオイル缶に入れ、無造作に壁からぶら下げてあつたりする。村人たちの普段の生活の中での、かなり親密に見える大家族主義といつた湿り気と、死と死後のあつかいの乾いた様相。

この落差はどこから来ているのか。

東アジアの、あの地中の暗がりへ、あの意識の暗がりへ隠すようにして死を閉じ込める風習はこの土地にはない。

コラート高原からイサーン地方にかけての乾燥地帯は風の吹く日が多い。青年の死が白い粒子となつて空中を舞うようになるまで、さほどの時間はかからない。

仏歴二五三六年、西歴一九九三年、二月。

横浜善光寺留学僧育英会に多額のご寄付



このたび、横浜善光寺留学僧育英会顧問でケイヒン株式会社代表取締役会長の大津正二氏（横浜市磯子区在住）より、故・大津敦子様（大津氏夫人）のご遺志により、横浜善光寺留学僧育英会に、五百万円也のご寄付をいただきました。かねてから、仏教興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成する留学僧育英会に心を寄せておられたとのこと。育英会では、故人のご遺徳を偲び、いただいた浄財を有効に役立たせていただきたいと存じます。

ここに故人のご冥福をお祈り致すと共に、謹んでお礼申し上げます。

平成五年五月

横浜善光寺留学僧育英会

理事長 黒田武志

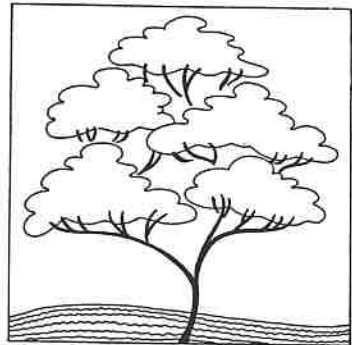
森山師を送る言葉

このたび森山大行師が南米開教総監に御就任
なされました。これは曹洞宗はじまって以来の、
全く異例の抜擢であり、海外布教の若返りのた
めよろこぶべきことと思えます。

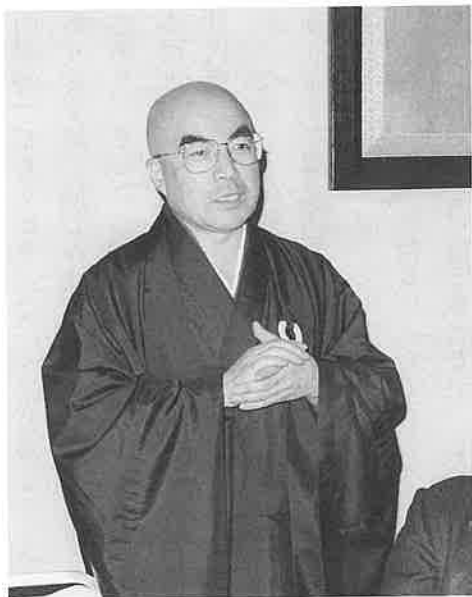
開教総監という役職は、南米のほか、北米と
ハワイに置かれておりますが、北米の山下総監、
ハワイの松浦総監は共に八十歳代のお方であ
ります。そうした年齢ベースの中で、五十歳代

で開教総監の重責を担われるとは、宗務当局の
大英断もさることながら、森山師の力量と徳望
のしからしむるところであります。

私は善光寺さんの紹介で十年ほど前はじめて
森山師に会いました。その時、「これは絵になる
風貌だ。将来輸出できる禪の顔だ」と思いまし
た。といいますのは、かつてフランスで大活躍
された弟子丸さんが素晴らしい成果を挙げられた



要素の中で、あのご面相の果たした役割はたいへん大きかったのではないかと思います。フランス人が達磨大師の再来かのように思ったらしいということはご本人から聞いた話であります。が、そういえば森山師の弟子のフランス人バシユール・ルース浄信さんは森山師を若き達磨大師のように敬慕されたのではないかと思います。彼女は善光寺留学僧第四期生に採用されま



したので私共とも親しい間柄なのですが、昨年南フランスに禅堂を建てられました。

そうした経緯からみて、海外布教の経験豊かな森山師は、将来フランスに渡り、ポスト弟子丸の禅をフランスに挙揚するのではないかと思っていたのですが、今回計らずも南米大陸からお呼びがかかり、開教総監として赴任されることは、男子の本懐これに過ぐるものはないと思います。

開教総監というのは開教師とは格が違うのです。ハワイの開教総監松浦師は私と同郷で、師は私の師寮寺の首座でしたので中学時代から親しい間柄であり、五十年來文通しておりますが、彼の長い長い開教師時代は「レバレンス松浦」として手紙を出しておりました。それが開教総監になると途端に「ビショップ松浦」に変わるのです。宗門でいえば「老師」が「禪師」に変わるようなもので、「ビショップ森山」はいわば「森

山禪師」であります。たいへん名譽なことであります。ありますが、何しろ地球の裏側の国に出向くのであり、そこには言葉の障壁があり、また経済事情と治安の問題もあり、さらには日系社会の世代交代に伴い、日本的布教の行詰りもあるといった様々な困難が待ちかまえております。そうした中で禪堂新築という事業が目前に控えております。

それで、ただ気軽るに「おめでとう。いってらっしゃい」では済まされない。しっかりと頑張ってください。達磨大師でさえ九年面壁して慧可大師を得たのであるから、四年の任期を少なくとも三期ぐらいはつとめしつかりした基礎を築いてほしいと激励しようではないかという気持ちでこの会を發起し、ご案内申し上げますところ、大勢の皆様にご参集いただき本当に有難うございました。発起人を代表して厚く御礼申し上げます。



四月のお茶会

桜の花の下で “清和会” 開かれる

平成五年四月三日。やわらかな春の陽差しと満開の桜の中、裏千家茶道一流の師、鈴木宗幹先生のご自宅にある“日々庵”(東京都世田谷区)において、清和会のみなさんによる優雅で楽しいお茶会が催されました。

鈴木先生のご尊父は裏千家流の茶の湯の手引書を何冊も書かれている、著名な鈴木宗保先生。親子二代に亘り、駒沢大学茶道部の講師も歴任されておられます。横浜善光寺の方丈は、大学時代ずっと茶道部に在籍しておりましたが、そ

のとき学んだのが鈴木宗保先生でした。また、今回、薄茶席の席主となられたのは、黒田方丈の茶道部後輩にあたられる新美昌道氏。お茶会は、九時半から三時まで、黒田方丈の“濃茶席”、新美氏の“薄茶席”、大磯の松月製による“点心席”、終始なごやかに会は進められました。

集まってきてくださった清和会のみなさんは総勢約百五十人。中には広島からわざわざ駆けつけてきてくださった方も。それぞれが、茶の湯という、非日常的な、心豊かになる空間でコ

御茶	豊栄の音	此御用器
御菓子	ふやき	養生
器	備前摺鉢	骨人造
	以上	
茶碗	原歩手造 黒共箱	
茶杓	銘 吹茶去 物金並共箱	
茶入	瀬戸肩衝	
	御家元箱	
水指	竹根 一灯直書付 同箱	
	銘 達摩	
釜	中川一政手造土釜型トテ	
	銘 肥後耳付	
	銘 染付 笠	
花入	肥後耳付	
香合	染付 笠	
釜	中川一政手造土釜型トテ	
	銘 肥後耳付	
	銘 染付 笠	
	以上	

床

總持位隱禪師筆 頌
春有百華秋有月、

ミニニケーションをはかり、忘れかけられつつある美しい日本の心を満喫して帰られたようでした。

大浜正さんは、次のような手紙を後日送ってくださいました。

『過日は鈴木先生御宅でのお茶会にお招き賜りありがとうございました。治ざいました。治兵衛先生の桜な

ぐりの炉縁の味わいと、中川先生の釜肌や文字の具合がマッチしていて最高でした。覚々齋の手造りの黒大茶碗、鉄のごとく、黒田方丈さまにびったりで、時代差を感じない、とても楽しい、すばらしいお席でした。魯山人先生のすり鉢もみごとで、大宇宙を感じ、豊かな気持ちになりました。

あたたかな茶日和、桜もほころび、花のトネルの下を幸せな気持ちで通り帰りました。茶の香の飛ばないうちにお礼申し上げたく存じます』

きつとみなさん、お茶会で感じた穏やかな喜びのひとときをお家にまで持って帰って、ご家族に笑顔とやさしさを分け与えられたことでしょう。

観桜茶会



平氏五千四百廿二日
 春日 観桜茶会
 會記
 立 新美昌道氏

床 光唐筆請和歌紙新聞
 目先長在上下句
 春日 新美昌道氏

花 竹舟 利舟是
 花入 竹舟是
 春台 春日 新美昌道氏
 空 高田正全 春日 新美昌道氏
 心 春日 新美昌道氏
 風 春日 新美昌道氏
 相 行舟棚 春日 新美昌道氏
 水指 御家元在明同部 春日 新美昌道氏
 萬君 御家元在明同部 春日 新美昌道氏
 茶杓 御家元在明同部 春日 新美昌道氏
 茶碗 御家元在明同部 春日 新美昌道氏
 替 雨浦堅手 春日 新美昌道氏
 鉢 鉢白鷗 春日 新美昌道氏
 蓋置 織部 春日 新美昌道氏
 建水 春日 新美昌道氏
 于菓子 遠山前御早の心 春日 新美昌道氏
 家 春日 新美昌道氏
 漆舟在列 春日 新美昌道氏



▼薄茶席

▲薄茶点前の新美昌道氏





▲日々庵庭



◀日々庵主鈴木宗幹先生

▼薄茶席連客





▲善光寺方丈点前



▲薄茶席花



▲日々庵長老武田大氏、飯塚平八郎氏



◀濃茶席床



◀濃茶席にて
善光寺婦人会伊藤会長を囲んで

▶井高帰山先生を迎えて



▼横塚宗寿先生とともに





老いてなお、よき導師に
恵まれて

香川県 豊永 緑

このたび宗教法人生長の家
の雑誌『光の泉』十二月号誌
上、横浜善光寺の黒田武志ご
住職さまと初めて出会わせて
いただく法縁にあずかりまし
た。それぞれ宗教、宗祖は違
つても、争うのはおかしい。
みな、一つの幸せに向かう道
なのだからというような生長
の家創始者谷口雅春先生と同
思想のご住職さまのインタビ
ュー記事、拝読させていただきました。
深く感動いたしました。

また、ご住職さまの若い日
のご苦勞のほど、読みますむ
につれ、涙が浮かんでくるの
を止められませんでした。ど
んな逆境も苦しみも、すべて
心の糧としてしまいう偉大な平
成の名僧を見つけさせていた
だいた気がいたしました。雨
の中をとぼとぼと歩かれ、つ
いに涅槃金まで使うほどに窮
されたお姿は、私もご住職さ
まほどの厳しさではなくとも、
似たような体験をしたこと
があるのです、どれほどお辛
かったですであろうと胸が詰まっ
ていました。また、自分を騙
した男に逆に感謝するお心の
尊さ…。

失礼ながら、僧界の一部では地に落ちた末世のような時代になったといわれることもある現代で、ご住職さまのようなお方がおられることを知ることができ、これ以上の喜びはありません。老いてよき導師に恵まれた幸せでいっぱいでございます。

「光の泉」を読んで以来、私の話を聞いてくださる方はこの方以外にいない、と毎日思いつめるようになりました。誌上には詳しい住所、連絡先等が記されていないなかったので、お手紙を差し上げたいけど、どうしたらいいものか途方にくれ、とうとう勇気を

持つて出版社に問い合わせ、教えていただいた次第でございます。

思い起こせば、私の女としての若き日々は、精神的な苦痛をなめ尽くした辛いことばかりの繰り返しでございます。何度自殺の誘惑に負けそうになったか知りません。三度の家出を続け、暗い夜道を行くあてもなくとぼとぼと。死んでしまつたらどんなに楽だろうと思ひながら。そんなとき、私はある青年から、五銭の小冊子を買ったのです。生長の家の小冊子でした。当時の私の、それはまさに金字塔でございます。み教えを

生きる尼僧にもなりましたが、それを返上し、母なき四人の子の新しい母親にもなりました。み教えのままに生きることを誓ってからは、数々の奇跡の体験もし、あの苦痛の日々は本当にあつたのだろうかという思いがするほどの幸せになれたのでございます。

そしてさらにはこんなすばらしいご住職さまのみ教えにも触れることができた…。神さまが、私にまた一つの幸せを与えてくださったような気がします。

きつと私もまもなく、人生のゴールインを迎えることので

しよう。今は、その一歩手前、一所懸命生きていたい、と、私の半生を「自分史」として綴る毎日でございます。もう、原稿用紙に二百枚以上になりますが、いつかご住職さまにも読んでいただけることを夢みて、感謝の日々を送っております。

第二の人生のテーマは
「心の安らぎ」

栃木県 植竹 久夫

私は今年で満五十五歳になり、長年勤めていた旅行会社を定年退職することになりました。その後は、関連会社に

移籍となり、十年くらいはそこで勤めることができそうです。ただし、役員として末席をけがすので、成績が悪いとクビにされるかもしれませ

ん。
でも、クビにされるかどうかよりも、いつまでも元気で働くことができるかどうかがちよつと心配ですね。経済不況で厳しい昨今、働けるのは体にもいいし幸せなのです。が、老化だけはどうしようもないので不安です。黒田ご往職さまのように、いつまでも青年のような大志を抱いてがんばることができればいいのですが。

さて、これまでの「転勤族」からやつと縁を切ることができ、この四月からは故郷である栃木の自然の中に転居し暮らすことになりました。栃木県庁に挨拶にいくと、県庁内や県警本部の中枢には高校時代の同級生の友人が顔をそろえており、まことに心強い限りです。あらためて、我々もそんな年代になったのだなあ実感いたしました。

第二の人生をこうしてスタートさせ、このところよく考えるのは、自分にとって「心の安らぎ」とは何なのか、どうしたらそれを求めることができるのかということです。

実家で気分転換をしたり、墓参りをして先祖に祈ることも多くなってきました。

宗教にも今、たいへん関心を持つています。これも「心の安らぎ」を求める気持ちが強くなっていることと関係がありそうです。今度一度、坐禅を組んでみたいと考えています。その折にはぜひご教示いただきたく存じます。

自然の流れのままに

意義ある人生を

兵庫県 東郷 優

「始め有らざるなし、克く終わり有るは鮮し」と申しま

すが、とにかくにもこの春無事に、三十七年間お世話になった株式会社ナリス化粧品を退社いたしました。終わりをめでたく結ぶことができたことを本当に感謝しております。

ふり返れば、ナリスに勤めさせていただいてよかったと思えることが数多く思い出されます。仕事も楽しかったし、すばらしい人との出会いもたくさんありました。先代社長との出会いは、まず一番にあげられます。「ああ、この人なら信じてついていける」と確信して、ともに仕事ができたことは、一生忘れることはで

きないと思えます。職業こそ違いますが、黒田武志先生との出会いも、私の人生の貴重な宝です。初めてお会いしたときの印象を今でもはつきり覚えています。「初対面だというのに、なぜかとても懐かしい思いがする人間がいるものだ。まるでずっと以前から、目に見えない何らかの手で出会わせていただけたような気がする」と感じたものでした。そして、会うたびに、先生に強烈に魅きつけられていったのです。「何という奥深い男だろう。強く激しく情熱的。なのに、その中に繊細な感じやすさと優しさを兼ね備えてい

る」。この一見不条理な性格の複合性が、きつとすばらしい魅力となつていたのでしよう、先生はあれよあれよという間に大きくなられました。

そんな黒田先生に最後にお別れのご挨拶をいただいて、とても嬉しく感じました。ナリスの苦難時代を偲び、そして、現代は繁栄に踊り忘却されがちな、*「続ける」ということ*の大切さを語られました。私も最後までナリスが好きでしたし、今でも死ぬほど好きです。

退社するとも私は、「四月には、桜が咲くと同時に新入社員もたくさん入ってきます。

これから咲くもの、散つていくものがあるのは自然の流れ。その流れのままに、退めさせていただきます」と最後の挨拶をいたしました。「会社にも六十歳前後の人がたくさんいます。よくいってくれました」と喜んでいただけました。

しかし、愛着と未練……。退社後一カ月間は、それは淋しい気持ちがありました。

ふと、黒田先生に昔いただいたご本の一節を思い出しました。これは、ある一禅僧の言葉です。

『人の世は微妙なり。ある時期は大いに有用であり役立つ

た人物でも、その時期が過ぎて新しい時期に移れば、もう用をなさぬもの。四季の衣服に似たり。春は春衣。季節季節に用をなす。四季は毎年相似たり。人相同じからず』

まったく思いました。今は心も落ち着き、収入も大事ですがそれ以上に、意義ある人生を過ごすために、武士は食わねど……の精神で、自責し、己を厳しく律して参らねばと思っております。

かつて先代社長にこんなふうに教えをいただいたことがあります。

「君は小学校卒だね。それはそれで良い。でも人並ではない

けない。この訓を基とせよ。

貧富貴賤は天命で有つて神道に立つ。繁栄は祖先の余慶と伝統の厚恩による。これを忘れることなく忠勤せよ。利欲の私道を絶ち、かたく義理の本心を守りて立てるならば、富貴決して偶然にあらず。

これから余命も、この教えを胸に歩んで参りたいと思ひます。

黒田先生には長年、兄弟共々たいへんお世話になりました。まだ一人、傾奇者かばきが残っております。かぶき者を指導することは不可能といいますが、しかし、だからこそお

もしろい存在なのかもしれません。どうぞよろしくお導きのほどをお願い申し上げます。



善光寺住職・黒田武志老師の軌跡

『明日を生きる』に寄せて

●「明日を生きる」は、人生の指針として、まことにありがたく、参考になりました。もっと早く読んでいれば、私の人生観もだいぶ変わったように思います。

静岡県 岩谷 朝吉

●黒田方丈さまの人生の歴史と年輪を感じ、また、人間の生き方がありのままに表現されていて感銘を受けました。人間、一生懸命に打ち込んでいけば、無常の中にならながら、それは永

遠に尽きることない仏の大生命に通じることであることを教えられ、私もそのように生きていきたいと思います。

東京都 林 博明

●「明日を生きる」を読み、心温かく、豊かな気持ちを持たせていただきました。

神奈川県 田村 憲子

●青春の日の夢から、日常の五心に至るまでの、

黒田ご住職の生きざまを拝読し、たいへん感動し、自分自身が磨かれました。

東京都 斉藤 稔

●心に染まる「明日を生きる」を、永く座右に置かせていただきたいと存じます。

埼玉県 永井 光延

●黒田先生の貴重なご体験、感銘深くし、心身ともに引き締まる思いがしました。ナリス講堂の参禅会は、早や二十七年前になります。先生のご指導はなつかしく、生命に強く印象に残っております。

兵庫県 面川 勝治

●「いったいこの感じは何だろう」と、何か言葉ではいえない幸せな感覚を味わわせていただきました。仏教の仕事にたずさわり、数多くの

書物を読んだはずなのに、「明日を生きる」はまったく新しい新鮮な感動です。仏教の誠は托鉢——本当に嬉しい文を読ませていただきました。

静岡県 山口 博信

●ご苦勞された体験や、多くの尊い経験が、今の武志様を生んだんですね。白純様の穏やかな姿が浮かんでまいります。

神奈川県 黒田 トシ

●黒田住職さまのお若い頃のご修行の様子を知ることができ感動いたしました。いっそうのご指導をよろしくお願いいたします。

大阪府 金田 孝子

●幼少年期のご苦勞の数々、托鉢修行の厳しさには並々ならぬものがあり、涙のにじむのを禁じえませんでした。ありがたく、誠に法幸に存

じ上げます。

長野県 伊藤 真愚

ります。

東京都 宇衛 康弘

●「明日を生きる」にはたいへん感銘を受けました。以前からいろいろとご活動の様子は聞きしてはいましたが、詳細なお話を読ませていただくのは始めてで、あらためて感動いたしました。

神奈川県 新井 勝龍

●たいへん興味深く、心打たれる思いで読ませていただきました。

神奈川県 田中かほ里

●あの特異な体験、修行があつてこそその海外留学僧派遣育英会の発願・発表であることを深く感じさせられました。ありがとうございます。

静岡県 鏡島 元隆

●黒田ご住職さまには頭が下がるばかりでございます。私も、私自身のやり方しかできませんが、少しでもご住職さまに近づけるよう精進いたす所存でございます。

神奈川県 萩生田千津子

●黒田さまのご講演「明日を生きる」にはたいへん心打たれるものがありました。今後ともご活躍くださいますよう、心より念じ上げてお

新名称「横浜善光寺留学僧育英会」に 決定

横浜善光寺の黒田武志方丈が理事長を務める、「善光寺海外留学僧派遣育英会」の名称が平成五年二月六日に開催された理事会において、「横浜善光寺留学僧育英会」に変更されることが決まった。日本の若き僧侶を海外へ送り、仏教の原点にもどり互いを尊重し理解し合い世界平和へ導くことを願ってスタートしたこの会。設立九年を迎え、海外からの日本留学希望者が年々多くなってきたことから、この新名称が誕生することとなった。

新名称決定と同時に、名誉顧問、顧問、理事、参加が新たに委嘱された。

横浜善光寺留学僧育英会新名誉顧問は次のとおり。

大本山永平寺貫首

丹羽廉芳禪師

大本山総持寺貫首

梅田信隆禪師

天台宗座主

山田恵諦猊下

東京大学名誉教授・東方学院院长

中村 元先生

大韓仏教曹溪宗

尹月ユングオルハ下禪師

スリランカ大菩提会会長

靈鷲叢林通度寺方丈

ヒデイガレー・パナテッサ大僧正

タイ国ワットパクナム住職

プラタムパンヤーボデー大僧正

森山南米開教総監の激励歓送会
開かれる

森山南米開教総監の激励歓送会 開かれる

この春、南米開教総監としてブラジルの南米別院仏心寺に赴任した森山大行老師を激励して歓送する会が平成五年二月十二日、横浜

中華街で開催された。この会は、横浜善光寺の黒田武志方丈が中心となり、善光寺留学僧育英会が主催したものだ。黒田方丈と森山総監は、駒沢大学茶道部の先輩後輩という間柄で、長年の道友同士。当日は、善光寺育英会の関係者や森山総監とごく親しい友人知人、約四十名が会場である「華正楼」の新館に集まった。

まずはじめに発起人を代表して、善光寺留学僧育英会の常務理事である千葉県柏市、龍光寺住職・佐藤俊明老師が挨拶。

「海外布教の若返りのために喜ぶべきことと思います。十年前、善光寺さんの紹介で森山師に会ったときから、「これは絵になる風貌だ。将来、輸出できる禅の顔だ」と感じましたね。これから開教総監となり、「ビシヨップ森山」つまり「森山禪師」と呼ばれることになるわけですが、これはたいへんすばらしい名譽なことです。しかし、その一方で、地球

の裏側の国に出向くということは、さまざまに困難も待ちかまえていることと思います。どうか、苦難も乗り越えて、四年の任期を少なくとも三期ぐらいいは務めるぐらいの気持ちでがんばってください」

と激励の言葉をのべられた。

次いで、森山老師が出家する前の学生時代から三十五年來の友人という仙台市 大満寺住職・西山広宣氏（東北福祉大学助教授）が、「互いに切磋琢磨しあったかけがえのない友」と交遊の一端を披露。

善光寺の黒田方丈が出席者一人ひとりを紹介したあと、森山総監の道友、神奈川県 吉祥院住職・小秀夫老師が乾杯の音頭をとった。

森山総監は、

「日本の仏教界のことは諸老師におまかせします。ブラジルのことはどうぞ私におまかせください」

とユーモアまじりに決意のほどを語り、ごく親しい友人たちの心のこもった集いに終始、感激の面もちだった。

黒田理事長、辞令を渡すため 韓国、タイ国へ

理事会で決まった新名誉顧問の辞令を渡すためさっそく二月、横浜善光寺留学僧育英会の黒田武志理事長が、韓国の大韓仏教曹溪宗靈鷲叢林通度寺の尹月下禪師のもとを訪れた。次いでマレーシアのメタ・ピラ禅堂視察の序でタイ国ワットパクナム住職プラタム・パンヤーボデー大僧正と会見、辞令を手渡した。お二人とも国を代表する高僧。両氏は快く黒田理事長を歓迎し、これからも育英会を通じて親睦を深めていこうと誓いあった。

また、三月にはスリランカ大菩提会会長の



プラタムバンヤーボデー大僧像正



尹月下禪師

ヘデイガレー・バナテッサ大僧正が来日。四月二日(金)横浜善光寺を訪れ、黒田方丈と親しく歓談され、今後も相互の交流をはかり、世界平和のために力を合わせていきたいと激励の言葉を交わし合った。



ヘデイガレー・バナテッサ大僧正と

東隆眞先生、中外日報と大法輪で まぶこころを説く

長年の夢だった韓国の曹溪山松広寺拝登を、昨年八月に果たした駒沢女子大学副学長・東隆眞先生(横浜善光寺留学僧育英会理事)の論文『韓国松広寺と普照国師知訥』が、四月九日、十二日、十三日と三回に亘って中外日報に連載された。曹溪山松広寺チョググサンソングワクワンサは、大韓仏教曹溪宗の三大寺院の一つで、僧宝の寺院としても知られ、韓国の禅の根本道場として位置づけられている崇高な仏教寺院である。松広寺の開山の祖は普照国師(一一五八―一二一〇年)。智訥禪師と呼ばれ、曹溪宗開山の祖ともいわれている高僧。

松広寺の前住持から、知訥禪師の著作を集めた全集『普照全書』を恵与された東先生

は、その中におさめられている『真心直説』についても紙上でわかりやすく教えてくださっている。人間が誰でもそなえている『まごころ』。しかし、本当のまごころの力を発揮できる人もいれば、そうできない人もいる。どうすれば、発揮できるのか：先生のご文章によつて、日本や台湾にも伝わっている、まごころの真の意味と大切さを、読者は改めて気づかされるだろう。

また、東先生は、知訥禪師の禪と、日本の道元禪師の禪の共通点と差異点を示し、両者を比較考証してみること、日韓の相互理解と交流をはかることに役立つと述べられている。そして最後に次のように結ばれている。「いま、地球、人類の危機的状況のなかで、宗教、仏教の位置づけと役割が問われている。(中略) 仏教者である限り、僧侶であろうと学者であろうと檀信徒であろうと、それぞれ

重大な責務を担っているはずである。大乘仏教と上座仏教を問わず、日本と韓国とを問わず、縁のあるところから、できるところから、釈尊の真心に通じる道を探っていかなければならない。このたびの韓国・松広寺拝登は、そのことを私に教えてくれたのであった」

『大法輪』六月号には「台湾・台北の仏教点描」と題し、昨年十二月に、黒田方丈と訪問した台北市の仏教事情などを発表されている。ここには、「真心直説」の関係資料を蒐集するなかで、台湾の僧・林秋梧法師と、駒沢大学第八代学長・忽滑谷快天博士との深い師弟関係を知ることとなった経緯などが述べられている。林秋梧法師は普照国師の著作『真心直説』の注解書『真心直説白話注解』を著わしている。

善光寺ニュース

育英生韓仁徹氏がフィラデルフィアに 観音寺を建立



善光寺留学僧育英会第八回育英生である、
韓国の韓仁徹氏がこのたびアメリカのフィラ

デルフィアに
「観音寺」を
建立した。

韓仁徹氏
は、立正大学
大学院文学研
究課で博士後
期過程仏教学
を専攻。物質
的には繁栄を
享受しながら、
その反面、



▲観音寺

精神的には孤独感と淋しさを抱いている現代人を、仏教の教えによって救っていきたいと願い、絶えず未来社会を見つめ、これからの仏教徒のあり方を考え続けてきた。私たちはもともと世間に対して、精神的な依るところとして貢献しなければいけない。つまり多くの人びととその苦しみをともに味わい、その苦痛から立ち上がる智慧を彼らに揭示しなければならぬ。観音寺——カンノンブツデイス トテンブルは、きつとアメリカ在住の多くの人に心の安らぎを与える場所となるだろう。

浅草寺「仏教文化講座」で 黒田方丈が講演

東京・浅草寺が主催する第四四九回「仏教文化講座」が、四月二十三日（金）に新宿駅西口の安田生命ホールで開催され、黒田方丈



が「海外に留学僧を派遣して」と題して講演。育英会を設立した動機や現状などを、心を込めて語った。

育英会顧問の小谷亀太郎氏 駒沢女子大学を訪問

善光寺留学僧育英会顧問で、タイ・バンコクにある世界仏教徒連盟本部事務次長の小谷亀太郎氏（バンコク在住）は、来日中の五月十七日（月）、黒田方丈と共に駒沢女子大学を



訪問し、東隆真副
学長（善光寺留学
僧育英会理事）の
案内で、学内を見
学した。

育英生引田弘道氏が日本印度学
仏教学会賞を受賞

五月二十二（土）、二十三（日）の両日、高
野山大学で開かれた日本印度学仏教学会（印
度学・仏教学における最大の学会）、第四四回

学術大会において、善光寺留学僧育英会の奨
学生・引田弘道氏（愛知学院大学文学部助教
授）に、日本印度学仏教学会賞が授与された。
昨年十一月の東方学会賞（東方学会）に次ぐ
受賞である。心からお祝い申し上げます。

不動明王大祭並びに
大般若会法要を厳修

五月二十八日（金）午前十一時から、恒例
の身代り不動明王大祭並びに大般若会法要が



金岡秀友先生

佐藤俊明老師を大導師に厳修された。多勢の皆様が参集。家内安全、身体健全、商売繁昌など、御祈願・御祈禱が執り行なわれ、東洋大学・金岡秀友先生の講演に、耳を傾けた。

不動明王大祭香語

火中現身眼発瞋

火中身を現じ眼、瞋を発す

金剛宝剑払根塵

金剛の宝剑、根塵を払う

明王威徳昭昭顕

明王の威徳、昭昭として顕かなり

成寿山頭緑樹新

成寿山頭、緑樹新たなり

恭しく惟れば、山門本日 身代り不動明王

大祭の吉辰に相値う。
謹んで大般若経を転読し、聖不動経・慈救呪・消災妙吉祥陀羅尼を誦誦し、その功德・回らし以て身代り不動明王に供養し奉る。
専ら祈る。正法興隆、万邦和楽、国土安隱、

山門鎮静、消災消除、諸縁吉祥ならんことを。更に祈る。当寺総檀家中、本日参詣の善男子、善女人、諸願成就、如意吉祥ならんことを。至禱至禱

島崎義孝氏が善玄寺の住職に

横浜善光寺留学僧育英会の第3回生で成寿寺でお馴染みの島崎義孝氏が少林山養玄寺に住職として入山されました。今後のご活躍を期待いたします。



◇ 成寿歌壇 ◇

わが道は念と行との二人づれ

行くべき処着く処仏まかせの旅路かな

手にあまる大き荷物を背負いつつ

今日も山路を登りゆくわれ

とし重ね老の身なればしみじみと

そのさみしさとその実を知る

(東京都 錦戸 新観)

巡拝の金剛杖にとりすがり

室戸岬の荒波に立つ

小波立つ池の面は白鷺の

影なうつつして朝日輝く

(香川県 豊永 緑)



天童寺住持明暘法師を名誉顧問に推戴

横浜善光寺留学僧育英会

李幼麟さんは上海復旦大学を卒業、良寛研究のため来日、駒沢大学に留学し、善光寺留学僧第三期生となった異色の人材である。この李さんを案内役として今回の中国訪問が企画された。目的は、一、天童寺拝観と住持明暘法師を名誉顧問に推戴すること。二、杭州浄慈寺拝観と如浄禅師の墓前に詣でること。三、北京雍和宮（ラマ教寺院）で修行中のラマ僧嘉木揚凱朝を留学僧として受入れるについての最後の詰をおこなうことの三点。

六月十六日天童寺に拝登すると、明暘法師、予定が変わり昨日上海の龍華寺（兼務寺）に出かけられた由。そこで徳雲副監院並びに上海人民政府高官王生洪先生を通しての電話連絡により、私たちの旅行日程に合わせて二十日北京の広濟寺（兼務寺）で会ってくださることになった。それで予定通り翌十七日は杭州に赴き、浄慈寺に拝登、釈聖興知客和尚の案内で如浄禅師の墓前で読経。ついて十八日北京經由で西安に飛び、大雁塔、小雁塔拝観、兵馬俑坑、玄宗皇帝と楊貴妃の遊んだ華清池など観光し、二十日北京に戻り、広濟寺



に明陽法師を訪れ、名譽顧問就任をお願いした。役員名簿を提示すると、「両大本山狹下、山田天台座主、中村元先生等の名前をごらんになり、「みな知ってる方々」と顔を綻ばせて快諾、堅く握手をかわして激励してくださった。

次に二十一日、ラマ僧の受入れについて、これは半年も前、台湾の林夫人を通して北京雍和宮で修行中の嘉木揚凱朝を留学僧として受入れてほしい旨連絡があり、本人からも必要書類が送られてきたが、入国手続や身許引受け等につき調整が難航した。というのは、片や台北、片や北京、そして日本語が通じないというのが原因。そこで今回、三者が北京で会合し、結着をつけることになった次第。李さんの同時通訳で話は首尾よくまとまり、嘉木揚凱朝は九月以降愛知学院大学に入学可能の見込み。

今回の旅行の成功は李さんの語学力、人脈、そして人柄に負うところ極めて大で、善光寺留学僧がその力量を発揮してくれた最初の成功例といえなく、これは善光寺留学僧育英会としての画期的な成果だった。




読者のたより

雪深い中で
読む温かさ

沖田 玉映
新潟県

私は今、雪深く、熊も出るような山奥に入り修行をしております。医者に行ったり用事があるときは、新潟市内に泊まりがけでいくようなところです。そのような地で拝見させていただいた、成寿第二十号…。善光寺老師さまのご活躍ぶりがわかり敬服するばかりです。スリランカの仏跡からは、はるか昔の人びとの願い求めた聖境のありさまが伝わってまいりました。また、

永平寺、総持寺参拝の旅では、みなさま本当に和やかに深い絆で結ばれていることを感じ、とても穏やかな幸せな気分となりました。このような気持ちになれるご本を拝読する機縁に恵まれたことをしみじみとありがたく思っております。

仏さまに感謝して
生きるすばらしさ

伊藤 幹雄
兵庫県

子どもたちがそれぞれ成長し、長男は来年大学を卒業予定で就職も決まり、次男は今年四国の大学に入学できました

た。これもすべて、仏さまの
ご加護の賜です。私の社業も、
研修センターが増築された
り、工場の生産現場の拡張を
予定していたり、順調に発展
しています。これもまた、仏
さまのおかげです。日々仏さ
まに感謝して生きることのす
ばらしさを実感しています。

「心もそろろう」を
口ずさんで

東京都
大金きよみ

私は小さい頃から、仏教少
年少女会に毎週土曜日に行っ
ては、和尚さまのお話を聞き、
終わると、「月影の歌」など歌

ったり、おゆうぎをしながら
楽しく家に帰ってまいりまし
た。そのおかげで、八十三歳
になった今も、毎日「ナムア
ミダブツ」を唱えぬ日はあり
ません。このごろは、それと
同時に、『成寿』第二十号の一
五四ページにあった、藤本幸
邦さまの、「心もそろろう」とい
う詩を口ずさむようになりま
した。

『はきものをそろえると心
もそろう

心がそろうとはきものもそ
ろう

ぬぐどきにそろえておくと
はくどきに心がみだれない
だれかがみだしておいたら

だまっつてそろえておいてあ
げよう

そうすればきつと

世界中の人の心もそろうで
しょう』

今日は病院で、私も人のほ
きものをそろえてまいりまし
た。なんだか嬉しい気持ちに
なりました。

『成寿』は貴重な
情報源

千葉県
村田 一夫

「宗派の垣根を越え、グロ
ーバルなものの方ができる
修行を目指して、世界的な広
い視野を持ち、国家を越えて

相互理解し合える僧を一人でも多く世にだそう」として始まった、海外留学僧派遣遣育英会も、すでに九回を数えるとのこと。黒田方丈さまの力強さ、信念に心打たれます。

『成寿』も第二十号に達し、ますますおもしろく内容深く、毎回楽しませていただいています。海外旅行に満足にいけない小生は、貴重な情報源として、有意義に拝読させていただきます。方丈さまのまごころに、合掌し、感謝申し上げます。

スリランカの写真、
なつかしく

長野県
小笠原隆元

私は二十年ほど前にスリランカに訪れたことがありません。ダンダーラの石窟内の壁画と仏像のすばらしさには圧倒され、あのとときの感動は忘れられません。このたび『成寿』でスリランカ各地の写真や報告書を見て、なつかしく嬉しい思いがいたしました。『成寿』は、いつも数冊まとめては製本して、私の枕元に置いてあります。本当にありがたいことです。

日常から離れて
ホッとして

東京都
栗本 将信

日々、会社という大きな組織の中にいて、疲れ切つてしまいそうになったとき、私はときたま、感動的な外の世界へ旅立ちたくなります。映画を見たりしてホッとするときもあります。数年前にはスリランカへ旅行しました。今回、『成寿』で、聖山シーギリアの乙女の壁画や、涅槃像の写真を見て、なつかしさを感じ、ホッとした気分が甦りました。

すばらしい出版活動に
感激

千葉県
椎名 宏雄

黒田武志住職の『明日を生きる』を読ませていただき、
托鉢行脚時代のご辛苦にいた
く打たれました。こうした、

一般僧侶にはなかなかマネの
できない積極的な活動性が、
黒田老師を形成する大きなエ
レメントであることは疑いあ
りません。

美しいグラビア、大きく見
やすい活字、そして、ますま
すコクのある記事の数々……こ
れだけのすばらしい仏教誌

を、仏教界における絶大なる
出版活動として誇りに思い、
ますます発展していくことを
心から念じております。

ただただ主人のおかげと
感謝

神奈川県
里 チエ

私どもは、終戦を迎えた翌
年の昭和二十一年の十一月に
朝鮮から引き上げてまいりま
した。しばらくは私の実家に
家族でおりましたが、東京へ
行くという主人について、息
子三人とともに実家を出て自
立することになりました。戦
後の混乱期、どうなるかとも

思いましたが、紆余曲折を乗
り越え、主人はたいへんな苦
勞をして自分の仕事を持って
くれました。おかげで三人の
息子たちを、何とか食べさせ、
教育することもできました。

私も息子たちも、主人のこ
とは、本当にすばらしい努力
の人だとしみじみ思っております。
それに比べて私は、何
の能力もなく平凡で、ここま
でやってこれたのは、ただた
だ主人のおかげ、と、仏壇に
お供えをして、感謝する毎日
です。

心の富める者に
なりたい

石川県
大平れい子

日蓮上人さまは、「私は日本一貧しき者なれど、仏法をもつて論ずれば、第一の富める者なり」とおっしゃいました。日蓮さまは、清貧に甘んずる生活をしながらも、心の中はいつも豊かで、靈山浄土の釈尊とともに生活しておられるような、法悦に満ちあふれたお気持ちで過ごされたのです。

ありあまるほどの物の中で、ぜいたくに暮らしながら、

心の中は貧しく、殺伐とした現代に住んでいる私は、日蓮さまの生き方を見て、大いに反省いたしました。まだ二十歳なので未熟ではありますが、日蓮さまのような心の富めるような人になれるよう努力していきたいと思えます。心の富める者とは、信仰の中から生まれてくるのですね。

カラーグラビアの
すばらしさに感銘

神奈川県
落合 一恵

このたびのスリランカご訪問といい、黒田老師さまのたゆまぬご着想とその行動力に

はただただ感服させていただいております。私などの思考発想をはるかに超越した、まさに雲上人のごとき存在にさえ感じられ、このようにお手紙を差し上げることも恐縮に存じます。今回の『成寿』も、いつもながらの内容の充実に加えて、カラーグラビアのすばらしさに感銘いたしました。この上は、ご老師さまの高邁なご誓願、「宗祖を通して釈尊に還れ」の精神がますます円えんじょう成されますようにお祈り申し上げます。

スリランカの様子が
よくわかりました

神奈川県
安藤 嘉則

今回の『成寿』では、黒田
老師の「明日を生きる」、また
「スリランカ特集」にとても
心魅かれました。「明日を生き
る」には、たいへん感動を覚
え、今日の善光寺における教
化活動・海外留学僧派遣育英
会の原点を、老師の若き日の
行脚の日々に見たような思い
です。「スリランカ特集」では、
巻頭グラビアは貴重な写真で
あり、同時に現在のスリラン
カ仏教の様子を詳しく知るこ

とができました。私の尊敬し
ているウパティッサ師が幾度
か写真に登場されており、師
が情熱を傾けているスリラン
カの幼稚園の様子も知ること
ができ、本当に嬉しく思いま
した。

回をおうごとに
充実するご本

福島県
遠藤 由美子

光陰矢の如しの言葉のよう
に、御母堂さまがお亡くなり
になられてから一年余が過ぎ
てしまいました。まるで夢の
ようでございます。どんなに
かお淋しい毎日であられたこ

とかと謹んでご拝察申しあげ
ます。ご無沙汰を重ねており
ますが、早く拝登しご焼香さ
せていただきたないと、その日
を待ち望んでおります。

雪に閉じ込められておりま
すと、無性に横浜の空気がな
つかしくなります。時折、『成
寿』を拝読しながら、回をお
うごとに充実する内容に驚き
つつ、温かい思いで胸一杯に
させていただいております。

黒田方丈さま、奥さまがおひ
まになられることは絶えてな
いのかもしれませんが、いつ
か心ゆくまでお話できたらど
んなに嬉しいかと、お優しい
お声を思い出します。お目も

じ叶いますことを、心から願
っております。

大好きな善光寺さまに
納骨させていただいて

神奈川県
中尾 憲悦

昭和五十八年三月、私は善
光寺さまに、亡き家族の遺骨
をお預りいただきました。離
れがたい気持ちでいっぱい
ございましたが、いつまでも
そばに置いておくわけにもい
かず、それに納骨は私の念願
でもありましたから、一番安
心できる、大好きな善光寺さ
まに納めさせていただいたの
です。あの日から十年余り：

方丈さまはじめ皆さまには、
本当にお世話になりました。
ありがとうございました。無
事に今日の日を迎え、本望で
ございます。

善光寺さまにおうかがいす
るたびに心が安らぎ、自分の
実生活のみにくさに恥ずかし
い思いがいたします。生きて
いる限り、その現実との戦い
が続くのでしょうか。人生
を前向きに考え、できるかぎ
り周りの人の幸せを思っ
て暮らしているつもりな
のですが、しよせん、私は
驕りたかい人間なんだと反省
することがあります。

近い将来、私も横浜を離れ

る日がくるかもしれませ
んが、どこに行きましても善
光寺さまのことは一生涯心
に残ることと 생각합니다。

方丈さまもお体を大切にな
さって、どうぞますます皆さ
まを希望と安らぎへお導き
くださいませ。奥さま、お寺の
皆様によりしくお伝えくださ
いませ。ありがとうございま
した。





多くのお便りありがとうございます。
ございます。



★『成寿』は、かたちも中身もたいへん立派なもので、一寺院でよくぞここまでと感服いたしました。

東京都 井上 文夫

★佛心理解にはほど遠い者で

すが、毎回、文章、写真、絵それぞれに心ひかれ、しばし時間のたつのを忘れます。ありがたいとは、このような時間に逢えることと勝手に解釈しながら、拝読させていただいております。

神奈川県 広島 一雄

★いつも頭の下がる思いで記事を拝読させていただいております。このたびはスリランカ特集としてたくさんの写真が載っており、かねてスリランカの仏跡を参拝した頃のことを思い出し、なつかしく思いました。

東京都 芦辺 鎌禅

★美しいスリランカの写真の数々、堪能させていただきました。

東京都 飯田 利行

★生長の家の機関誌「光の泉」で、黒田武志住職の「じんせい拝見」の記事を読みました。世界平和というグローバルな願いをこめてのご活躍に、あらためて敬意を表します。

栃木県 大嶋 正

★おかげさまで私も元気でおります。親が元気でいることが、子どもへの思いやりと都合よく考えてがんばっています。

神奈川県 石川多加子

★私は、スリランカの聖地を頭において書かれたであろうと思われる「バクテイ シャタカ」なる讃歌を訳したことがあります。ですから、各写真に興味深く拝見させていただきました。

東京都 真野 龍海

★余暇をみて心静かに拝読させていただいています。黒田ご住職さまの御心の豊かさ、寛大さ、そしておやさしさが私の心の奥深くにしみ入り、ただただ、感慨無量でございます。

神奈川県 栗林 豊

★『成寿』を拝読させていただき、かつて知るすべもない世界を、今はふるさとを思うような気持ちで受け止めることができると感じました。これからもどうぞお導きください。ありがとうございます。

岡山県 島屋原百合子

★郵便物の中に、本山から配送された『眺竜』四月号が入っており、読んで参りますうちに御老師が本山からの派遣僧として、タイ国ワット・パクナムへの記事云々があります。

した。

この御寺は、私にも御縁があり、去る昭和五十八年二月梅田禅師様のタイ国公式訪問の折、私も御随行を許され、参拝して参りました。早速その時のアルバムと日誌を取り出し、当時を思い浮べた次第です。

アルバムからは、お寺の所々に沢山の日の丸の旗が立てられ、禅師様大歓迎の横断幕も掲げられ、僧達の盛大な御出迎えをいただき、又日本からの留学僧もおられ、案内と通訳に当っておられました。そしてアルバムの写真説明には総持寺とゆかりの寺ワ

ット・パクナムと記してあり
ました。

又、日誌では、法要で大悲
心を皆と諷誦すと書いてお
り、当手を振り返り懐しく思
った次第です。

大曲市 鈴木光太郎

★急に大玄さんにお会いでき
る機会を得ました。

大玄さんとは十年前のアメ
リカのミネソタ以来の仲でござ
います。大玄さんが佛門に
入られることとなり、しかも
曹洞宗に関心を持ち、偶々ご
老師より得度をしていただき
ましたが、何とご老師のご親
戚が私どもの近くの常在院様

とは、ご縁の不思議なことに
只々驚くばかりでございます。

今回おみやげに、貴寺の機
関誌「成寿」をいただきましたし
て有難うございます。興味深
く読ませていただいております。
ご老師の、今は亡きご母
堂様に寄せられる追慕の念
を、私も同じ気持ちで拝読致
しました、ご母堂様のご冥福
をお祈り申し上げます。

また真摯な佛教者として生
きようとする熱意のある若者
に慈愛あふるる手をさしのべ
られ、報恩事業として海外留
学僧派遣育英会を運営されて
おられることに深く感銘を受
けております。この事業の

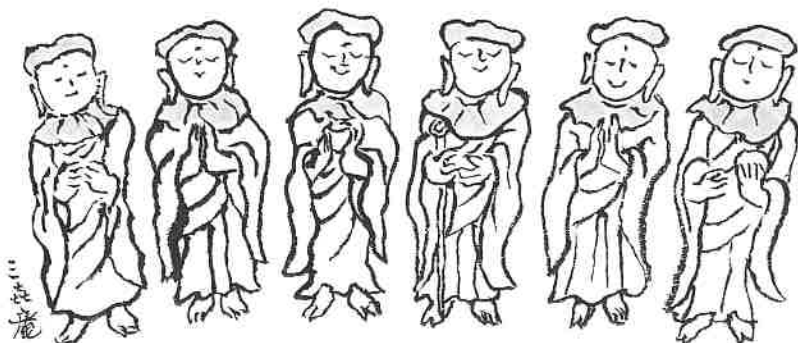
益々の発展を祈念申し上げる
ばかりでございます。

福井県 田中 孝学

★いつも楽しく、また、気持
ちが引き締まる思いで拝読し
ています。黒田方丈さまをは
じめ周りの方々が活き活き
と、そして清らかに生活して
おられる様子が伝わってま
います。

埼玉県 今泉 源由





いつも温かいおたよりありがとうございます。成寿では、読者のページをいっそう心ふれ合う豊かなものにしていきたいと考えております。そこでみなさまからさまざまなテーマのおたよりを募集し、掲載させていただこうと考えています。

●テーマ例

「私の新発見」「お料理アイディア」

「うちの素敵な家族紹介」

「うちの近所のユニークなお坊さま」

「私の作った詩、俳句、短歌」

「投稿写真」「成寿のご感想ご意見」など何でもけっこうです。

おたよりお待ちしております。

〒233 横浜市港南区日野町一六〇四

成寿山善光寺

「成寿」編集部

留学生からのたより

アメリカ

藤田 一照

ごぶさたしております。先日は『宗教と現代』『女性佛教』を送って下さりありがとうございました。自分の拙い文章がああいう雑誌に載って少々気恥しい気がします。

さわやかな初夏をむかえ畑仕事が本格的に始まりました。4月末から5月はじめにかけてロスアンゼルス市の禅宗寺の坐禅会のみなさんがタサハラ禅センターで3日間の摂心をもたれ私を講師として呼んで下さいましたので、行ってまいりました。今月はもうひとつ近くの Insight Meditation Center という南方佛教系の Meditation をしているところで典座教訓の話をする事になっています。来月はボストンの同じような Meditation Center で『磨磚作鏡』というテーマで話をします。曹洞宗の僧がこの界限にあまりいないので私のような未熟者にもこういう依頼があるのです。自分の勉強と思ってひきうけさせてもらっています。

先日、例の修道院を Easter 祭の折にたずね、古式にのっとりた儀式に参加させていただきました。ある神父さんとも個人的にインタビューをしました。もう一度つっこんだところをきいてそのうちひとつの文章にしようと思っています。この神父さんは16歳の時からこの道に入られ現在45歳の方です。来歴、修道院での生活ぶりを中心にうかがいましたが、現在アメリカのキリスト教界の一部で進行中の瞑想ブームに対して伝統に立つ側から興味深い意見をいただきました。(この方はイギリス出身です。)東洋の修行法(Yoga や坐禅)の影響をうけてキリスト教の伝統の中に埋もれていた瞑想行を復活させようという動きがキリスト教の活性化の一端として進行中ですが、これをどう見るかというところに焦点をあててひきつづき学んでいきたいと考えています。またベネディクト会の会則を我々の清規の観点から検討してみると、双方の「僧院」という修行形態の異同が浮きぼりになるのではないかと、今、漠然とですが思っているところです。

はなはだ簡単ですが近況を述べさせていただきました。

2月の伝達式には参加できませんでしたが、他の第9回留学僧の方々にもよろしくお伝え下さい。

合掌

留学生からのたより

オランダ

早川 敦

理事長先生におかれましてはますます御清栄のことと御慶び申し上げます。

今週より第三学期がはじまりボーデヴィッツ教授のシュヴェーターシュヴァタラウパニシャッド、ファン・ダーレン博士のヴィシュヌプラナーナその他の授業に出席しております。先日ヘーステルマン教授と修士論文のテーマについて協議し、古代インドの葬儀について研究したらどうかとの指唆を頂きました。葬礼の研究を通じて古代インド部族社会の構造に迫ることができれば、仏教研究の面からも面白いかと存じます。

6月に佐藤誠司氏がキール大学に留学が決定との知らせを耳にいたしました。同氏にとってもインド学研究室にとっても慶賀すべきことと存じます。誠に研究室ぐるみで御恩にあずかり、感謝の言葉もございません。権氏、佐藤氏と共に学問に励み、御恩を報じたく存じます。

まずは右まで。末筆ながら理事長先生の一層の御健康をお祈り申し上げます。 謹言

93年 4月24日

ご寄付御礼

〈育英会寄付者〉

大津 正二殿 五百万円
 匿 名殿 百万円
 久保田賢一殿 三十万円
 越石 周平殿 十万円
 丹羽 徹象殿 十万円
 宮林 昭彦殿 十万円
 瀬之間政勝殿 十万円
 遠藤 岑翠殿 十万円
 中村 淳子殿 八万円
 三浦 靈園殿 五万円
 日本宗教研究会殿 五万円
 石川 征一殿 五万円
 飯塚 トリ殿 五万円
 永代 素宏殿 三万円
 安藤 康哉殿 三万円

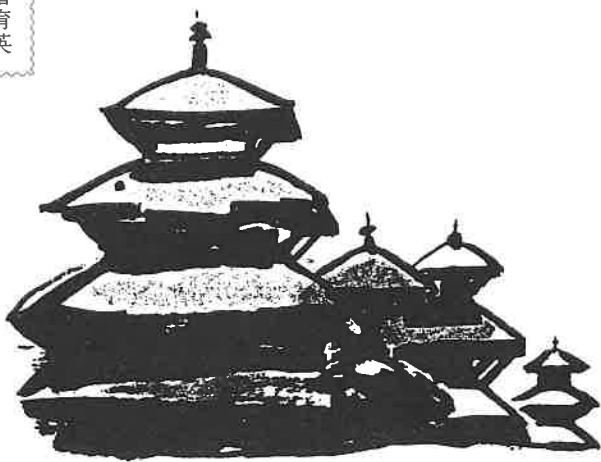
一郷 正道殿 三万円
 片山 一良殿 三万円
 柳下 明殿 二万円
 小泉 孝子殿 二万円
 中村 正信殿 二万円
 岩井 文子殿 二万円
 萩生田千津子殿 二万円
 太田 好信殿 一万円
 大場 満洋殿 一万円
 国安 智哲殿 一万円
 田代 盛夫殿 一万円
 越前 竹子殿 二万円
 新木 定夫殿 一万円
 松沼 正雄殿 一万円
 内海 忠男殿 一万円
 匿 名殿 一万円
 匿 名殿 一万六千円
 井上 葉智殿 五千円

須佐 栄治殿 一万円
 太田 正孝殿 一万円
 大金 五男殿 一万円
 稲垣 重弘殿 一万円
 田口 基夫殿 一万円
 羅 漢 寺殿 五万円
 潮 音 寺殿 四万円
 佐々木教悟殿 三万円
 宮本 延雄殿 三万円
 岩波 道俊殿 二万円
 石井 修道殿 二万円
 見 性 寺殿 二万円
 柴田 秀晃殿 二万円
 能 光 寺殿 一万円
 吉原木工所殿 一万円
 椎名 宏雄殿 一万円
 黒田 トシ殿 一万円

〈成寿賛助〉

豊永	太田	村上	島屋原	宮田	国安	伊藤	桜井	奥山	齊藤	徳山	大津	飯田	櫻井
緑殿	好信殿	博中殿	百合子殿	林産殿	智哲殿	真愚殿	秀雄殿	大観殿	みよ殿	暉純殿	正二殿	利行殿	和子殿
三千円	五千円	五千円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円	一万円

「横浜善光寺留学僧育英会」ならびに「成寿」に、上記の方々よりご寄付をいただきました。心からお礼申し上げます。



FOREWORD

Last autumn, Zenkoji-Temple women's club went and worshiped at Eiheiji-Temple and Sojiji Soin-Temple. It has been my dearest wish and I am very pleased that every participants were very glad about that.

Eiheiji-Temple and Sojiji-Temple, which are very famous as the headquarters of the Soto Sect in Japan, and many people for worship has been continuously visited there.

However, people has been gradually decreased who know the following facts; Sojiji-Temple had been at Noto Peninsula for 6 years, propagated Soto Sect doctrine all over Japan. It has been only 80 years or so since Sojiji-Temple moved Tsurumi Yokohama. That's what I thought we should go and worship Soin. Now I hope that every Soto Sect temples and believers must be more and more interested in Soin.

So this volume runs the writing of introduce Soin by Professor Azuma and the sketch of Soin. Please think of that as valuable treasure.

Next topic is my visiting Malaysia this spring. Rev. Sato's writing about this trip appears in this book, so that maybe you know that Zenkoji Scholarship has grown up to be called for by unexpected society. This is contrary to our first anticipation.

By the way, the countries which I visited with Rev. Sato reached 10, as a start we visited India 1987 and other countries. Fortunately, we celebrated 25 anniversary since our temple has established. A total member of scholarship priests were 47, and the countries where they went were 18. Now we are considering memorial events, and as one of the plans we think to publish travel book. Please looking forward to seeing this book.

編集後記

▼成寿二十一号をお届け致します。

一九八三年夏の創刊号から十年を経て二十一号となりました。毎号、伊藤三喜庵先生に表紙絵を飾っていたが、改めて創刊号から振り返ってみますと、感無量でございます。これも偏に檀信徒の皆様、善光寺に心をお寄せくださる方々のお力添えと、心から感謝申し上げます。

▼善光寺ニュースでもお伝えしましたが、「善光寺海外留学僧派遣育英会」の名称を「横浜善光寺留学僧育英会」と変更しました。留学僧は今までに18カ国47名を数えております。一寺院が始めたことではあります。次第に各方面から注目されてきており、その重責を感じますと共に、一層の努力をさせていただきた

いと思う日々でございます。

▼能登の総持寺祖院では、昨年八月に遷化された監院鷲見透玄老師の後に、鷲見老師と関わりの深い丹羽徹象老師が就任されました。善光寺育英会では丹羽老師を顧問にお迎え致しましたので、グラビアと本文で祖院を特集しました。

▼昨年十一月、スリランカ訪問の折に、大菩提会会堂で、ヘティガレー・パナティッサ大僧正にご紹介いただいてお会いしたエクスサランサー・R・プレーマダササ大統領は、五月一日、爆弾テロで暗殺されました。

半年前の大統領との固い握手を思うにつけ、あまりのショックな事件に、ただ驚くばかりです。心からご冥福をお祈り申し上げます。

▼三十年前の私との出逢いを綴ってくださった東郷敏氏の一文は、熱の

籠ったものです。第一部は次号も続きます。どうぞご期待ください。

▼次号の特集は中国です。道元禪師がご修行された天童寺を、佐藤俊明老師、黒田方丈が中国の留学僧・李幼麟師と共に拝登し、その記事を集めます。

▼7月23（金）、24（土）の両日は、本寺・栃木県光真寺の夏大祭です。参拝ご希望の方は善光寺事務局までお申し込みください。

▼盛夏を迎え、皆様には充分にご自愛くださいませ、日々を大切に過ごして参りましょう。

成寿 第二十一号

平成五年七月二十日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野町一六〇四

電話 〇四五（八四五）一三七一

FAX 〇四五（八四六）二〇〇〇

印刷所 神奈川新聞社出版局



三好庵





横浜善光寺